秋田県文化財調査報告書 第323集
払田柵跡調査事務所年報2000

払田柵跡

第117・118次調査概要

2001年3月

秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

ほったのさくあと

払田柵跡

第117・118次調査概要

2001年3月

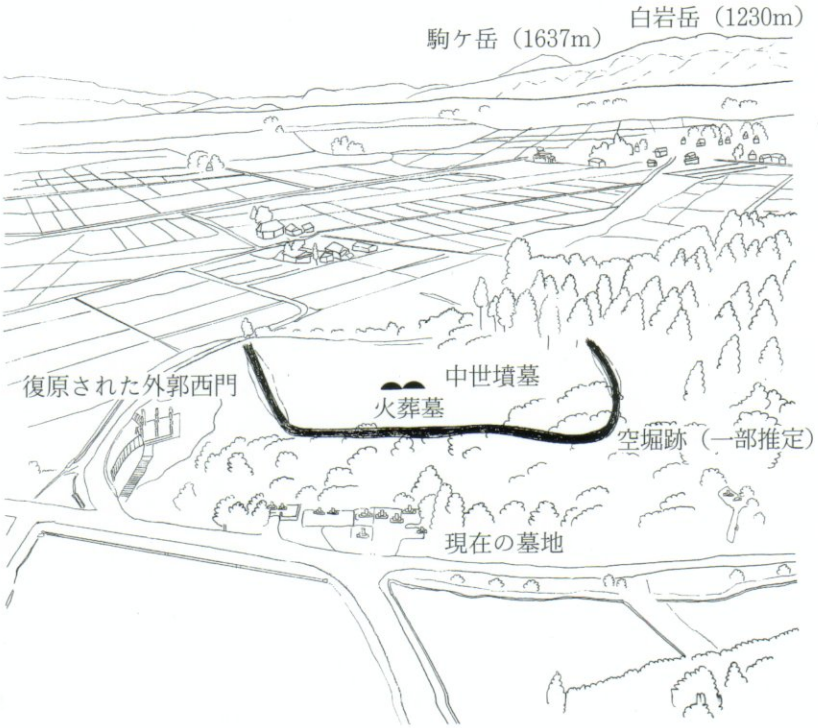
秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

長森丘陵西部全景

（第117次調査区、南側上空より）

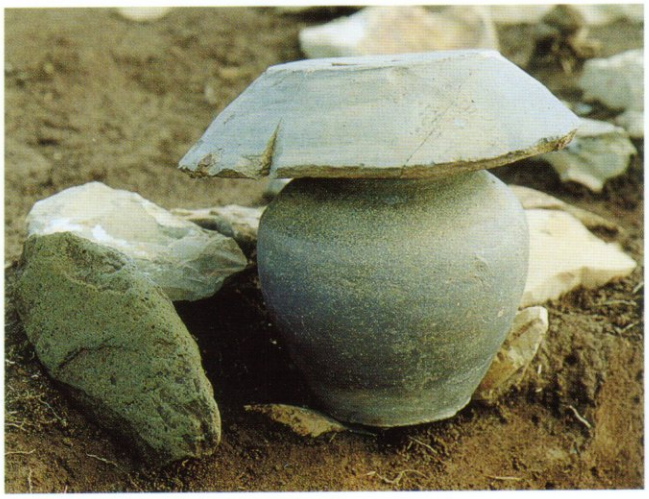
平成12年5月10日撮影

この区域には以前より土塁・空堀の存在は知られてはいたが、これが後に検出された中世の墳墓・火葬墓と関連をもつものとは全くの予想外のことであった。丘陵南側麓には現在の墓地があり、何かの因縁を感ずる。



上：墳丘部土層断面（南西→）

矢印の下が現表土直下に埋設された陶器（蔵骨器）。ここは周囲よりいくらか高まりをもっているが、陶器が出土しなかったら墳丘をもつ墓とは認識できなかったかもしれない。写真左手前には本墳墓あるいはSX1265に伴う集積された円礫確認状況。



中：陶器出土状況（西→）

雑な組み方ではあるが、扁平な礫を敷き、その上に陶器を埋設している。高さ16㎝の小壺に皿状に加工した擂鉢を蓋としている。左手前の礫は、おそらく縄文時代の擦石を転用したもの。写真は接合・復元後に撮影。

下：蔵骨器として使用された陶器

壺内部には土のみが入っていたが、土壌分析の結果「火葬骨を埋納した可能性がある」とされた。遺物は須恵器系中世陶器ではあるが、珠洲産なのか県内を含めた東北産であるのかは今後の課題である。

SX1264墳墓と出土陶器

序

国指定史跡払田柵跡は、管理団体である仙北町による環境整備が順調に進捗し、遺跡を訪れる方々も年とともに増加していることは喜びに堪えないところであります。

平成12年度の調査は、第６次５年計画の２年度目にあたり、政庁域西側の長森丘陵部を精査しました。第117次調査区は、外郭西門東部地域に、第118次調査区は、政庁域外の西側隣接地にあたります。

第117次調査では、９世紀後半～10世紀前半代の竪穴住居跡・竪穴状遺構が９軒見つかりました。これらのうち竪穴状遺構は、鍛冶関連の工房跡と考えられます。

また、払田柵が機能を停止した後の鎌倉時代には、一辺が５ｍ程の隅丸方形の塚（墳墓）が築かれ、陶器の壺を蔵骨器として埋納したことも明らかとなりました。さらに下層には縄文時代の竪穴状遺構が少なくとも４軒確認されています。

第118次調査では、昨年度の第115次調査で確認されていた掘立柱建物跡の北側部分が確認できました。また、この建物に伴う板塀跡も検出されました。

本書は以上のような調査成果を収録したもので、古代城柵官衙遺跡等の研究上、資するところが大きいと考えますので、御活用いただければ幸いと存じます。

最後に、調査ならびに本書作成にあたって御指導・御助言を賜りました、文化庁、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に心から感謝申し上げるとともに、史跡管理団体である仙北町、同教育委員会、千畑町教育委員会、ならびに土地所有者各位の御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成13年３月

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所長　芳賀　誠

例　　言

1　本書は秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が平成12年度に実施した、払田柵跡第117次調査・第118次調査、調査成果の普及と関連活動の成果を収録したものである。

2　発掘調査及び本年報作成にあたり、当事務所の顧問である秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授・東北歴史博物館館長岡田茂弘氏から御指導いただいた。また次の方々より御教示を得た。記して謝意を表する。　（順不同・敬称略）

坂井秀弥（文化庁記念物課）　品田高志・伊藤啓雄（新潟県柏崎市教育委員会）
工藤清泰（青森県浪岡町教育委員会）　八重樫忠郎（岩手県平泉町教育委員会）
榊原滋高（青森県市浦村教育委員会）　鈴木和子（青森県教育庁文化課）
小山内透（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）　和泉昭一（二ッ井町教育委員会）
榮一郎（秋田県埋蔵文化財センター）

3　第３章第３節の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した結果報告を掲載している。

4　遺構等の実測図は国土調査法第Ｘ座標系を基準に作成した。実測図・地形図中の方位は座標系を示し、磁北はこれよりＮ７°30′00″Ｗであり、真北はＮ０°10′58″Ｅである。詳細は払田柵跡調査事務所年報1977『払田柵跡－第11・12次発掘調査概要－』（1978年）を参照いただきたい。

5　本書の作成・編集は当事務所学芸主事高橋　学が行った。

凡　　例

1　土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖　1997年版』を参考にした。

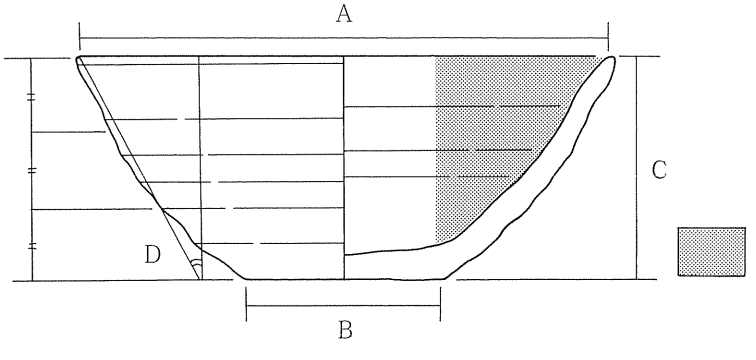
2　本文中における遺物の個体数表記については、坏類では底部が１／２以上残存する個数を数えたものを示す。

3　掘立柱建物跡を構成する柱掘形には、原則的に北東隅柱より時計回りに各柱穴にＰ１、Ｐ２、Ｐ３・・・　と番号を付し記述する。

4　遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＢ	掘立柱建物跡	ＳＩ	竪穴住居跡・竪穴状遺構	ＳＫ	土坑
ＳＡ	板塀跡	ＳＤ	空堀・溝跡	ＳＦ	土塁
ＳＮ	焼土遺構	ＳＸ	墳墓（隅丸方形溝状遺構）・火葬墓		

5　坏形土器の計測基準は下図のとおりである。



Ａ：口径　　Ｂ：底径
Ｃ：器高　　Ｄ：外傾度
底径指数：$\frac{B}{A}$　　高径指数：$\frac{C}{A}\times100$

黒色処理

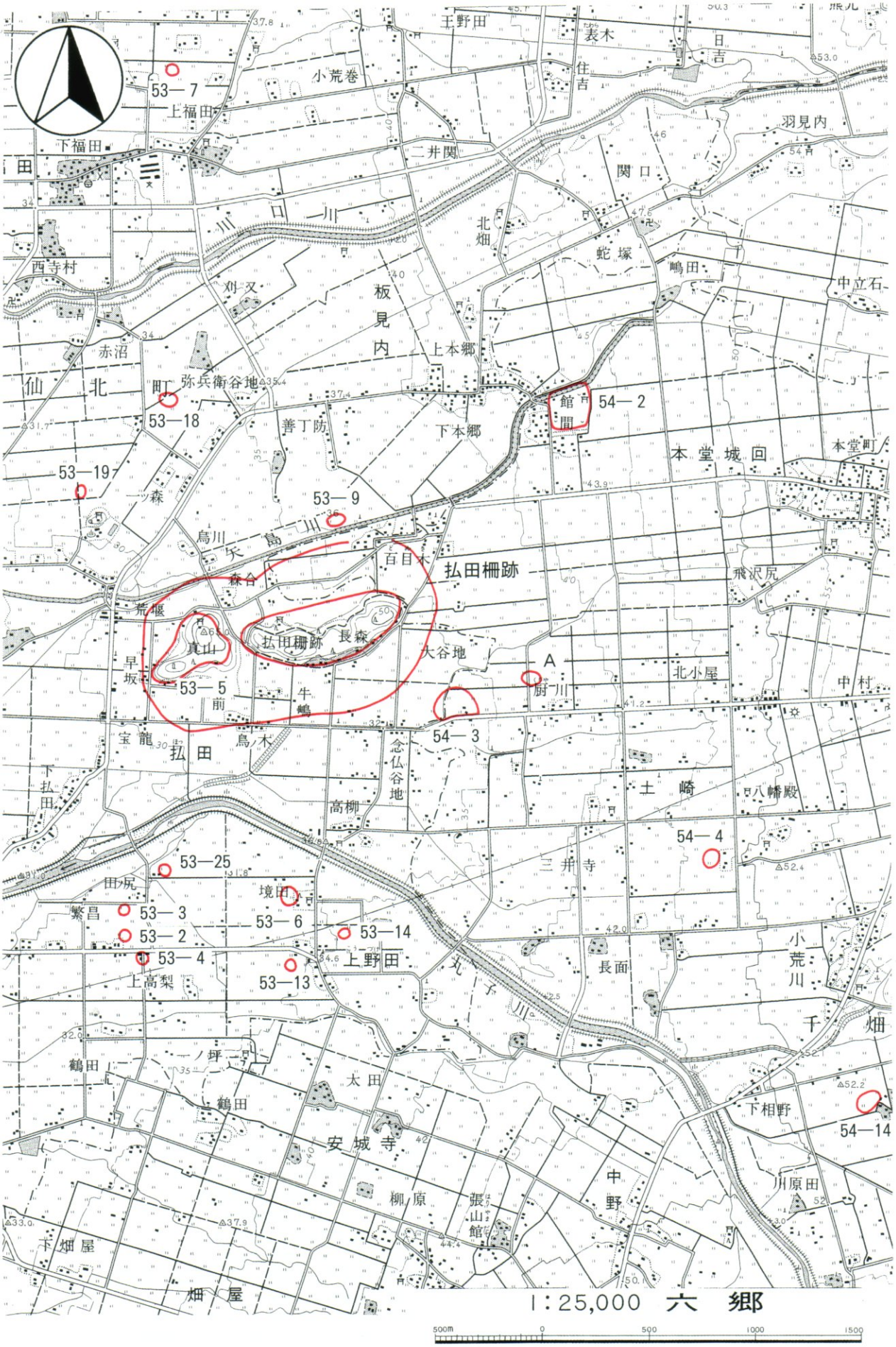
払田柵跡調査事務所年報2000

目　　次

巻頭図版
序
例言・凡例
第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　調査計画と実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第３章　第117次調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第１節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第２節　検出遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　第３節　自然科学的分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
　第４節　小　結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第４章　第118次調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
　第１節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
　第２節　検出遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
　第３節　小　結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
第５章　調査成果の普及と関連活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
　報告書抄録
　付図（長森丘陵西部の地形と第117次調査区配置）

○挿図目次○

第１図　払田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡
第２図　払田柵跡調査実施位置図
第３図　平成12年度調査区位置図
第４図　第117次拡張区遺構配置図
第５図　ＳＩ1274竪穴住居跡、ＳＤ1303・1304溝状遺構
第６図　ＳＩ1274竪穴住居跡出土遺物（１）
第７図　ＳＩ1274竪穴住居跡出土遺物（２）
第８図　ＳＩ1266竪穴状遺構
第９図　ＳＩ1266竪穴状遺構出土遺物（１）
第10図　ＳＩ1266竪穴状遺構出土遺物（２）
第11図　ＳＩ1280・1281・1292竪穴状遺構、ＳＫ1279・1306土坑（１）平面図
第12図　ＳＩ1280・1281・1292竪穴状遺構、ＳＫ1279・1306土坑（２）土層断面
第13図　ＳＩ1288竪穴状遺構
第14図　ＳＩ1289竪穴状遺構、ＳＫ1290土坑
第15図　ＳＩ1281・1288・1289竪穴状遺構出土遺物
第16図　ＳＩ1295竪穴状遺構
第17図　ＳＩ1295竪穴状遺構出土遺物
第18図　ＳＫ1271～1273・1276・1286土坑
第19図　ＳＫ1273・1302土坑出土遺物
第20図　ＳＤ1305溝状遺構
第21図　ＳＤ1268・1277溝状遺構
第22図　ＳＸ1264墳墓とＳＸ1265隅丸方形溝状遺構全体図
第23図　ＳＸ1264墳墓（１）平面図
第24図　ＳＸ1264墳墓（２）土層断面図
第25図　ＳＸ1264墳墓出土陶器
第26図　ＳＸ1265隅丸方形溝状遺構
第27図　土塁・空堀跡土層断面図（Ｃトレンチ南壁）
第28図　ＳＤ877空堀跡（１）平面・断面図
第29図　ＳＤ877空堀跡（２）断面図
第30図　ＳＤ877空堀跡（３）断面図
第31図　Ｂトレンチ内（中央南側）遺構配置図
第32図　ＳＩ1269・1282・1285竪穴状遺構
第33図　ＳＩ1282竪穴状遺構出土遺物
第34図　ＳＩ1270竪穴状遺構、ＳＫ1275・1293土坑
第35図　ＳＫ1296～1298土坑
第36図　遺構外出土遺物（１）土師器・須恵器・中世陶器
第37図　遺構外出土遺物（２）縄文土器
第38図　中世遺構群の立地
第39図　外郭西門西方水田出土の下駄
第40図　第118次調査区遺構配置図
第41図　ＳＢ1222掘立柱建物跡
第42図　第118次調査区検出遺構
第43図　ＳＫ1315土坑出土遺物
第44図　遺構外出土遺物（１）土師器・須恵器
第45図　遺構外出土遺物（２）平瓦
第46図　遺構外出土遺物（３）縄文土器
第47図　第115・118次調査区における建物と板塀の配置
第48図　政庁東方域Ｅ期の遺構配置略図



第1図　払田柵跡と周辺の古代・中世の遺跡

第１章　はじめに

払田柵跡は秋田県仙北郡仙北町払田・千畑町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く、大曲市の東方約６㎞、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩からなる真山、長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（烏川）、南側を丸子川（鞠子川）によって挟まれた沖積低地に立地する。

明治35・36年（1902・1903）の千屋村坂本理一郎による溝渠開削の際や、明治39年（1906）頃から開始された高梨村（現仙北町）耕地整理事業の際に発見された埋もれ木が、地元の後藤宙外・藤井東一らの努力によって歴史的遺産と理解されたのが、遺跡解明の端緒となった（註）。

昭和５年（1930）３月に至り、後藤宙外が中心となって高梨村が調査を実施し、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、昭和６年（1931）３月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、昭和63年（1988）６月29日付けで史跡の追加指定がなされて現在に至っている。史跡指定面積は894,600㎡である。

昭和40年代に入り、史跡指定地域内外の開発計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実体を把握することを目的に昭和49年（1974）、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した。幸い、地元管理団体仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

事務所は昭和61年（1986）４月、「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称し、現在は「払田柵跡調査要項」の第６次５年計画に基づいて計画的に発掘調査を実施している。

史跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物にはⅠ～Ⅴ期の変遷があり、創建は９世紀初頭、終末は10世紀後半である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』（昭和60年３月）として公刊した。

一方、区画施設である外柵は東西1,370ｍ、南北780ｍの長楕円形で、標高32～37ｍ、総延長3,600ｍ、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約878,000㎡である。外柵は１時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は、東西765ｍ、南北320ｍの長楕円形で、面積約163,000㎡、最高地は標高53ｍである。外郭線の延長は約1,760ｍで石塁、築地塀（東・西・南の山麓）と材木塀が連なり、東西南北に八脚門が開く。外郭線は全体に４時期にわたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、従来それぞれ外郭線・内郭と呼称していたが、これまでの調査成果を踏まえ、平成７年（1995）から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』（平成11年３月）として公刊した。

出土品には、須恵器・土師器・灰釉陶器などのほか、斎串・曲物・挽物・鋤・楔などの木製品、漆紙文書・木簡・墨書土器などの文字資料がある。木簡は昨年度までに88点確認しており、「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」などと記された文書・貢進用木簡があり、「別當子弟」「狄藻」などの文字もある。墨書土器は370点以上出土・採集されており、「大津郷」「鷹空上」

「懺悔」「小勝」「音丸」「厨家」「厨」「官」「舎」「館」「千」「主」「長」「酒」などの文字が記されている。

管理団体である仙北町は、昭和54年（1979）から保存管理計画による遺構保護整備地区の土地買い上げ事業をすすめており、昭和57年（1982）からは調査成果に基づいて環境整備事業を実施している。さらに平成３年（1991）から「ふるさと歴史の広場」事業により、外柵南門や大路東建物、河川跡・橋梁の復元整備、ガイダンス施設（払田柵総合案内所）の設置などを実施し、更に平成７年（1995）からは「ふれあいの史跡公園」事業により、政庁東方の官衙建物の整備などを実施した。平成11年（1999）は外郭西門の門柱及びこれに取り付く材木塀の復元整備を、本年度は外郭西門周辺の修景整備として名称板設置や園路舗装工事などを実施している。

なお、平成11年度までに実施した過去26年間の発掘調査面積は43,728㎡であり、遺跡総面積のうちの4.98％にあたる。

第１表　払田柵跡周辺の主な古代・中世遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地	備考	文献
53-2	繁昌Ⅰ遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
53-3	繁昌Ⅱ遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-4	上高梨遺跡	仙北町高梨	遺物包含地（須恵器）	1
53-5	堀田城跡	仙北町払田	真山を利用した中世城館	2
53-6	境田城跡	仙北町払田	中世城館：天正18年破却	2
53-7	杉ノ下Ⅰ遺跡	仙北町横堀	遺物包含地（須恵器）	1
53-9	鍛冶屋敷遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-13	四十八遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-14	中村遺跡	仙北町上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
53-18	弥兵谷地遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（須恵器）	1
53-19	一ツ森遺跡	仙北町板見内	遺物包含地（須恵器系中世陶器）	1
53-25	田ノ尻遺跡	仙北町払田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
54-2	本堂城跡	千畑町本堂城回	中世城館：戦国期本堂氏の居館	2
54-3	厨川谷地遺跡	千畑町土崎	埋蔵銭出土地（大正４年） 古代集落跡、2000年範囲確認調査	3
A	厨川谷地Ⅱ遺跡	千畑町土崎	中世以降？、2000年新発見	
54-4	中屋敷Ⅰ遺跡	千畑町土崎	寺院跡	1
54-14	内村遺跡	千畑町千屋	古代集落跡、1980年発掘調査	4

文献　1　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）／2　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）／3　千畑町「古銭発掘由来記」『千畑町郷土史』1986（昭和61年）／4　秋田県教育委員会『内村遺跡』1981（昭和56年）／地図番号は、文献１の地図番号に対応する

註　払田柵跡（柵木）の初見時期については、「明治二十年頃」とする記述もある。

赤川菊村「校閲を終りて」『菻澤歳時記』1942（昭和17年）649頁

第２章　調査計画と実績

払田柵跡の調査は「払田柵跡調査要項」に基づき、５年計画を起案し、調査顧問の指導と助言を受け継続実施している。平成11年度から15年度の調査は、「払田柵跡発掘調査第６次５年計画」として調査顧問の承認を得ており、本年度はその第２年度に当たる。

事業費については、国庫補助金の内示（総経費1,600万円のうち、国庫補助金800万円）を得たので、次のような「平成12年度払田柵跡調査計画（案）」を立案した。

第２表　調査計画表

調査次数	調　査　地　区	調 査 内 容	調 査 面 積	調　査　期　間
第117次	外　郭　西　部 （仙北町払田字長森）	外郭西門東部地域 の遺構分布調査	300㎡	４月17日～ ５月31日
第118次	外　郭　西　部 （仙北町払田字長森）	政庁西方の推定 官衙域の調査	1,200㎡	６月１日～ ９月30日
合　計	２　地　区		1,500㎡	

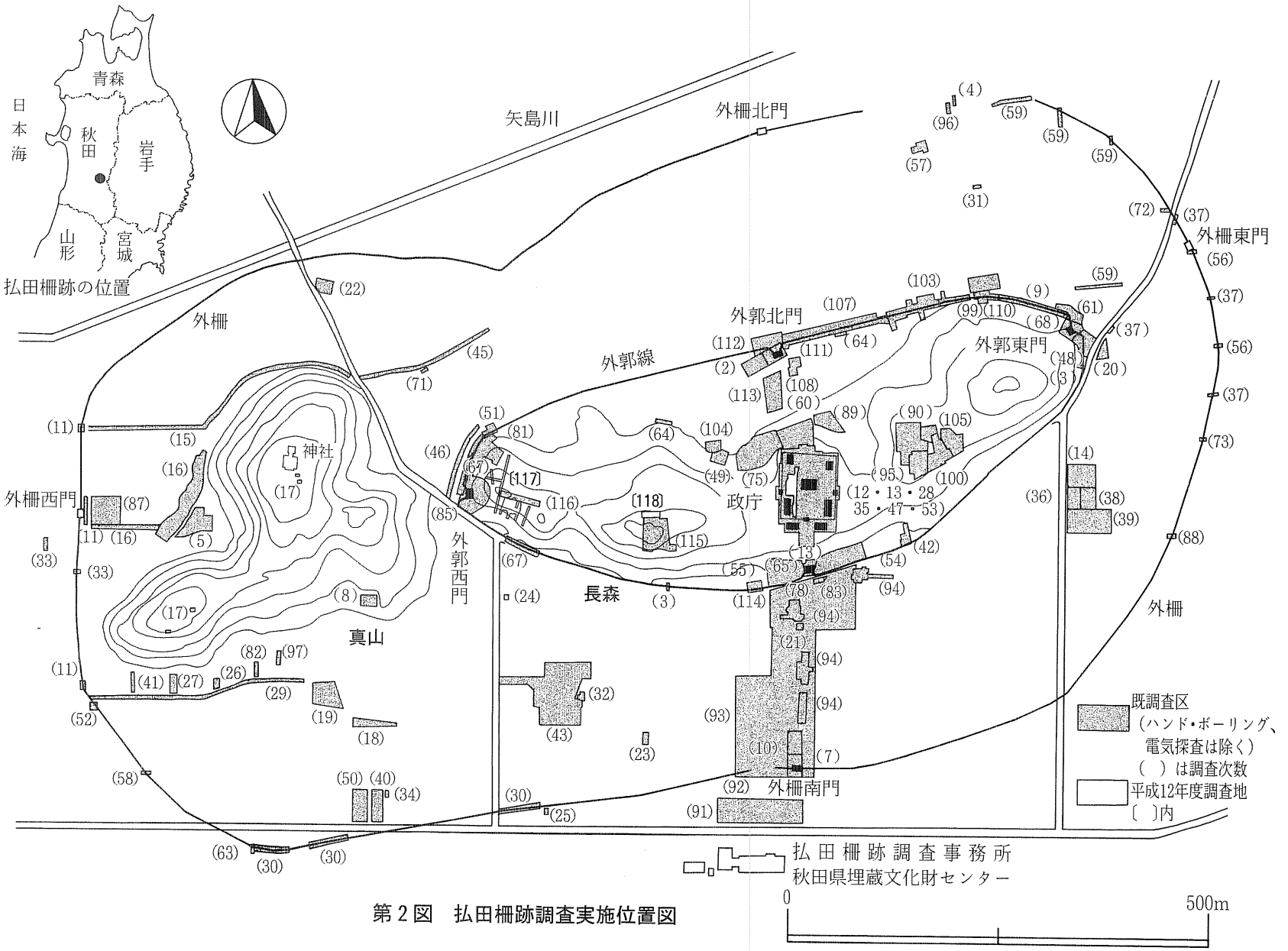
第117調査は、外郭西門東部地域の遺構分布確認調査である。外郭西門の東側地域には平坦地は少ないが、政庁に連なる道路や、それに伴う遺構の存在が考えられる。外郭西門の整備に合わせ、西門東方域及びここと政庁を結ぶ地域の遺構確認の調査を行うことにしたものである。

第118次調査は、政庁域西方の推定官衙域の調査である。政庁の西側に広がる平坦地には掘立柱建物、竪穴住居などからなる官衙域の存在が推定されるが、今まで全く未調査であった。政庁東方地域での調査を踏まえ、政庁を中心とする東西両側の遺構群のあり方と、その変遷を明らかにするため、この地域の調査を実施することにしたものである。

平成12年度の調査の実績は第３表のとおりである。

第３表　調査実績表

調査次数	調　査　地　区	調 査 内 容	調 査 面 積	調 査 期 間
第117次	外　郭　西　部 （仙北町払田字長森）	外郭西門東部地域 の遺構分布調査	560㎡	４月19日～ 11月10日
第118次	外　郭　西　部 （仙北町払田字長森）	政庁西方の推定 官衙域の調査	180㎡	５月29日～ 11月22日
合　計	２　地　区		740㎡	



第２図　払田柵跡調査実施位置図

第３章　第117次調査の概要

第１節　調査経過

第117次は、外郭西門東部地域における遺構分布を確認する調査である。本調査は、第４章で報告する第118次調査と並行する形で進めており、以下にその経過等を調査日誌の記述から抜粋する。

４月19日、調査を開始する。調査事務所で所長の挨拶、作業員説明会などを実施する。21日までは事前の準備に費やす。25日、本日より現場に入る。作業員には今年度の調査予定概要を現地にて説明する。その後、例年通り作業員休憩用と機材保管用のテント２張りを設営する。26日、調査区の下草刈りを実施、西端では土塁・空堀が良く見ることができる。

５月10日、トレンチを２本設定（Ａ・Ｂトレンチ）。その幅を1.5ｍとする。11日より、トレンチ内の粗掘りに入る。15日、土塁・空堀に直交する東西方向のトレンチ（Ｃトレンチ）を設定。17日、Ｂトレンチ北側で東西方向の溝跡を確認する。調査区南側（長森丘陵南側斜面）にＤ～Ｆトレンチを設定。22日、トレンチ調査続行。払田柵跡周辺での田植えが本格化となる。25日、調査区東端で、現況で確認できる窪地３箇所を発見。昨年度第115次調査区おける窪地（土坑）と同様か。

６月６日、窪地３箇所の平面図を平板で1/50にて測量。ＳＸ1261・1262・1263とする。Ｅトレンチで環状の溝状プランを確認、古墳の周溝のように見える。７日、窪地ＳＸ1261・1262を通るようにしてＧトレンチを設定。13日、環状プランの東側を拡張して掘り下げる。14日、この結果プランは、径５ｍ程の円形周溝を呈するようになりそうであるが、まだ不明瞭。15日、円形周溝南側の埋土中に拳大の礫がまとまりをもって検出。払田柵基盤層にある硬質泥岩とは異質の円礫である。意図的に埋納したものか。その東側にも溝状の遺構あり、当初の予定を一部変更して、この周辺をもう少し拡張して面的に確かめる必要がありそう。その後、東側に拡張して表土除去したところ、表土直下から擂鉢と須恵器のような壺が出現する。壺は須恵器ではなく珠洲系の陶器のようである。円形周溝と関係があるのか。19日、陶器壺・擂鉢が出土した箇所は、周囲の表土面よりやや盛り上がり（最大でも50㎝くらいか）をもち、盛土中に陶器を埋設したものと判断された。ただ遺物が出たので盛土（塚）と判断できたようなもので、遺物がなければ単なる自然の起伏としていたであろう。本遺構をＳＸ1264塚跡とし、西隣の円形周溝をＳＸ1265とする。20日、塚の南側で焼骨出土、何の骨か不明。塚の壺同様木の根の側から出土し、検出が困難である。21日、骨が出土した近辺で土師器・炭化物あり、古代の骨になるのか。この西側に竪穴らしき方形のプランが現れる。ＳＩ1266とし、遺物を取り上げる。ＳＸ1264塚跡出土の陶器の下から礫が確認。払田柵跡基盤層にある硬質泥岩である。この礫を敷いた上に陶器を埋設したものか。22日、焼骨の出土状況写真撮影を行う。骨は径25㎝程の範囲にまとまる。

７月10日、拡張区全域のプラン確認状況の写真を撮影を行う。その後、遺構精査（掘り下げ）に入る。この区域は南向きの緩斜面ではあるが、確認遺構の配置から見て、これは古代において斜面を削土整地したものであり、この上に竪穴状の遺構を構築しているようである。11日、拡張区での平面図作成に備え、測量杭を６ｍピッチで打つ。12日、先日確認された焼骨の東側約４ｍの箇所でまた別の焼骨が出土する。13日、ＳＩ1266床面上から焼土遺構確認する。鍛冶関係の炉か。北側壁を切り込む

ように柱穴も検出される。

7月24日、Cトレンチで確認している土塁・空堀の断面写真撮影を行う。断面観察では空堀の掘削土（主に地山土）を両側に盛ることにより土塁を形成していることが明瞭である。31日、大曲での気温が37.6度を記録、去年より暑い。ＳＸ1265とした円形周溝、確認面の写真を撮り、掘り下げに入る。

8月1日、B・Cトレンチ交差箇所で土塁の地山盛土の下から竪穴住居跡らしきプラン（南側の壁の立ち上がり）を確認。土師器・須恵器が出土していることから、古代の住居に間違いない。このことから地山盛土は古代かそれ以降であることは確定的となったが、まだ中世と断ずることはできない。2日、拡張区東端で確認した、ＳＫ1270は半截の結果、底面外周に溝が巡ることが明らかとなる。9日、Bトレンチ北端（長森丘陵北端部）でも竪穴らしきプランがあることが判明する。

8月21日、盆休み明け初日、まだ暑い。Bトレンチ北端部の竪穴内には、柱穴・小土坑あり、須恵器・土師器が出土する。古代の遺構に間違いない。22日、2番目に見つかった焼骨（後にＳＸ1284とする）プランの下から、古代の竪穴北壁を確認。このことから焼骨は、塚と同じ中世の可能性が高くなってきた。焼土遺構についても、焼骨とほぼ同一面で確認できるものと、その下位で見つかるものの別があり、前者が中世、後者が古代ではないかと考えるようになってきた。28日、調査区全体の写真撮影を実施する。稲刈り前でまだ緑が豊富な時期に全体を撮しておくため。

9月4日、朝夕ようやく涼しくなる。本日より拡張区の平面図作成に入る。5日、ＳＸ1264にもＳＸ1265同様の溝が巡ることが明らかとなる。6日、ＳＸ1265と重複するＳＫ1282から縄文土器が出土する。同形態の遺構はＳＫ1269であり、これも縄文期となるのか。8日、ＳＫ1282は、中央に柱穴が位置し、東側に地山掘り残しの周堤をもつ小土坑がある。これは竪穴状の遺構となり、ＳＩ1282と略号を変更する。19日、ＳＩ1269（縄文）は、床面直上に人頭大の礫が5個置かれ、中央の礫の下から柱穴が発見された。これは柱穴を抜いた後に礫を意図的に置いたものと考えられる。20日、ＳＸ1284焼骨を取り上げる。

10月3日、B・Cトレンチ交差部のＳＩ1274竪穴住居跡の遺物を取り上げる。完形の須恵器坏は9世紀中頃であり、払田柵跡では比較的古手の土器となる。このころから現地説明会用の各種準備にもとりかかる。5日、ＳＸ1284焼骨の南から3箇所目の焼骨が出土する。これは前2者に比べるとごく僅かの広がりであり、写真撮影・実測の後、取り上げる。11日、現況で確認できる土塁・空堀を平板で図化する。過去に微地形測量を実施しているが、土塁がうまく表現されていなかったため、新規に測量することにしたものである。13日、調査区の平面図は一部の遺構を除きほぼ終了する。改めて平面図と遺構を確認すると、ＳＸ1264・1265は円形周溝ではなく、隅丸方形の周溝が巡っていたと見た方がよさそうである。周溝は隣り合う2基が一部を共有する形を取るもので、これは河辺町上祭沢遺跡で調査した塚と同じのようである。16日、最後まで残っていたGトレンチの断面図・平面図に着手する。23日、ＳＩ1274竪穴住居跡の補足調査並びに図面作成を行う。24日、明日の顧問会議に備え、調査区全体の清掃を行う。26日、ＳＸ1264塚跡の土層断面図を作成する。28日、現地説明会、30日は史跡払田柵跡保存管理計画策定指導委員会一行が現地を見学する。31日、平面図の補足を行い、11月6日以降は埋め戻しに入り、10日で本調査区の野外調査を終了した。なお、ＳＸ1264塚は後日の出土壺内容物の分析から骨壺と判断されたことを受け、以下ではＳＸ1264墳墓として報告する。

第３図　平成12年度調査区位置図

第２節　検出遺構と遺物

１　調査区の立地と基本層序

第117次は外郭西門の東方約30ｍに位置し、長森丘陵西端部の馬背状の狭い平坦地から南北にそれぞれ傾斜する地区にあたる。昨年第116次調査区の西・南側に隣接する。標高はＢトレンチでの計測（表土面）で、最高位が48ｍ、北端部で40.5ｍ、南端部で42.5ｍとなる。現況はかつて杉林・雑木林であったところを数年前に伐採しており、下草や雑木等で藪となっている。

調査区は幅1.5ｍのトレンチを南北方向に６本（Ａ・Ｂ・Ｄ～Ｇトレンチ）、東西方向に１本（Ｃトレンチ）設定した。前者は長森丘陵西端部を南北に縦断させるような位置に、後者は南北方向に延びる土塁・空堀を横断させるようにしたものである。なおＤ～Ｆトレンチ間は古代の遺構・遺物が比較的まとまって検出されたことから、この間を拡張して面的に調査した。この区域を拡張区（第４図）と仮称し、以下で表記する。

調査区の基本層序は、Ｆトレンチ南部、ＳＤ877空堀の北側で観察した。（第29図参照）

第Ⅰ層：暗褐色土（10YR3/4）表土、植物根が多くブカブカしている。層厚は10㎝前後。

第Ⅱ層：暗褐色土（7.5YR3/3）部分的に炭化物が混入する。層厚10～20㎝。

第Ⅲ層：黒褐色土（10YR2/3）炭化物を少量含む。縄文土器・土師器等を含有するが、包含層と呼べるほどの遺物量はない。層厚20～40㎝。

第Ⅳ層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）地山漸移層

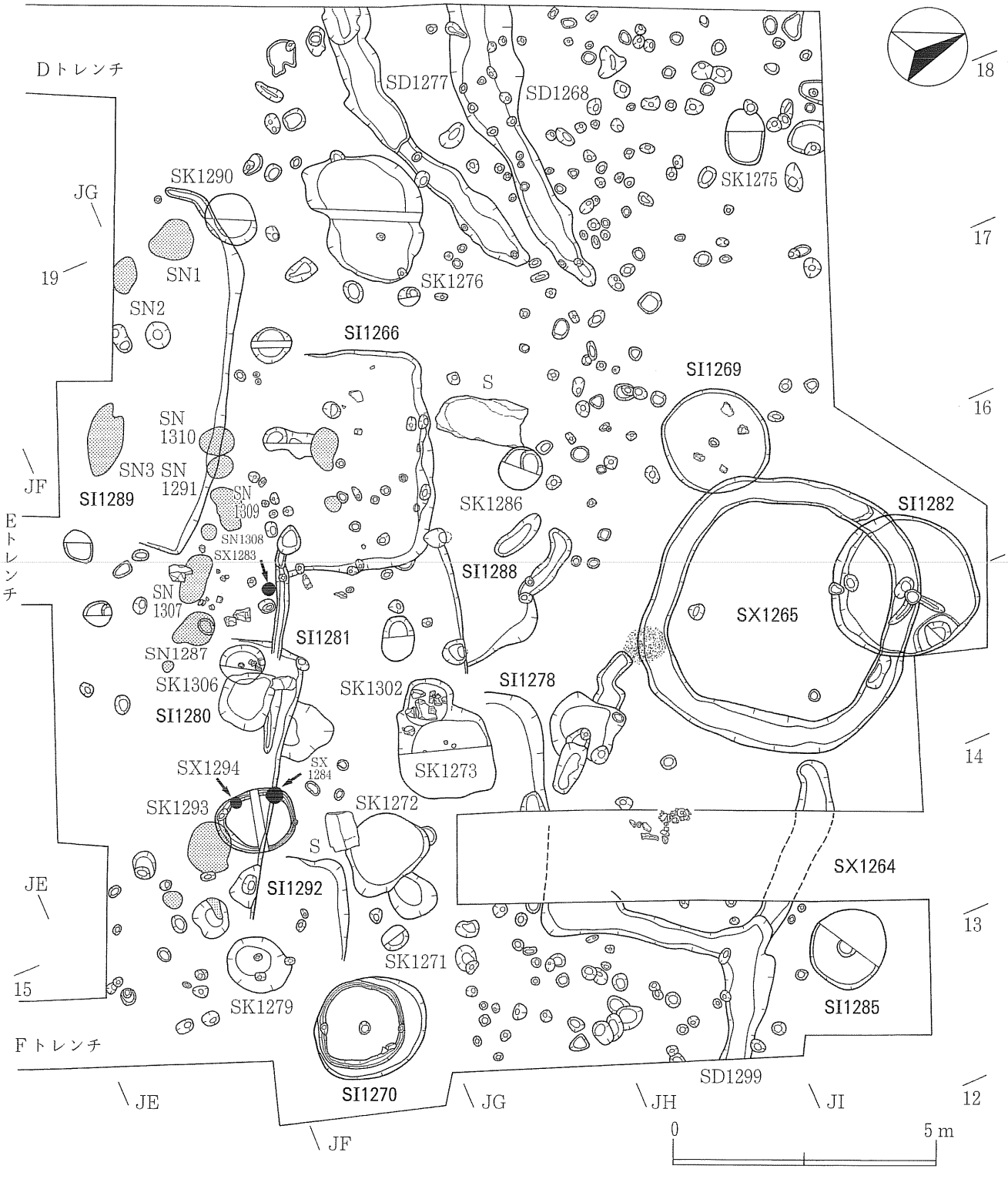
第Ⅴ層：黄褐色土（10YR5/6）地山土

同層序を基準に他所を観察すると、Ｃトレンチ（拡張区西端）では第Ⅰ層表土の下が第Ⅳ層地山漸移層となり、表土から地山面までの深さは15～20㎝にすぎない。またＤ・Ｅトレンチでは第Ⅱ層がａ・ｂの２層に細分され、ａ層はやや赤味の強い暗褐色土（7.5YR3/4）、ｂ層は第Ⅲ層に近い黒褐色土（10YR3/2）となる。更にＦトレンチ南端では第Ⅲ層厚が50㎝を超し、同層を３つに細分している。第Ⅴ層・地山は、基本的には粘質土であるが、Ｂトレンチ南側では砂質粘土であり、色調もやや明るく明黄褐色（10YR6/8）を示す。またＧトレンチでは第115次調査区南側のような礫（硬質泥岩）が露出しており、人頭大から人力では動かせないような巨石まで様々である。

２　遺構と遺物

調査の結果、検出された遺構は、設定したトレンチ・拡張区ともそのほぼ全域に分布することが確認され、長森丘陵西端部では狭い頂部平坦面、北側・南側緩斜面域にも各種施設が構築されていることが判明した。各遺構の構築時期は、出土遺物から見ると、古代の他、中世（13世紀代）、縄文時代に及ぶことも明らかとなった。各時期の遺構は次の通りである。

古代：竪穴住居跡１軒・竪穴状遺構８軒、土坑10基、溝跡５条、中世：墳墓（隅丸方形周溝遺構）２基、火葬墓３基、焼土遺構６基、土塁２条・空堀１条、縄文時代：竪穴状遺構４軒、土坑２基、時期不明（中世以降か）：土坑３基である。その他、古代あるいは中世に属すると思われる柱穴多数を検出した。



第４図　第117次拡張区遺構配置図

（1）古代

①竪穴住居跡・竪穴状遺構

方形・長方形基調のプランをもつ竪穴状の遺構は、9軒を確認している。しかしカマドをもつ竪穴住居跡は1軒（ＳＩ1274）のみであり、他はカマドを持たずに地床炉をもつもの（ＳＩ1266)、壁立ち上がりの一部あるいは壁溝の一部のみの確認に留まる。このことから本項では前者を竪穴住居跡とし、他者を竪穴状遺構として記述していく。

ＳＩ1274竪穴住居跡（第5～7図、図版3）

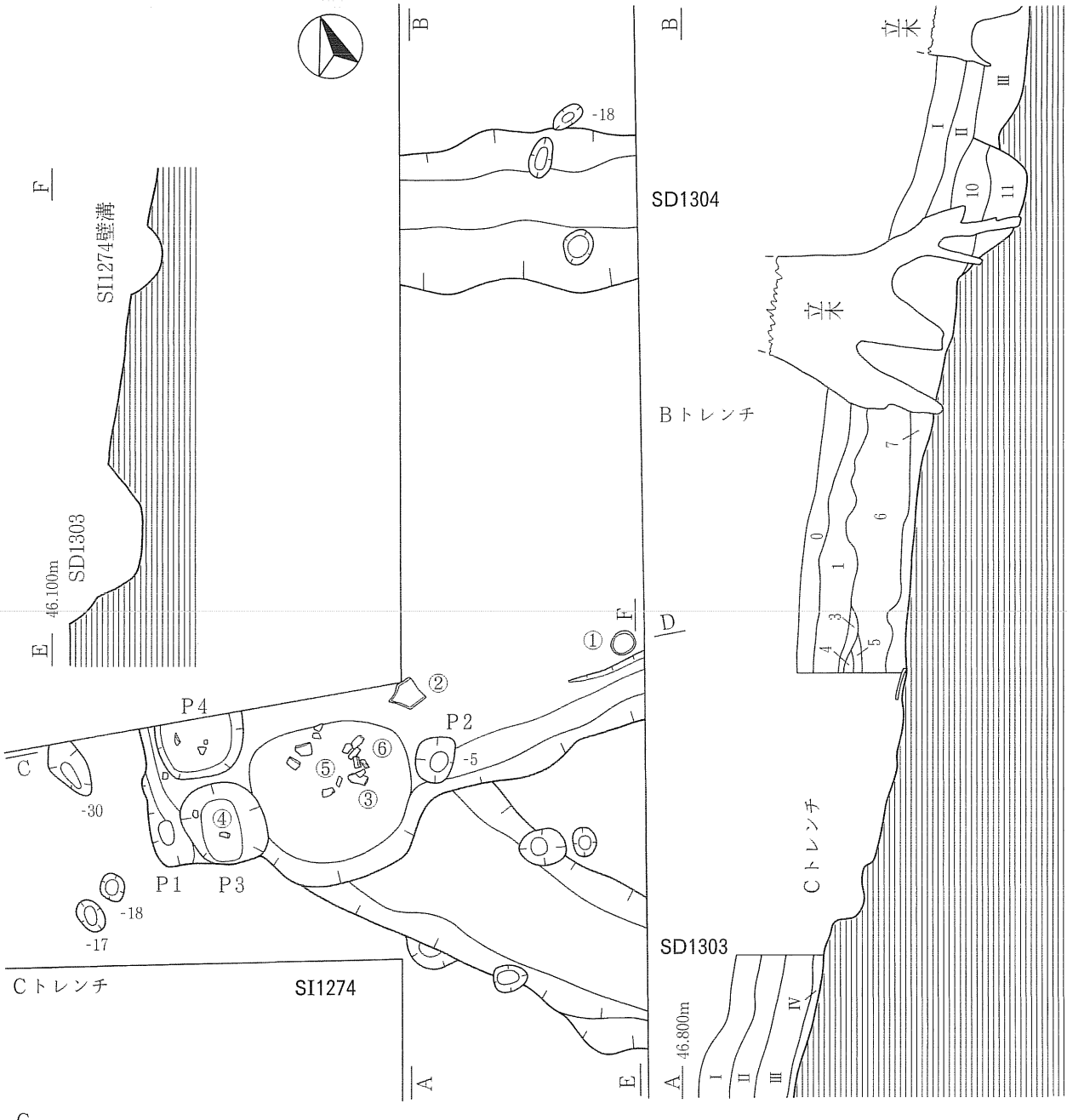
Ｂ・Ｃトレンチの交差部で検出した。ここは丘陵西端の平坦面から北側にやや下る位置にあり、ＳＦ1300土塁盛土（1・3・4層）の直下にもあたる。このことから本住居は土塁構築以前に廃棄・埋没した遺構であると判断される。確認された住居は、竪穴の南西隅部のみであり、その規模は南側壁長3.1m、西側壁長1mにすぎない。各壁直下には幅20cm前後、深さ5cm程の浅い溝が掘り込まれる。断面観察による床面までの深さは70cmとなる。南側壁西寄りにはカマドが付される。その構造等は重複するＳＤ1303溝跡に切られ明確ではないが、残存する形状・焼土の分布から燃焼部（本体・袖部）が住居壁を外側に張り出させた箇所に位置させていた可能性がある。その他床面上には、柱穴（Ｐ1・2)、小土坑（Ｐ3・4）が掘り込まれる。Ｐ3・4は検出位置と坑内の焼土・遺物のあり方からカマドに付属する施設と見ることができる。

遺物はカマド内、カマド脇の小土坑（Ｐ3・4）及び床面直上から須恵器坏・甕・器種不明、土師器甕など比較的多く出土している（第6・7図)。

1はＰ3内出土の土師器甕（④）である。被熱を受けており、底面には回転糸切り痕を留める。2は土師器長胴甕（カマド内③）であろう。内面には縦・横のハケメが、外面にはロクロを利用した横方向のナデ（カキメ状）が見られる。成形時の粘土紐痕跡が沈線状に観察され、幅1.5cm前後の粘土紐を巻き上げ・積み上げしたことが判る。3は床面東側において完形・正立状態で出土した須恵器坏（①）である。内外面口縁の一部にタール状の付着物が認められることから、最終的には燈明皿として使用されていたと考えられる。4は須恵器甕、5は焼きがやや甘いものの須恵質の焼物（カマド内⑥）であるが、器種・部位は不明である。5の図示右側縁には平行タタキ状の圧痕が残る。6・7はカマド及びその周辺床面上出土の須恵器大甕（⑤・②）である。同一個体と考えられるが接合はできなかった。

ＳＩ1266竪穴状遺構（第8～10図、図版2・3）

拡張区中央南側、ＪＨ17を中心とする地区で検出した。南側で重複するＳＩ1289より新しく、東側に位置するＳＩ1281・1288との新旧は不明である。規模は南側の壁の立ち上がりを確認できず不明瞭ではあるが、東西方向は4.1mの隅丸方形を基調とすると考えられる。壁高は北側で40cmとなる。壁溝はない。床面上あるいは周壁を切り込むような径20cm前後の柱穴が10数本見られる。配置としては北側壁上にあるＰ1・2が本住居に伴うと見られるが、他は住居に伴うのか否かは不明である。カマドは確認できず、床面ほぼ中央に長さ80cm×幅50cmの楕円状の地床炉が構築される。炉の下部には長さ100～140cm×幅50cm前後（最深45cm）の軸線を南北方向にとる土坑が位置する。炉の下部構造をなす施設と考えられるが、詳細は不明である。また焼土は、床面中央から東側にもあり、径30cm程の広がりが認められる。

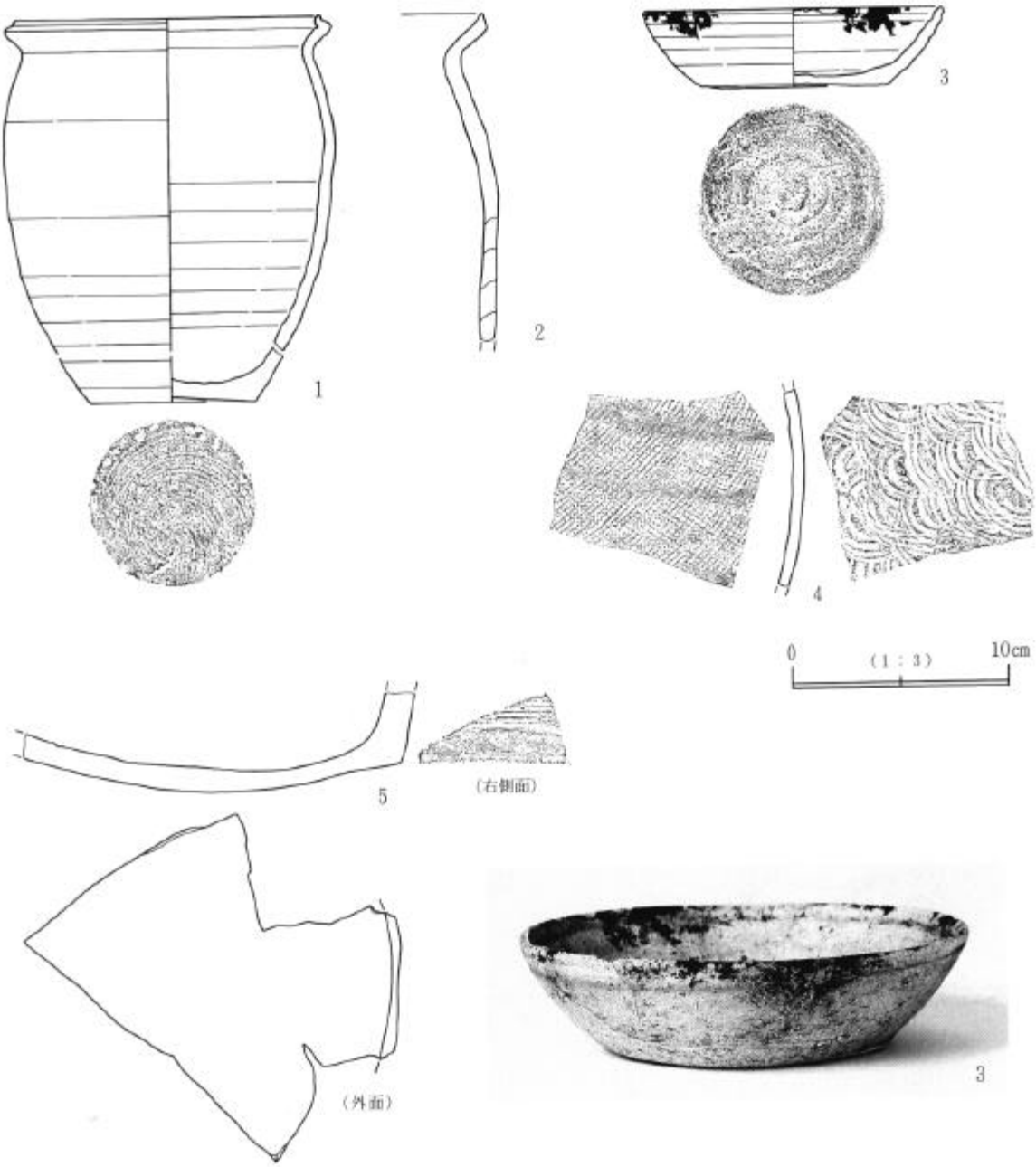


8．黒褐色シルト質土（10YR3/1）混入物少ない
9．暗褐色シルト質土（7.5YR3/4）焼土・地山粘土・炭化物が混在する層、ボソボソする
※6～9層は人為的堆積層か
10．暗褐色シルト質土（10YR3/3）第Ⅲ層の二次堆積層か
11．黒褐色シルト質土（10YR2/3）10・11層とも地山粘土の混入は少ない

1．褐色粘質土（10YR4/4～4/6）土塁の盛土（地山粘土）
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）土塁を切る遺構埋土
3．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）地山粘土を斑状に多量に含む、土塁の盛土
4．黄褐色粘質土（10YR5/6）地山盛土、混入物少ない
5．黒褐色シルト質土（10YR2/3）竪穴堆積土の最上層
6．黒褐色シルト質土（10YR2/2）地山粘土・焼土・炭化物やや多く含む
7．暗褐色シルト質土（10YR3/3）基本的に6層と同一層、地山粘土の混入が6層より多い

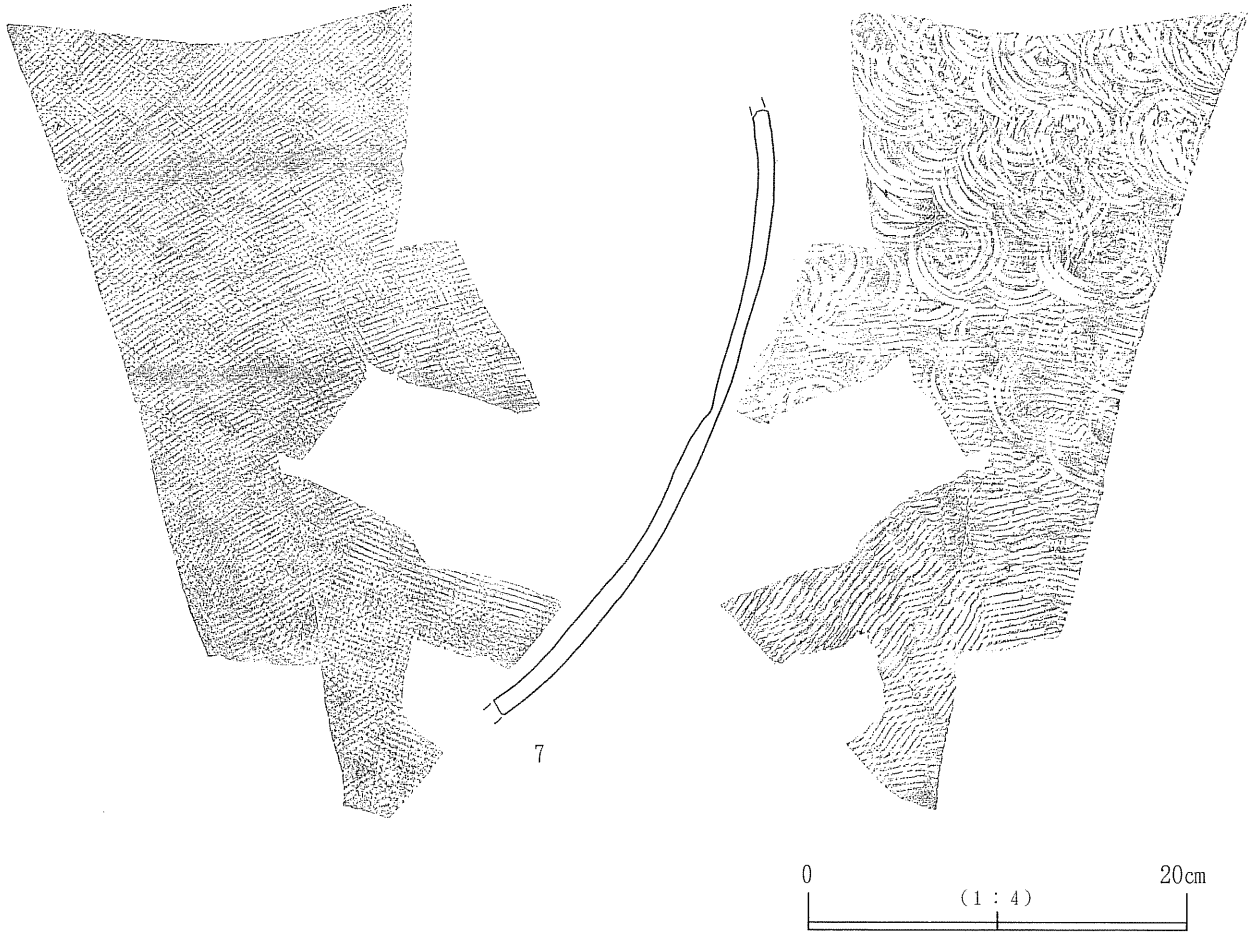
0　(1：40)　2 m

第５図　SI1274竪穴住居跡、SD1303・1304溝状遺構

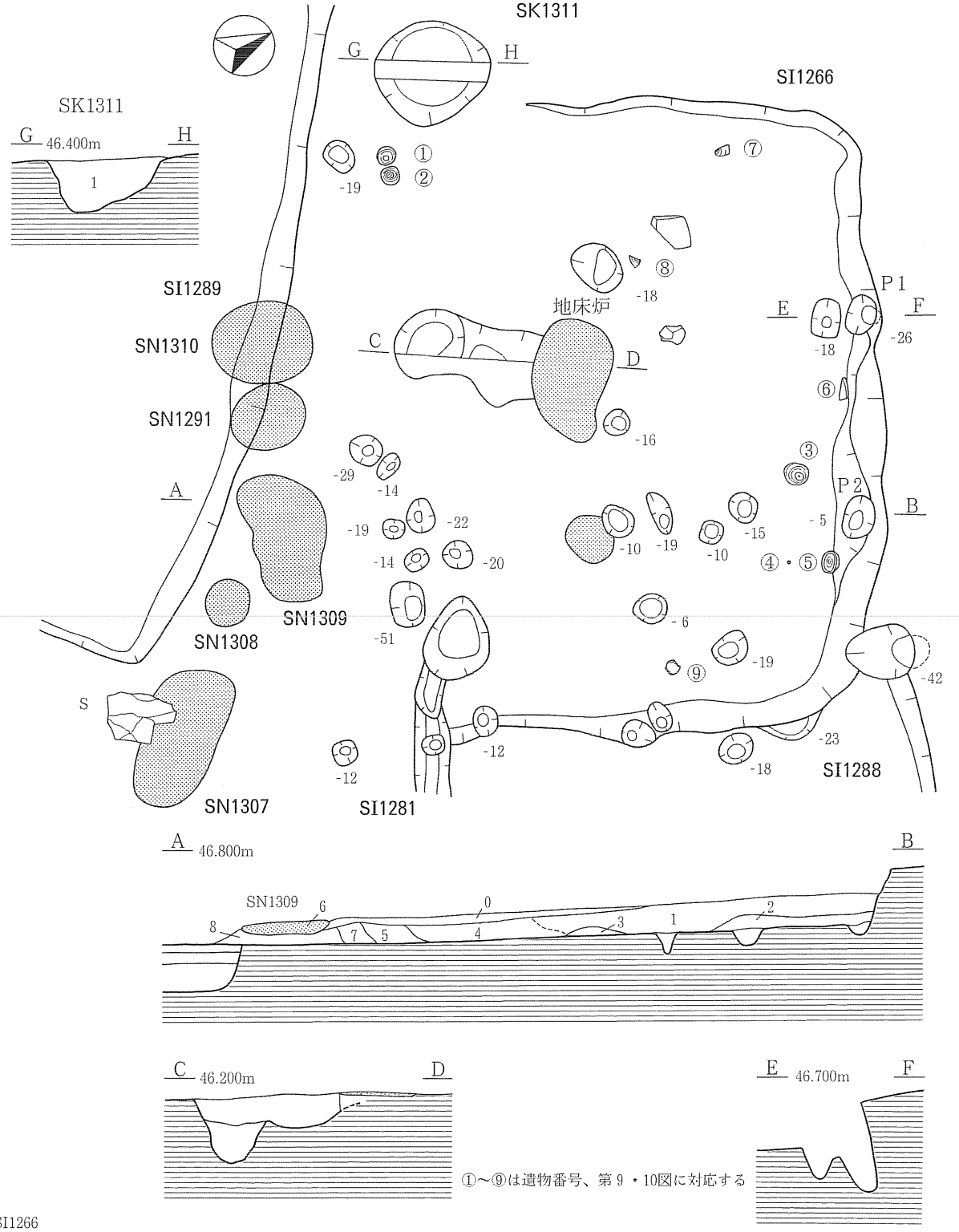


番号	種別	器形	特徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	甕	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、被熱	14.1	7.8	(17.7)			
2	土師器	甕	内外：ロクロ調整、内：ハケメ						
3	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、内外面タール付着→燈明皿に転用	13.8	8.7	3.7	0.63	26.8	27
4	須恵器	甕	外：格子叩き→ロクロ調整（ナデ）、内：青海波当て具						
5	須恵器	不明	内外：ナデ、側縁：平行タタキ圧縮						
6	須恵器	甕	外：格子叩き→ロクロ調整（ナデ）、内：青海波・平行当て具						
7	須恵器	甕	外：格子叩き→ロクロ調整（ナデ）、内：青海波・平行当て具、6と同一個体						

第6図　SI1274竪穴住居跡出土遺物（1）

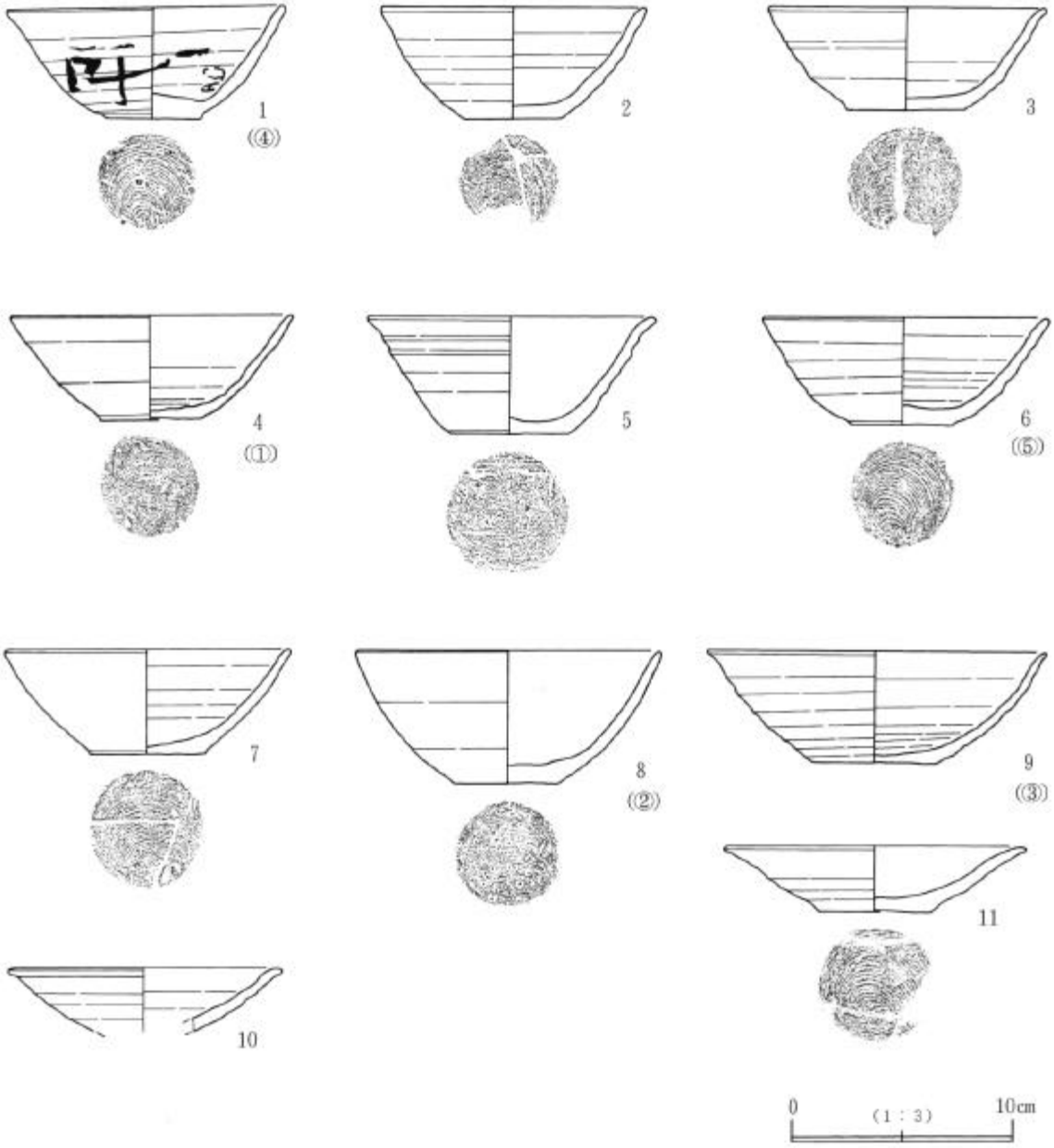


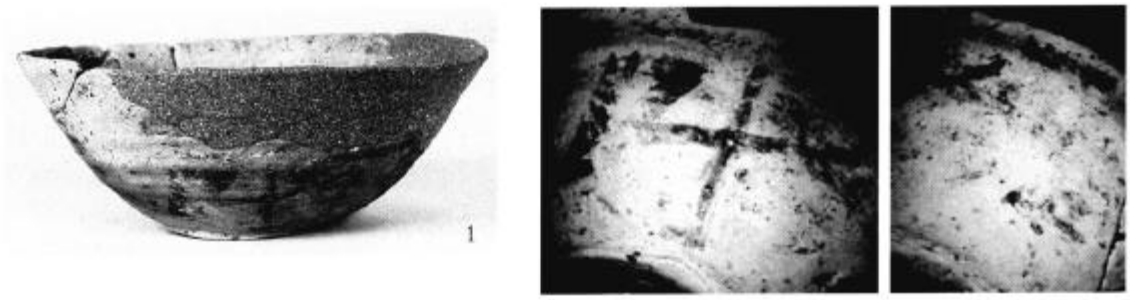
第７図　SI1274竪穴住居跡出土遺物（２）



SI1266
0．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）竪穴埋没後の堆積層（中世か）
1．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土を斑状にやや多く、炭化物少量含む
2．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）地山粘土を斑状に多く、炭化物もやや多く含む
3．褐色粘質シルト土（7.5YR4/6）地山粘土・焼土・炭化物やや多く含む
4．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土・炭化物多く含む
5．褐色粘質シルト土（10YR4/4）地山粘土・炭化物やや多く含む
6．暗赤褐色焼土（2.5YR3/4）焼土層（SN1309）
7．褐色粘質土（7.5YR4/4）地山粘土多く、焼土・炭化物少量含む
8．褐色粘質土（7.5YR4/3）炭化物少量含む
SK1311
1．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土・炭化物多く含む

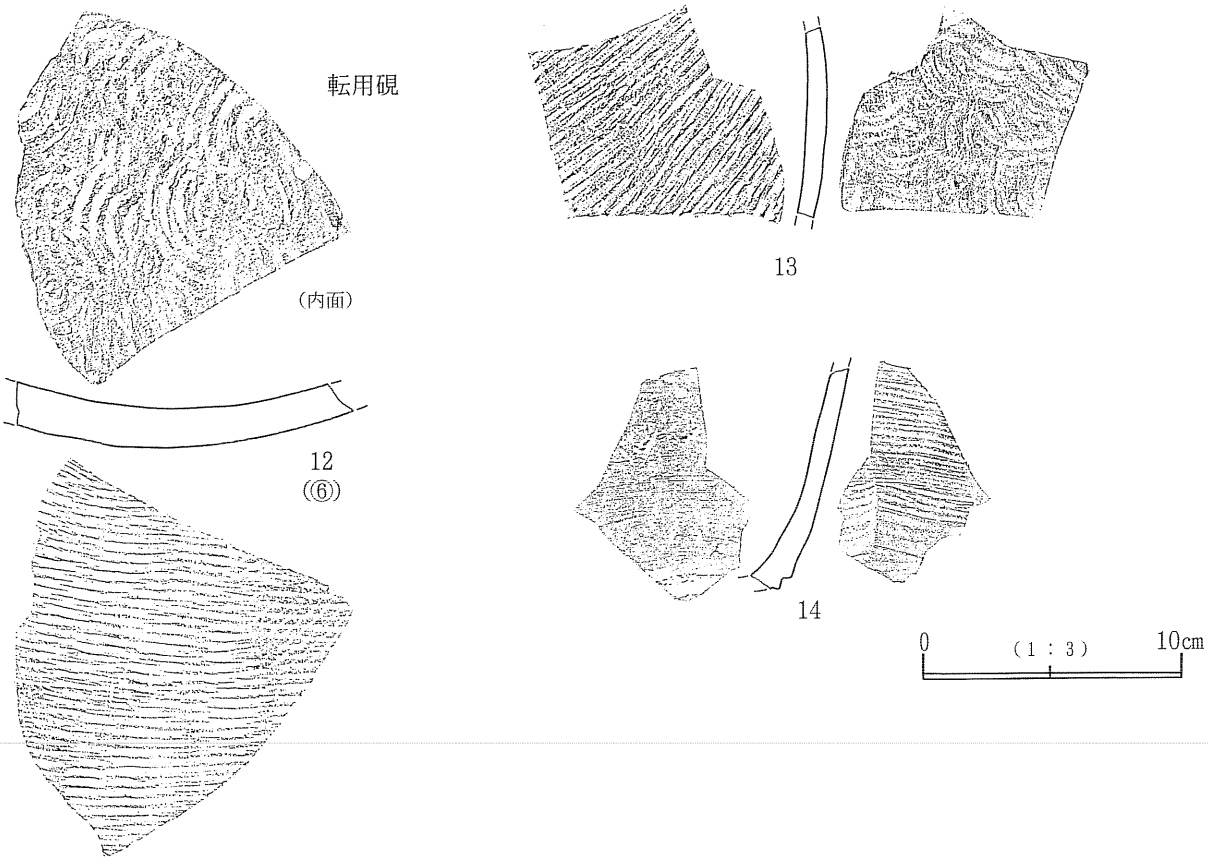
第8図　SI1266竪穴状遺構





１の墨書部分赤外線写真
左：「厨」か　右：判読不能（厨の右隣）

第９図　SI1266竪穴状遺構出土遺物（１）



番号	種別	器形	特徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、体部正位に墨書「厨□」	12.6	4.4	5.2	0.35	41.3	34
2	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	11.9	4.3	5.0	0.36	42.0	29
3	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.6	5.3	4.6	0.42	36.5	32
4	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.7	4.6	4.6	0.36	36.2	35
5	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.9	5.3	5.1	0.41	39.5	34
6	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.9	4.6	4.6	0.36	35.7	32
7	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.8	5.2	4.8	0.40	37.5	34
8	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	13.8	4.8	6.1	0.35	44.2	28
9	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	15.4	5.5	5.1	0.36	33.1	39
10	土師器	皿	内外：ロクロ調整	12.4		(2.9)			
11	土師器	皿	内外：ロクロ調整	13.5	5.1	3.1	0.38	23.0	52
12	須恵器	甕	外：平行タタキ、内：青海波当て具、転用硯						
13	須恵器	甕	外：平行タタキ、内：青海波当て具						
14	須恵器	壺	台付、内外：ロクロ調整、内：ハケメ状						

第10図　SI1266竪穴状遺構出土遺物（2）

床面直上には、土師器坏が完形で少なくとも5個体（①～⑤）確認された。3個体（①～③）は倒立状態であり、①・②は隣り合うように並べられていた。残り2個体（④・⑤、1個体には墨書あり）は重なって北側壁に立て掛けるようにして見つかった。④・⑤同様の出土状況は須恵器甕（転用硯、⑥）にも認められ、これらは竪穴を廃棄する段階で遺物を意図的に置いたものと推測される。

出土遺物には、土師器坏・皿類、須恵器甕・壺類、鉄滓がある。土師器坏・皿類は少なくとも21個体出土しており、この中には内面黒色処理された坏が1個体含まれる。1～9は土師器坏、10・11は土師器皿、12・13は須恵器甕、14は須恵器壺である。土師器で底部の遺残するものは底面に回転糸切り痕を留める。1（④）は、体部外面に墨書（正位で2文字か）が認められ、左の1字は「厨」と思わ

れるが、右側は判読不能である。また内面にも墨痕あるいはタール状の付着物がある。２は内外面にタール状の付着物が、４（①）・６（⑤）・７・８（②）・９（③）・10は被熱痕跡がそれぞれ見られる。12は内面に摩耗痕と墨の付着が認められることから、須恵器大甕破片を転用した硯であったと思われる。14は低い台の付く壺と考えられる。

ＳＩ1280竪穴状遺構（第11・12図、図版４）

拡張区南東側、ＪＦ15を中心とする地区で検出した。複数の竪穴状遺構・土坑等と重複し、新旧関係は旧い方からＳＫ1293→ＳＩ1280→ＳＩ1281→ＳＫ1306→ＳＸ1284・1294となる。また竪穴内の北西部ＳＫ1306土坑の東隣には長さ110㎝×幅95㎝の略方形状で深さが10㎝程の浅い土坑（Ｐ１）が見られる。これは本竪穴に伴うのか、西隣のＳＩ1281に伴うのか明らかではない。

規模は残存する北側壁長が5.2ｍ、ＳＩ1281と重複する西側壁長が1.5ｍとなる。壁溝は認められず、壁高は28㎝である。柱穴は、その位置と掘り込み規模から北西隅のＰ２（径20㎝×深さ52㎝）、北側壁寄りのＰ３（長さ38㎝×幅30㎝×深さ51㎝）と床面南東側のＰ４（長さ30㎝×幅24㎝×深さ50㎝）が該当しそうであるが、他は不明確である。また床面上東側では３箇所で焼土の広がりを観察した。ＳＮ１は、長さ100㎝×幅80㎝の楕円状、ＳＮ２は径35～40㎝の略円形、ＳＮ３は長さ45㎝×幅20㎝の溝状である。

遺物は土師器坏・甕小片が出土しているが、図示できる個体はない。

ＳＩ1281竪穴状遺構（第11・12・15図、図版４）

拡張区中央南側、ＪＦ16を中心とする地区で検出した。ＳＩ1280と重複し、これを切る。またＳＫ1306は本竪穴を切り、さらにＳＮ1287・1307～1309焼土遺構は、ＳＩ1281・ＳＫ1306が廃棄され堆積土が形成された後に構築されたものである。一方、西側に位置するＳＩ1266との関係は不明であり、南側ではＳＩ1289と重複する位置関係にあるがこれも新旧は明らかではない。

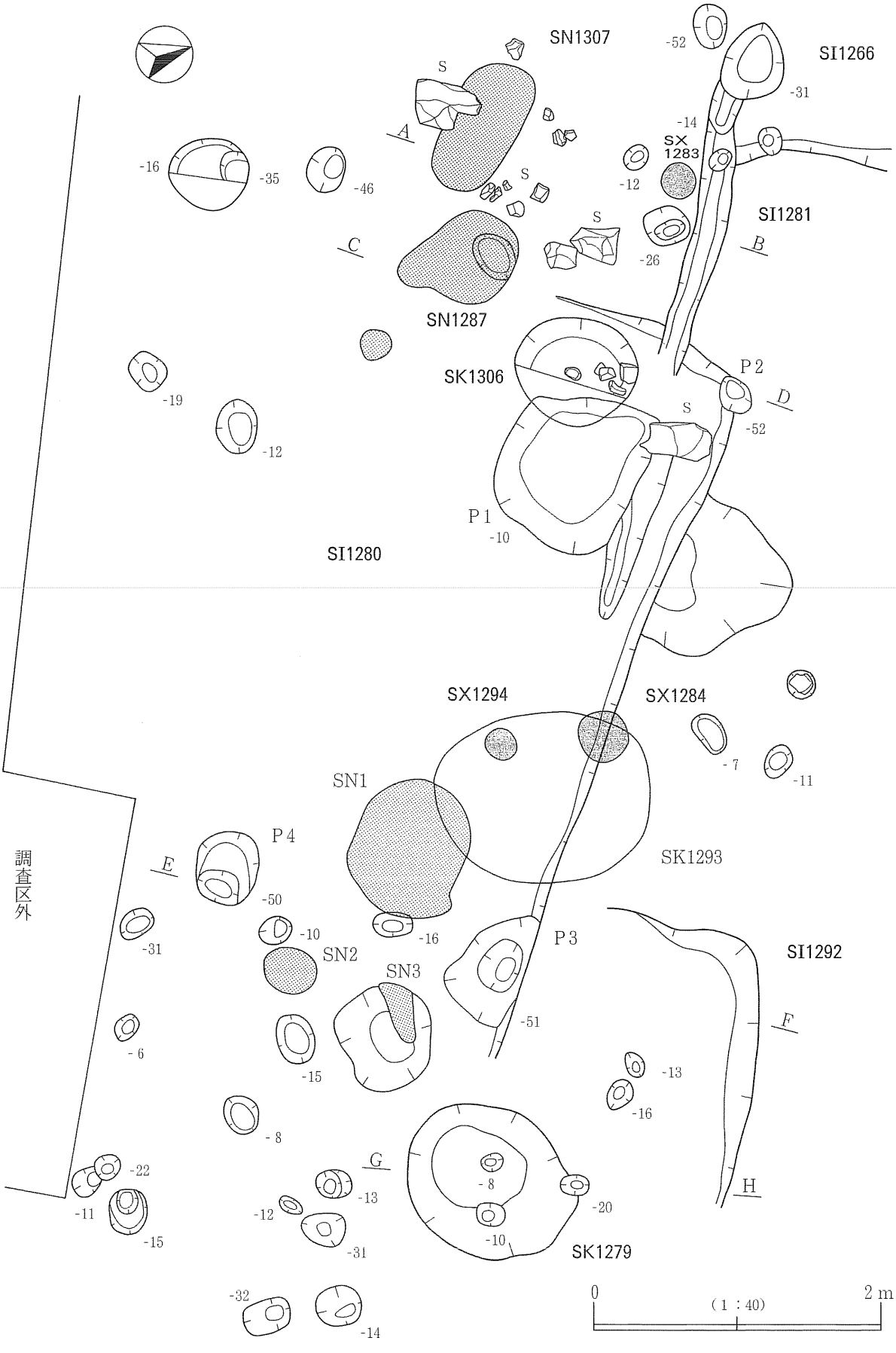
規模は残存する北側壁長を3.8ｍ分確認したにすぎない。壁溝を伴う竪穴であり、その幅は15～20㎝、深さは10㎝前後である。

出土した遺物は土師器坏（３個体）・甕、須恵器壺がある。１は被熱痕の見られる土師器坏である。２は砲弾形を呈する土師器甕の底部近くの破片である。内面の当て具が樹枝状を呈する。３は須恵器長頸壺となる個体であろう。外面体部下半にはロクロの回転を利用した横位のケズリ（ナデ状）が加わる。底面は台部接合時のナデ整形痕が明瞭に残る。

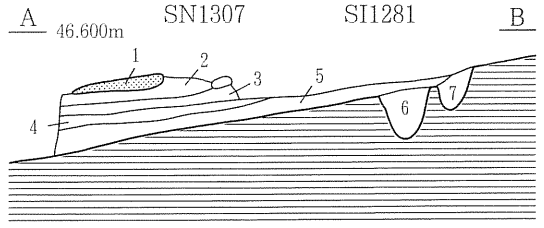
ＳＩ1288竪穴状遺構（第13・15図）

拡張区中央南側、ＪＨ16を中心とする地区で検出した。西側をＳＩ1266、東側をＳＫ1273・1302と重複する位置関係にあるが、それぞれの新旧は明らかにできなかった。確認し得た箇所は、東西に延びる北側壁の一部と床面上に位置する小土坑（Ｐ１）、北側壁に接する柱穴２本（Ｐ２・３）のみである。北側壁は長さ2.8ｍ、壁高は22㎝である。Ｐ２・３は、径40～50㎝、床面からの深さが70㎝前後と深くしっかりした掘り込みである。

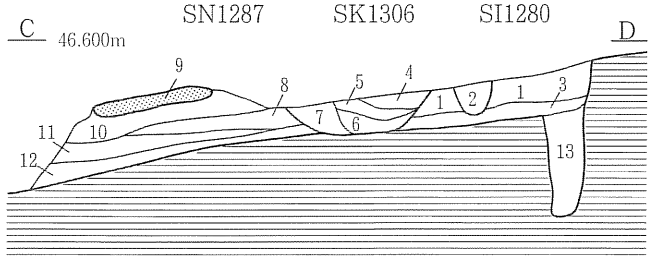
Ｐ１内には焼土・炭化物と共に土師器坏（１個体）・甕、須恵器が出土している。４は須恵器甕破片であるが、内面を転用硯として再利用されていたものである。２片の接合（Ａ＋Ｂ）及び内面・割面（断面）の墨痕・摩耗痕から次の点が判明した。当初Ａ＋Ｂ（あるいはこれ以上）で硯としていたものが、何らかの原因で欠損する。Ａ片はそのまま遺棄されたと思われるが、台形状となったＢ片だ



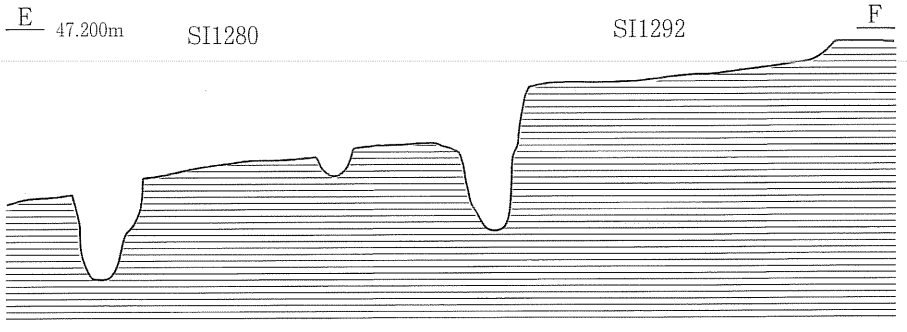
第11図　SI1280・1281・1292竪穴状遺構、SK1279・1306土坑（1）平面図

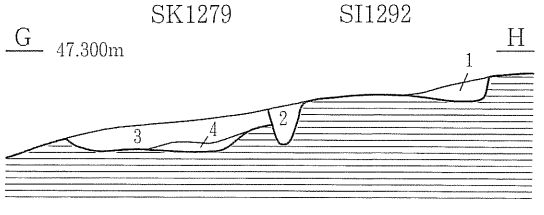


SI1281・SN1307
1．にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）焼土層、炭化物少量含む(SN1307)
2．褐色粘質土（7.5YR4/4）焼土を多く含む
3．黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粘土・炭化物少量含む
4．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）地山粘土多く含む
5．黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粘土・炭化物少量含む
6．褐色粘質シルト土（10YR4/6）
7．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土やや多く含む

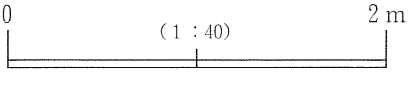


SI1280・1281、SK1306、SN1287
1．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土を斑状にやや多く含む
2．暗褐色シルト質土（7.5YR3/3）炭化物やや多く、焼土も少量含む
3．暗褐色シルト質粘土（10YR3/4）地山粘土を斑状に多く含む
4．暗褐色シルト質土（7.5YR3/4）炭化物・焼土やや多く含む
5．暗赤褐色焼土（2.5YR3/4）焼土層、炭化物ごく少量含む
6．黒褐色シルト質土（7.5YR3/1）炭化物を多量に、焼土を少量含む
7．黒褐色シルト質土（7.5YR3/2）土質は2・6層に類似、炭化物・焼土少量含む
8．暗褐色シルト質粘土（10YR3/4）3層と同一層か
9．暗赤褐色焼土（5YR3/4）焼土層、SN1287
10．褐色粘質土（7.5YR4/4）焼土を多く含む
11．黒褐色シルト質土（10YR3/1）
12．基本層序第Ⅳ層（地山漸移層）
13．暗褐色シルト質粘土（10YR3/4）地山粘土を斑状に多く含む





SK1279
1．にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土を斑状に多く含む
3．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土少量含む
4．黒褐色シルト質土（10YR2/3）炭化物多く含む

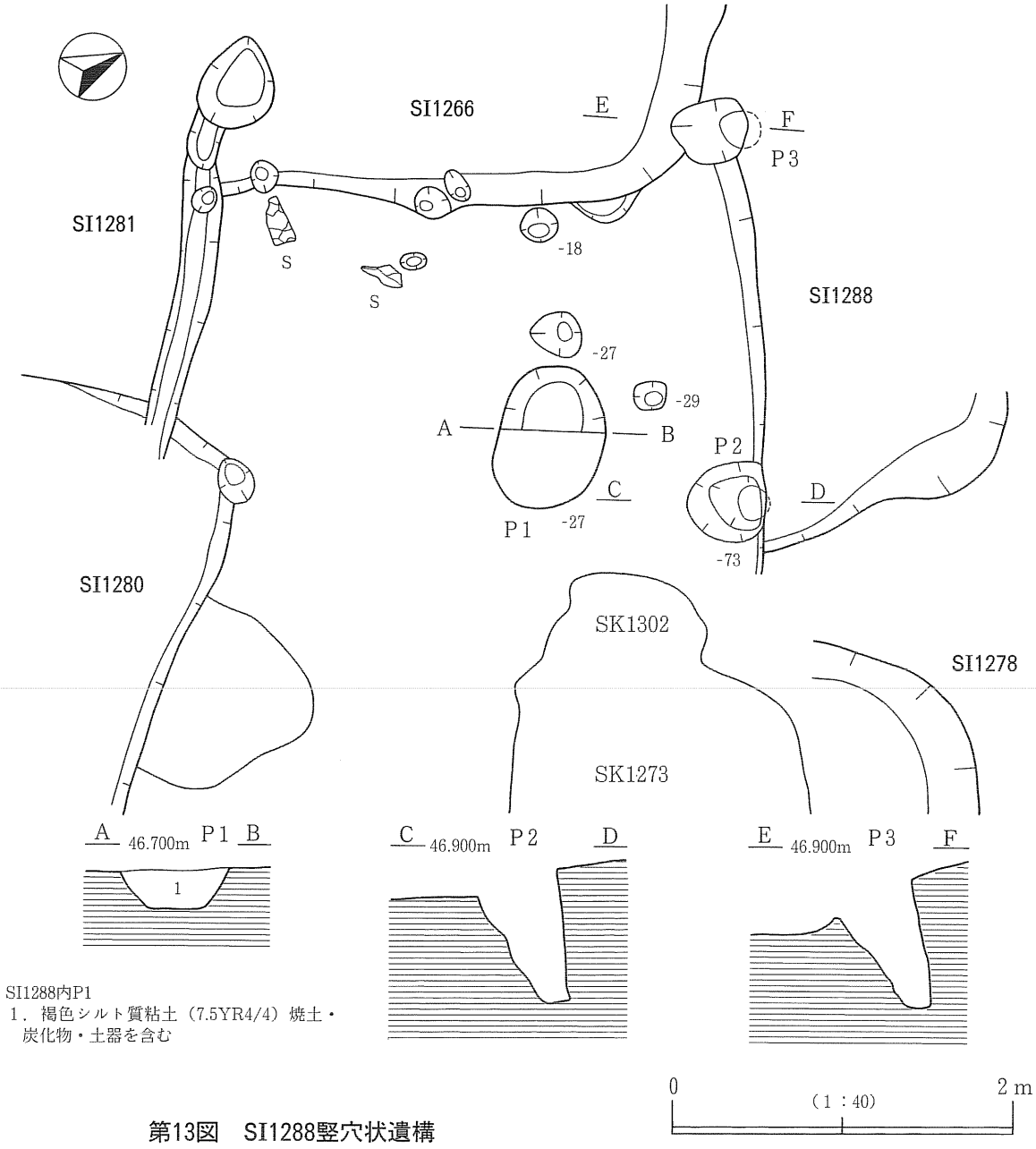


第12図　SI1280・1281竪穴状遺構、SK1279・1306土坑（２）土層断面

けはそのまま硯として使用が継続される。それはＢ片上端割面（Ａとの接合面）にも墨痕が認められることと、摩耗・墨痕の度合いがＡよりＢが格段に高いからである。またＢ片下端割面には硯として再生・整形する段階における擦痕（図にはスクリーントーンで表示）が残る。

ＳＩ1289竪穴状遺構（第14・15図、図版２）

拡張区中央南側、ＪＧ18を中心とする地区で検出した。竪穴北側でＳＩ1266、ＳＮ1291・1310と重複するが、両者より旧い。また北西隅でもＳＫ1290と重複し、これを切っている。規模は北側壁で6.9mとなり、北西・北東の両隅部を確認しているので、東西の長さは確定される。壁高は北壁中央部で35cmである。北西隅には幅15～10cm、深さ６～８cmの壁溝が一部ではあるが検出された。床面上には柱穴３本（Ｐ１～３）、焼土遺構３基（ＳＮ１～３）が位置する。ＳＮ１・２は床面上に、ＳＮ３



第13図　SI1288竪穴状遺構

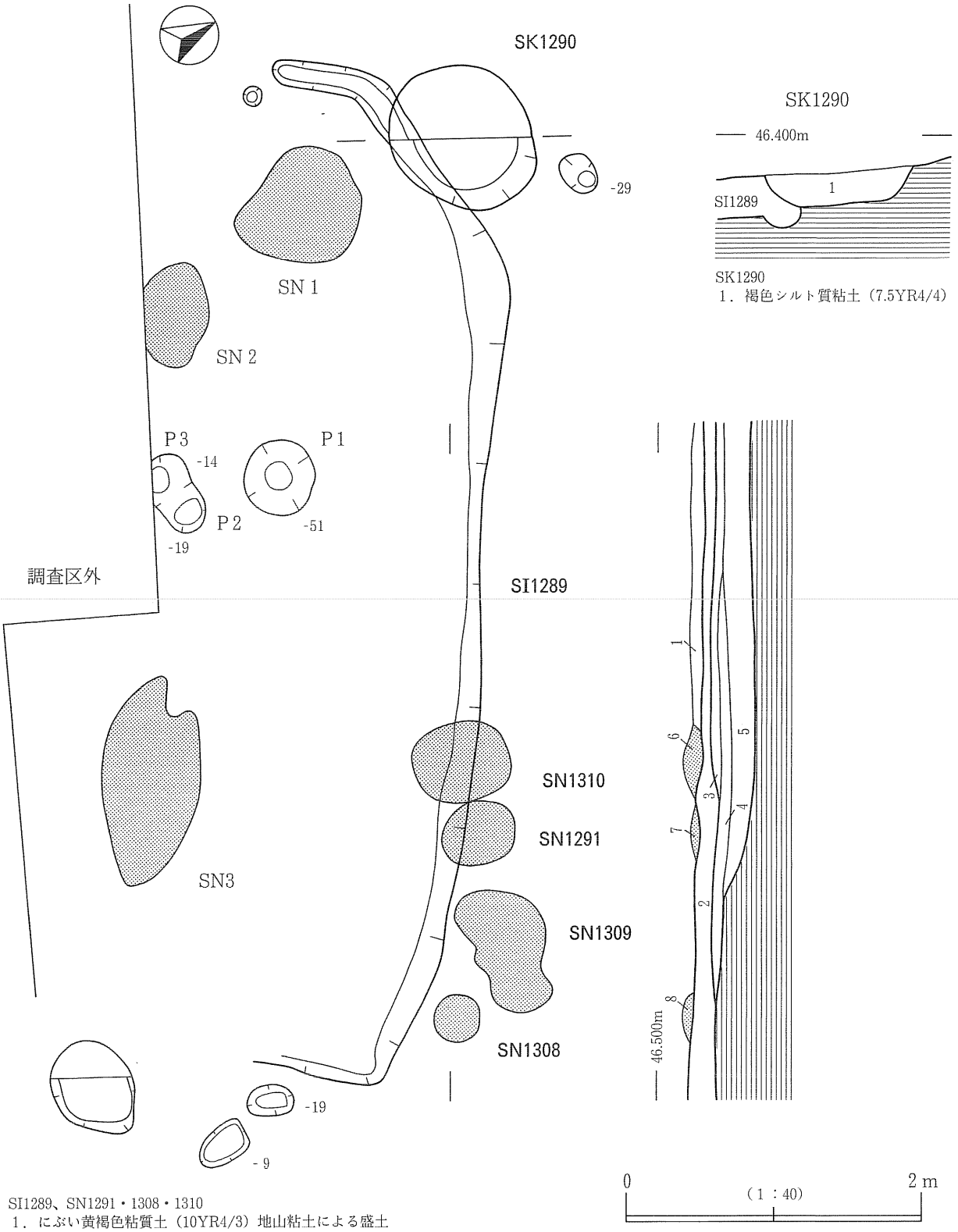
は床面直上で検出されていることから、本竪穴に伴う施設と考えられる。ＳＮ１は長さ85cm×幅80cmの略円形、ＳＮ２は長さ70cm×幅50cm前後の楕円状、ＳＮ３は長さ145cm×幅70cmの楕円形を呈する。

遺物は北西隅の壁溝内とＰ１とした柱穴内及びＳＮ３内から土師器坏（１個体）・甕、須恵器坏（１個体）が出土している。５は壁溝内出土の土師器甕である。被熱を受けた個体であり、底面に回転糸切り痕を残す。６は、ＳＮ３内出土の須恵器坏である。底面の切り離しは回転糸切りである。

ＳＩ1295竪穴状遺構（第16・17図、図版４）

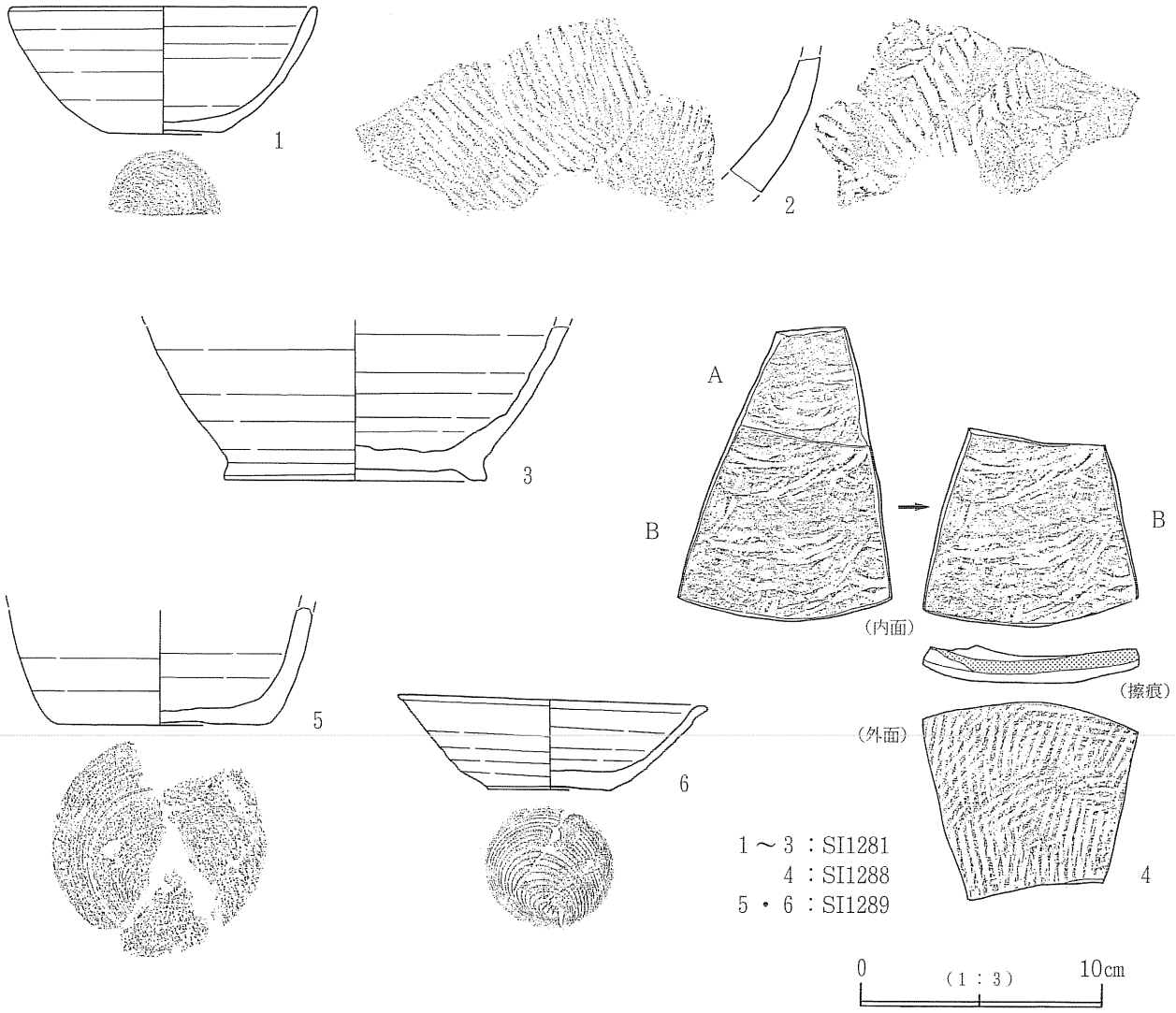
Ｂトレンチ北端部で検出した。規模・形態は明確ではないが、南側壁の一部を確認した。その壁高は20cmとなる。床面上には径あるいは一辺が60～100cmの略円・楕円形の小土坑が５基位置する。確認状況から見れば、これら小土坑は竪穴構築時に掘り込まれた何らかの施設と考えられる。

この土坑内より土師器坏・甕、須恵器甕が出土している。１（①）はロクロ使用の土師器甕である。受口状をなす口縁部内面には煤状炭化物（図中のスクリーントーン部分）が付着しており、煮炊きに



SI1289、SN1291・1308・1310
1．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）地山粘土による盛土
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土をやや多く含む、同層上面が中世の生活面か
3．褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土による盛土　※1～4層は堅く締まる
4．暗褐色シルト質土（10YR3/3）土質は5層と同、同層上面がSI1266床面
5．暗褐色シルト質土（10YR3/3）締まり強、地山粘土を斑状に少量含む、4・5層は人為的埋土
6．暗赤褐色焼土（2.5YR3/4）焼土層（SN1310）
7．暗赤褐色焼土（2.5YR3/3）焼土層（SN1291）
8．赤褐色焼土（5YR4/6）焼土層（SN1308）

第14図　SI1289竪穴状遺構、SK1290土坑



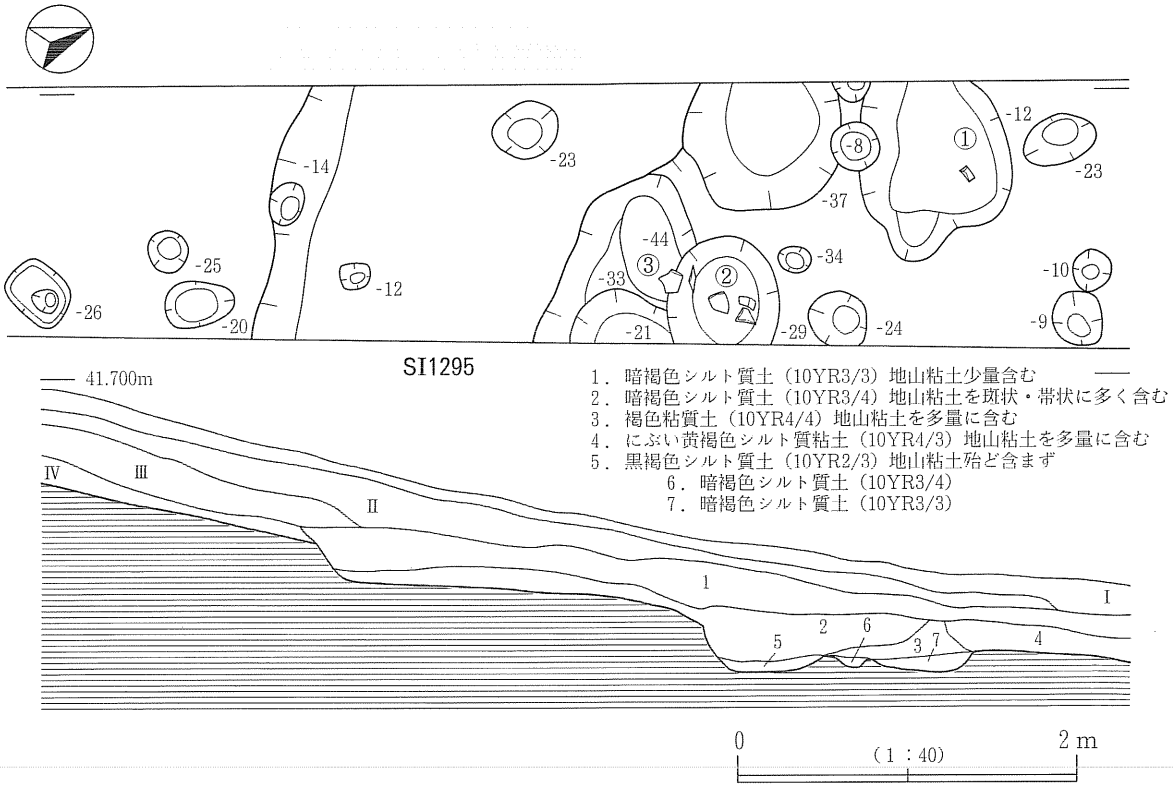
番号	種別	器形	特徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、被熱	12.9	4.6	5.4	0.36	41.9	26
2	土師器	甕	砲弾形、外：平行タタキ、内：樹枝状当て具						
3	須恵器	壺	内外：ロクロ調整→外面横位のケズリ		11.0	(6.8)			
4	須恵器	甕	外：平行タタキ、内：青海波当て具→整形→転用硯						
5	土師器	甕	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、被熱		9.4	(4.8)			
6	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.9	5.1	4.0	0.40	31.0	39

第15図　SI1281・1288・1289竪穴状遺構出土遺物

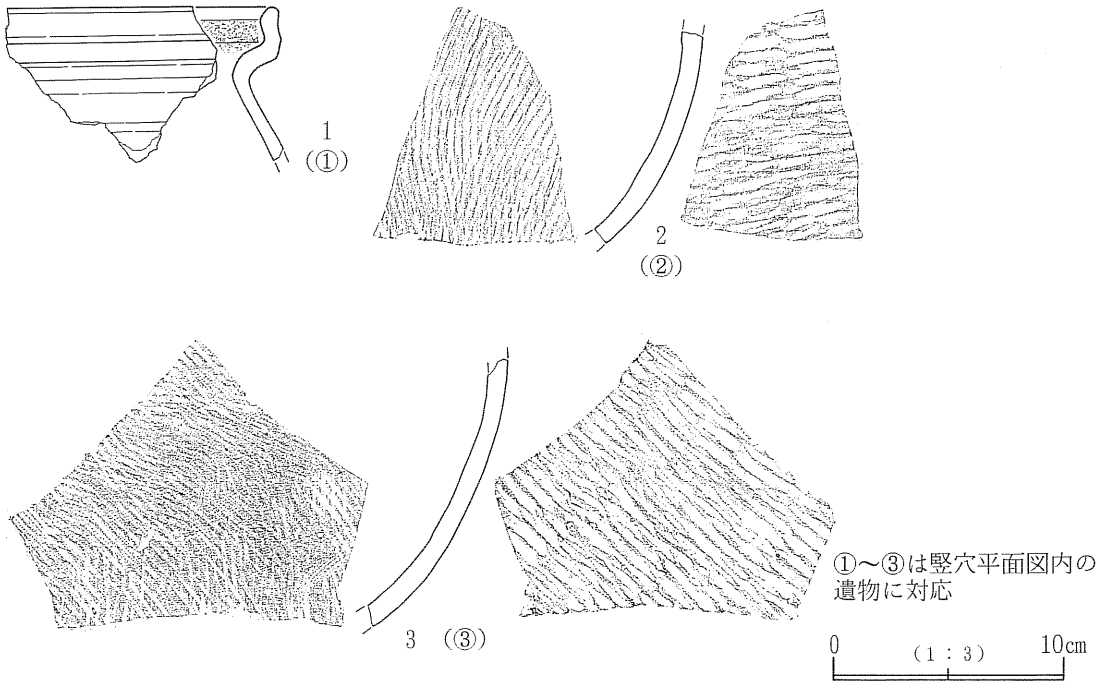
伴う吹きこぼれと思われる。2・3（②・③）は須恵器甕である。

ＳＩ1278・1292竪穴状遺構（第4・11～13図）

拡張区中央東側で検出した。ＳＩ1278はＳＩ1288、ＳＫ1273・1302と、ＳＩ1292はＳＩ1280とそれぞれ重複する位置関係にあるが、新旧は不明である。2軒とも竪穴の北西隅部を「Ｌ」字状に確認したに留まる。壁高は両竪穴とも12cmである。わずかに残存する床面はほぼ平坦であり堅く締まっている。遺物は出土していない。



第16図　SI1295竪穴状遺構



番号	種　別	器　形	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	甕	内外：ロクロ調整、内面全体に煤状炭化物付着						
2	須恵器	甕	外：平行タタキ、内：平行当て具						
3	須恵器	甕	外：平行タタキ、内：平行当て具						

第17図　SI1295竪穴状遺構出土遺物

②土坑

土坑は拡張区で12基検出しているが、このうち古代の土坑は、出土遺物・堆積土の状況などから10基と判断される。他の２基は出土遺物がなく、時期の特定はできないが、掘り込み面や重複から古代以前の縄文時代と思われる。

ＳＫ1271土坑（第18図）

拡張区南東側、ＪＧ14で検出した。土坑西側をＳＫ1272により一部破壊されている。現況での規模は長さ85㎝×幅82㎝で東西方向に長い楕円状を呈していたと思われる。深さは最深で30㎝である。遺物は出土していない。

ＳＫ1272土坑（第18図）

拡張区南東側、ＪＦ・ＪＧ14で検出した。東側でＳＫ1271と重複し、これを切り込んでいる。規模は長さ170㎝×幅130㎝の南北に長い不整楕円形を呈する。遺物の出土はない。なお土坑南側にある礫（直方体状、長さ72㎝×幅58㎝×高さ35㎝）は地山・基盤層に深く入り込んでおり、元々ここに存在していたものである。

ＳＫ1273土坑（第18・19図、図版４）

拡張区中央東部、ＪＧ15で検出した。西側でＳＩ1288・ＳＫ1302と重複する位置関係にあるが、その新旧は明確にできなかった。規模は、長さ180㎝×幅160㎝の比較的整った隅丸方形を呈する。確認面から底面までの深さは68㎝となる。壁の立ち上がりは、北面ではほぼ垂直となるが、対する南面では緩やかに上昇する。堆積土は４層に分けられ、人為堆積と考えられる最上層（１層）中には土師器坏（６個体）・甕、須恵器甕、平瓦が遺棄されていた。

１は土師器坏であり被熱を受けている。２は灰白色を呈する平瓦片である。全体に摩耗しているが、凹面には布目が、凸面には格子叩目が残る。

ＳＫ1276土坑（第18図）

拡張区西側、ＪＨ18で検出した。規模は長さ270㎝×幅170～205㎝の不整楕円形となる。確認面からの深さは10～25㎝である。底面には小さな凹凸が一面に広がり、他土坑底面が概ね平坦であるのに比較すると際だって異質な感がある。堆積土は暗褐色シルト質粘土で充填されていた。人為的に埋められたと思われる。遺物は土師器の細片が僅かに出土している。

ＳＫ1279土坑（第11・12図）

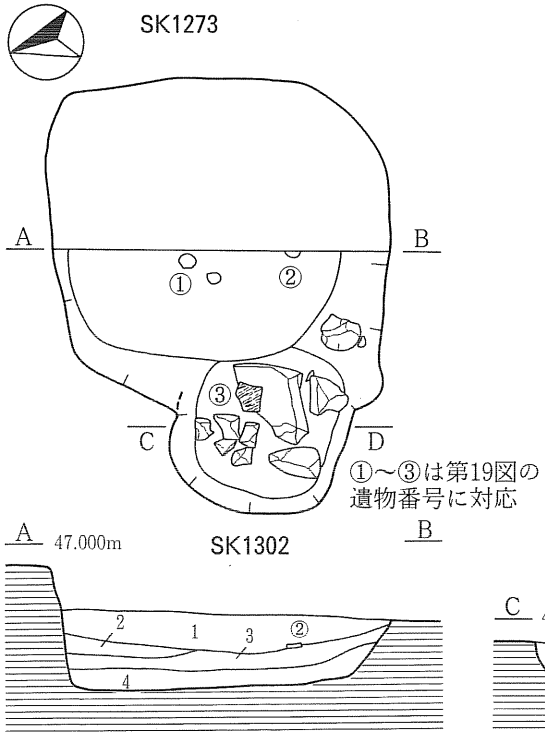
拡張区東側、ＪＥ・ＪＦ14で検出した。ＳＩ1280北側壁と重複する位置関係にあるが、直接的な重複は認められない。規模は長さ120㎝×幅105㎝の略円形を呈する。確認面からの深さは20㎝程である。遺物は土師器坏・甕が僅かに出土した。

ＳＫ1286土坑（第18図）

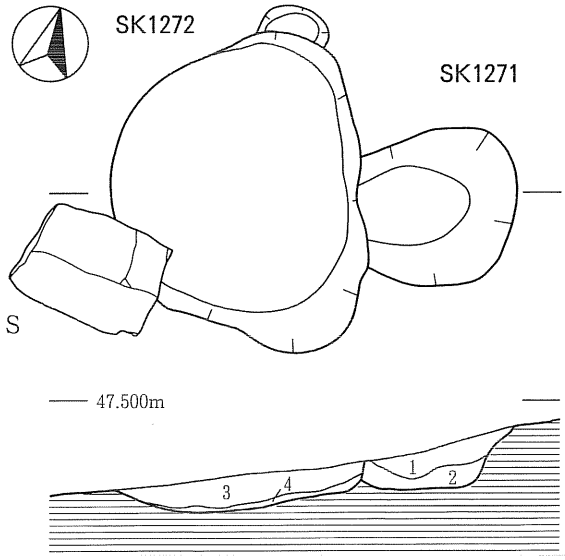
拡張区中央部、ＪＨ16で検出した。規模は一辺が80㎝の円形を呈し、確認面からの深さは北側で最深35㎝となる。出土遺物はない。

ＳＫ1290土坑（第14図）

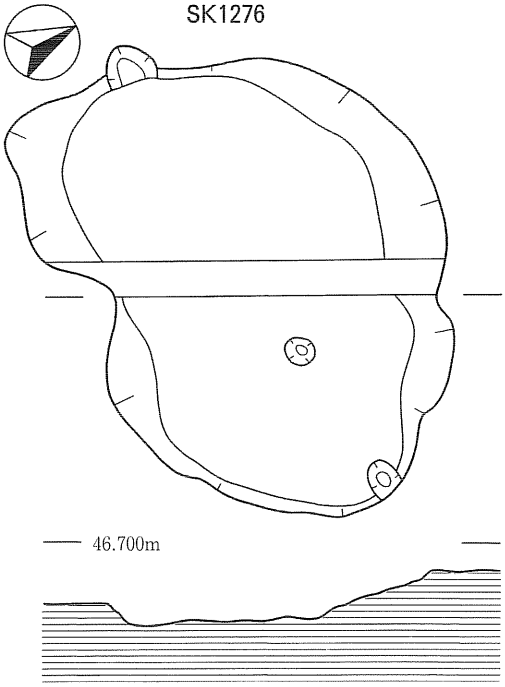
拡張区南西部、ＪＧ18・19で検出した。ＳＩ1289と重複し、竪穴に土坑南側を切られる。そのため規模は不明確ではあるが、東西方向は100㎝、残存する南北は85㎝であり、本来径100㎝程の略円形を呈する土坑であったと思われる。確認面からの深さは最深で35㎝となる。

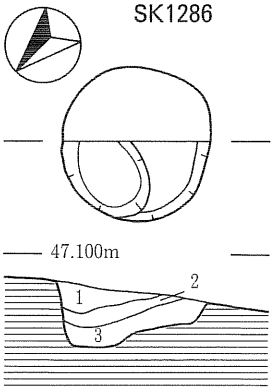


SK1273・SK1302
1．暗褐色シルト質土（10YR3/3）炭化物多量に地山粘土もやや多く含む
2．黒褐色シルト質土（10YR2/2）混入物少ない
3．暗黒褐色シルト質土（10YR3/3）炭化物・地山粘土やや多く含む
4．黒褐色シルト質土（10YR2/3）
5．黒褐色シルト質土（10YR2/2）



SK1271・1272
1．黒褐色シルト質土（7.5YR3/2）地山粘土少量含む
2．褐色粘質土（10YR4/4）地山粘土を多量に含む
3．黒褐色シルト質土（10YR3/2）地山粘土少量を含む
4．橙色砂質粘土（7.5YR6/8）砂質地山粘土を多量に含む

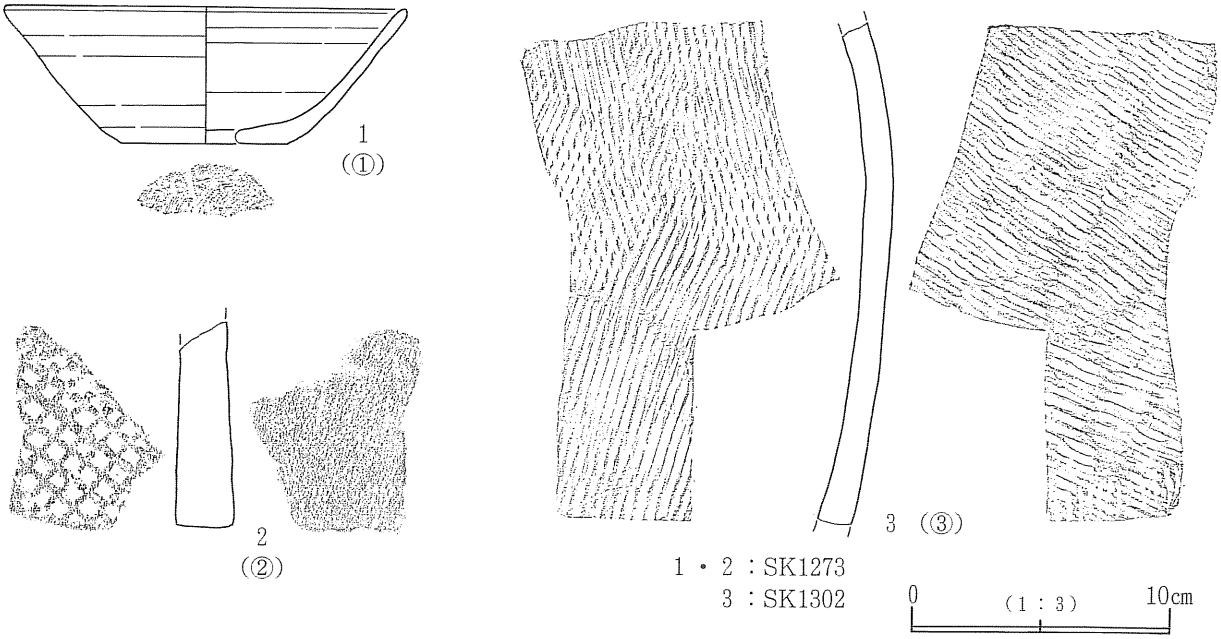




SK1286
1．暗褐色シルト質土（10YR3/4）混入物少ない
2．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土斑状にやや多く含む
3．暗褐色シルト質土（7.5YR3/4）地山粘土斑状に多く含む

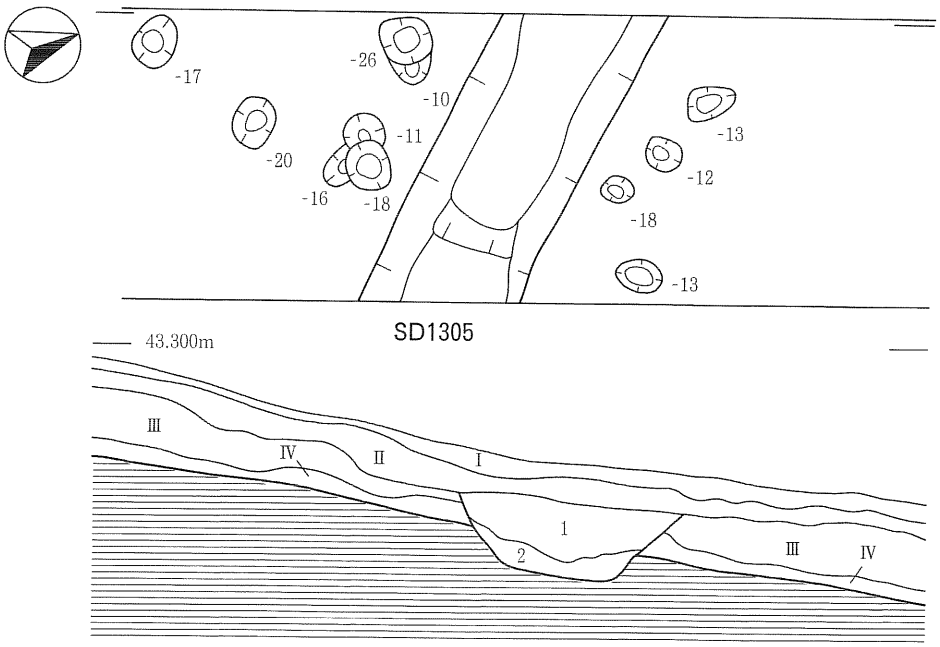
0　（1：40）　2 m

第18図　SK1271～1273・1276・1286土坑



番号	種別	器形	特徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り、被熱	15.8	6.6	5.4	0.42	34.2	35
2	瓦	平瓦	凸面：格子叩き、凹面：布目						
3	須恵器	甕	外：平行タタキ、内：平行当て具						

第19図　SK1273・1302土坑出土遺物



SD1305
1．黒褐色シルト質土（10YR2/3）第Ⅲ層に類似。地山粘土斑状にやや多く含む
2．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土斑状に多く含む

第20図　SD1305溝状遺構

ＳＫ1302土坑（第18・19図、図版４）

拡張区中央東部、ＪＧ15で検出した。東側に隣接してＳＫ1273が構築されているが、その新旧は不明である。規模は一辺が90cm前後の隅丸方形を呈すると思われる。深さは32cmである。堆積土中には拳大から20cmを超すような角礫（硬質泥岩）が10数点見られ、これは意図的に投げ込んだものと考えられる。角礫に混じり須恵器甕破片も出土している。３は須恵器甕であり、内外面に平行タタキ・当て具痕が見られる。

ＳＫ1306土坑（第11・12図）

拡張区中央南側、ＪＦ16で検出した。ＳＩ1281と重複し、同竪穴堆積土を切り込んで構築している。その規模は長さ85cm×幅75cmの略円形を示し、深さは20cmである。堆積土中には焼土・炭化物を多量に含み、土師器も混在している。

ＳＫ1311土坑（第８図）

拡張区南西部、ＪＧ18で検出した。ＳＩ1266西側壁と重複する位置関係にあるが、直接的な重複は認められず、新旧等は不明である。規模は長さ76cm×幅70cmの円形を呈する。深さは確認面から最深で45cmとなる。堆積土中に土師器の細片が含まれている。

③溝跡

溝状を呈する遺構は、出土遺物がなくその構築時期を特定できない。ただ後述のように本年報においては、ＳＤ877空堀を他遺構との重複関係から中世に帰属させることにして、周辺の溝跡（特にＢトレンチ内）は、掘り込み面の確認と配置状況（土塁・空堀と溝の位置関係・方向性の検討）を通して、大部分は古代に属すると見たい。

ＳＤ1303溝跡（第５図）

Ｂ・Ｃトレンチの交差部で検出した。ＳＩ1274竪穴住居跡と重複し、これを切るが、ＳＦ1300土塁盛土が本溝跡堆積土の上部にくる。溝の幅は90～110cm、深さ30～42cmであり、北西－南東方向に延びる。

ＳＤ1304溝跡（第５図）

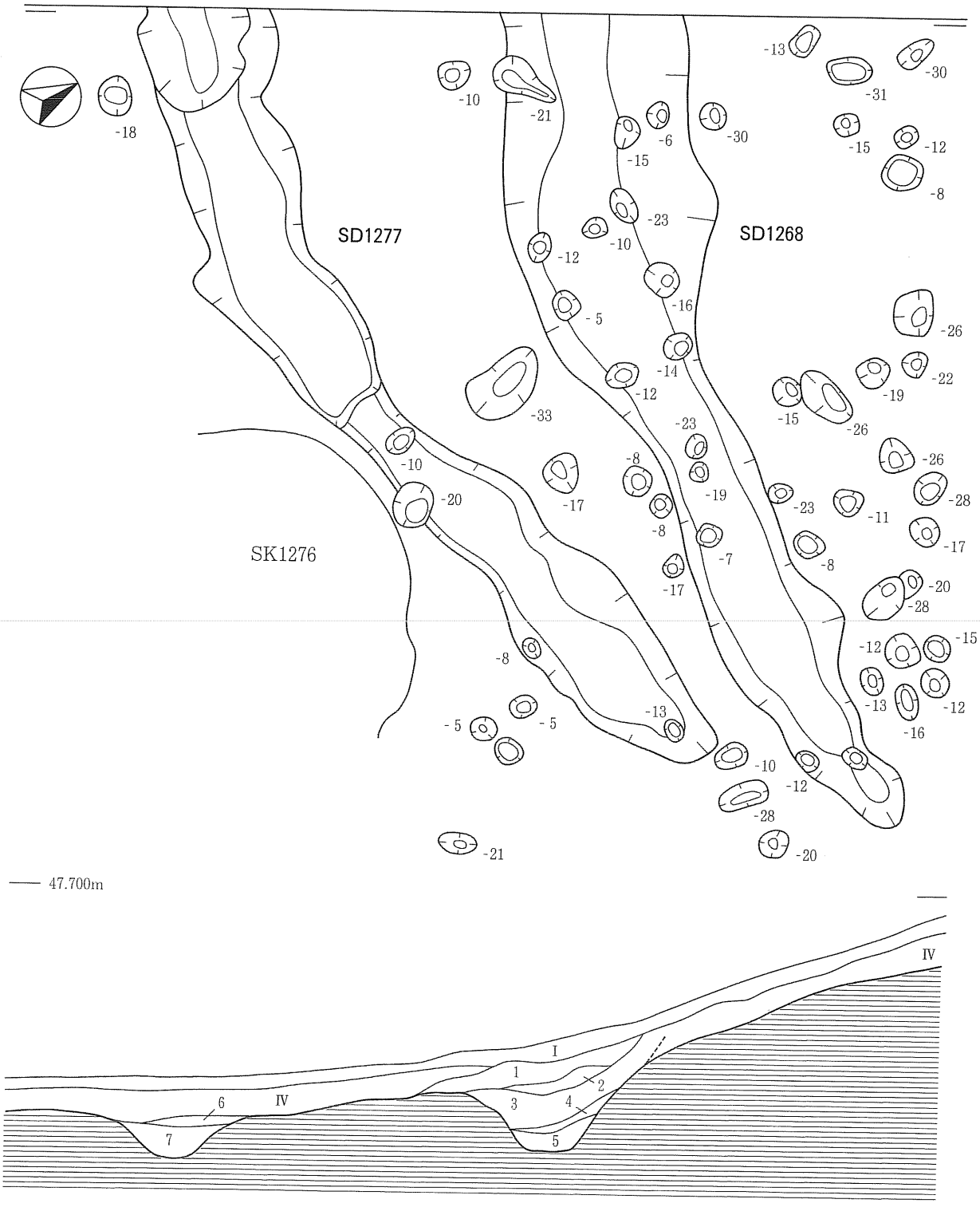
Ｂトレンチで平坦面から北側にやや下る位置で検出した。およそ東－西方向に延び、確認面での幅は80～90cm、深さは50cmとなり、断面形状は緩い逆台形を示す。ＳＤ1303は本溝跡の南約４ｍにあり、両者は同一方向をとるものではない。

ＳＤ1305溝跡（第20図）

Ｂトレンチ北側緩斜面で検出した。北端部のＳＩ1295とＳＤ1304の間に位置する。およそ北西－南東方向に延び、ＳＤ1303と同一方向を示す。確認面での幅は80cm前後、深さは20～32cmとなる。

ＳＤ1268・1277溝跡（第21図、図版５）

拡張区西端で検出した。２条とも東西方向に延び、斜面上位がＳＤ1268、0.5～1.5m離れた下位にＳＤ1277がそれぞれ位置する。前述のＢトレンチで確認したような溝とは異なり、しっかりした掘り込みではない。壁・底面とも凹凸が著しく、幅・深さも一様ではない。ＳＤ1268は調査した長さ６ｍ、最大幅1.3m、西端での深さ0.5m、ＳＤ1277は調査した長さ6.3m、最大幅0.9m、西端での深さ0.28mである。両溝跡内より土師器細片が、ＳＤ1277では平瓦片が出土している。



SD1268・1277
1．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土少量含む
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土やや多く含む
3．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土・炭化物やや多く含む
4．褐色粘質土（10YR4/4）地山粘土の二次流入土
5．明褐色粘質土（10YR5/6）
6．暗褐色シルト質土（10YR3/3）SD1268の1層と同質
7．褐色粘質土（10YR4/4）SD1268の4層と同質

0　（1：40）　2 m

第21図　SD1268・1277溝状遺構

（２）中世

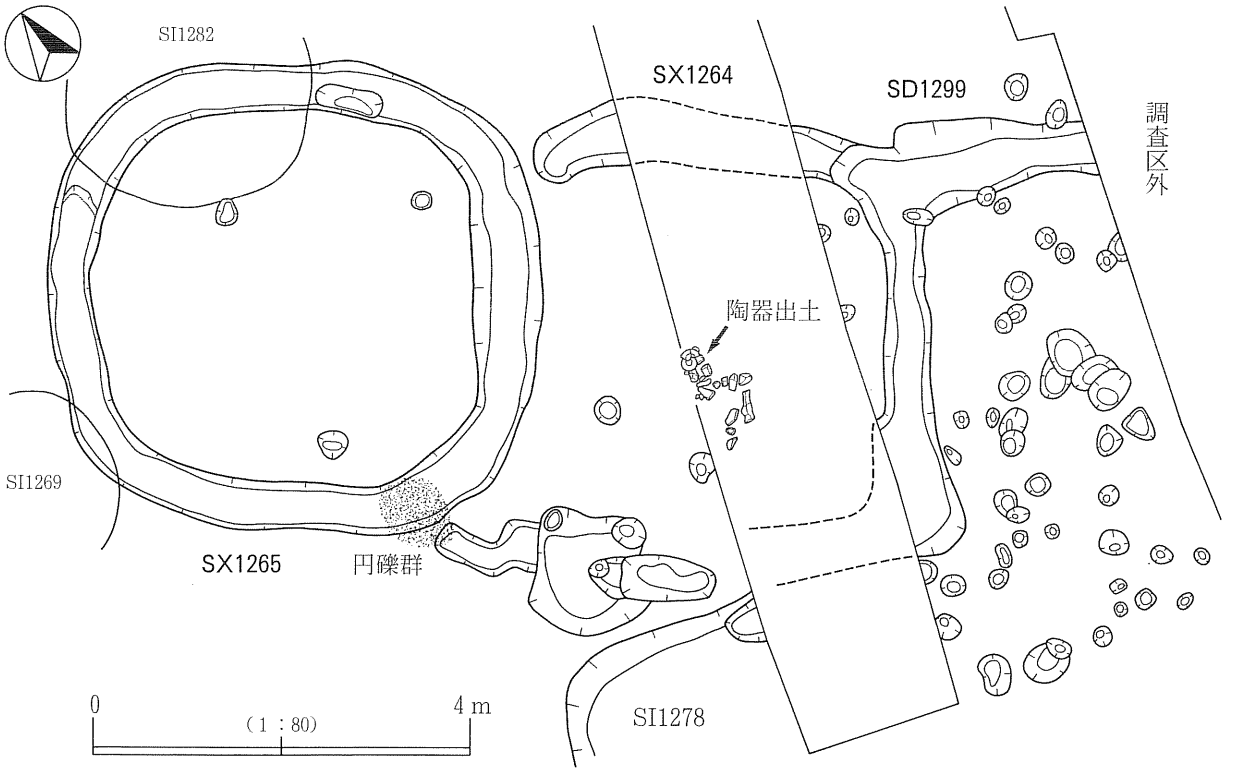
明確に中世と判断される遺構は、遺物の出土したＳＸ1264墳墓のみであるが、同様の形態を示す溝状の遺構（ＳＸ1265)、ＳＸ1264に接続するＳＤ1299溝跡と、土塁・空堀も本項で扱う。また焼骨がまとまりをもって検出された遺構（火葬墓３基）と同一面上で確認した焼土遺構６基は、古代の竪穴状遺構を切り込んで、あるいはその上位面に構築されていることから、近世以降の可能性も含みつつ、本項で記述する。

①墳墓・隅丸方形溝状遺構

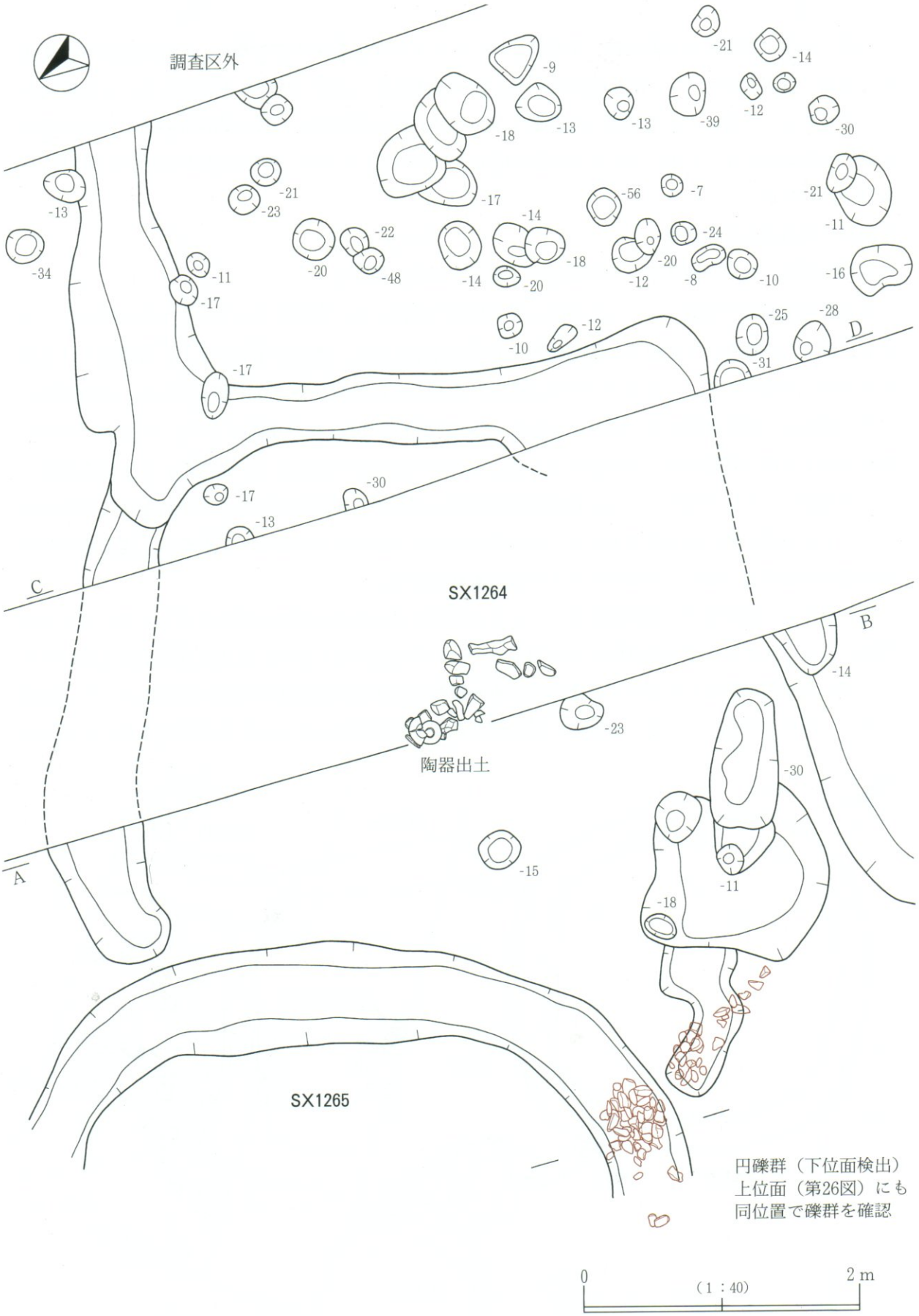
ＳＸ1264墳墓、ＳＤ1299溝跡（巻頭図版２、第22～25図、図版５・６）

拡張区北東側の平坦面、ＪＩ14を中心とする地区で検出した。現表土下わずか５～10㎝程のところから、倒立した擂鉢とその直下に陶器壺が正立して確認された。遺物を観察すると、擂鉢はその上部を打ち欠いて皿状に加工したもの（下半は完形）を壺の上に蓋をするように被せていた。植物根等により口縁部の一部を破壊されてはいるものの、壺は完形品を埋設したと判断される。また壺の下には、盤状を呈する礫（硬質泥岩）が数点見られる。その並べ方は雑ではあるが、礫を敷いた上に壺を置くことを意図したものと考えられる。礫は長森基盤層に存在する硬質泥岩であり、予め盤状に剥離されていたものを集め敷いたものであろう。なお礫の中には１点のみではあるが、おそらく縄文時代の半円状扁平打製石器（擦石）を転用したものも含まれていた。

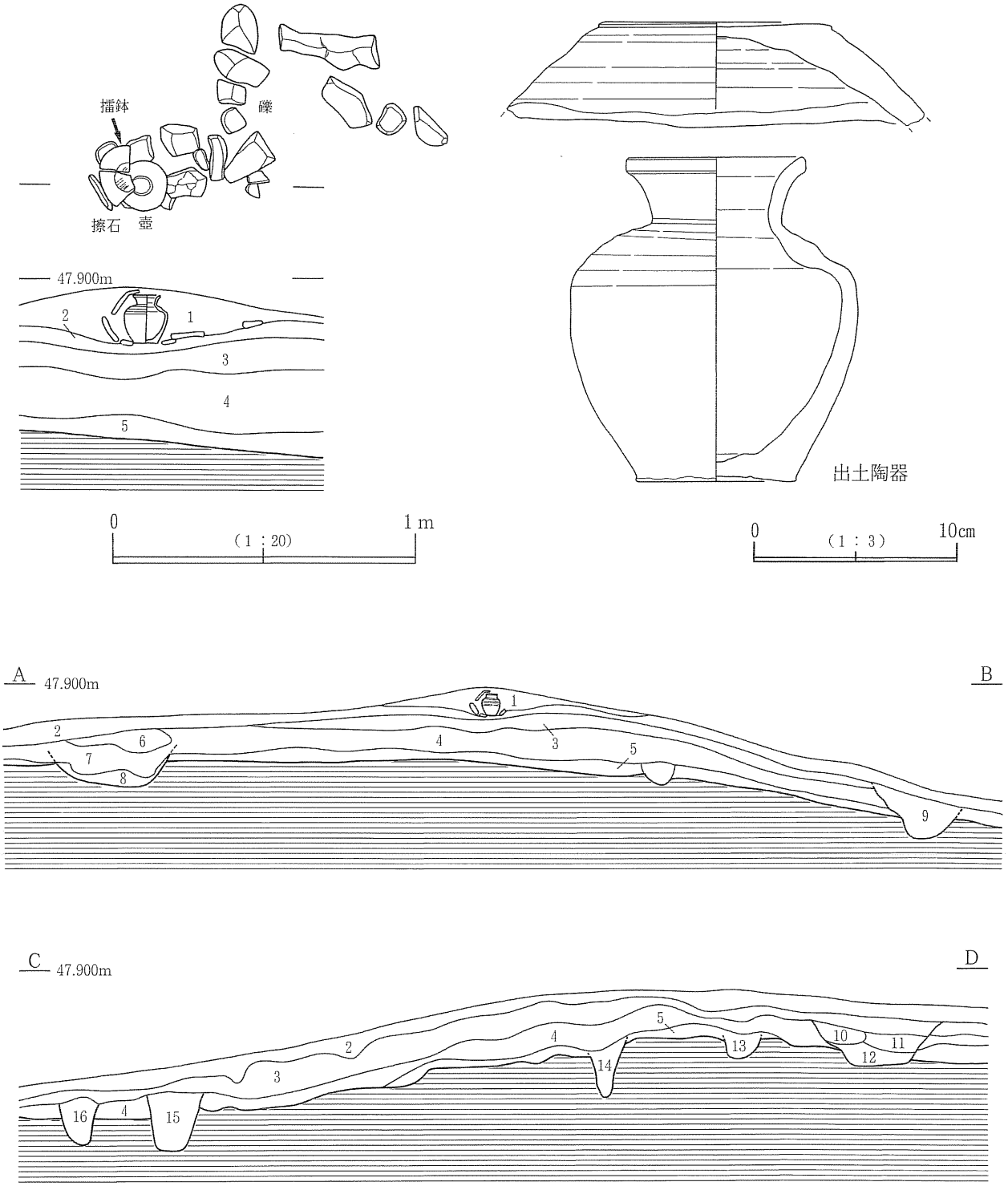
壺の出土した位置を今一度確認すると、ここは周囲の表土層より僅かに高まりをもっていることが判明し、このことから盛土を残存させる墳墓であった可能性が出てきた。盛土は周辺の表土高からすれば20～50㎝程の高まりに過ぎず、また土層断面観察でも明瞭な盛土層の確認はできなかった。現表土下に一部で礫を敷いていることから、当時の地表面下に手を加えていることは間違いないことと考



第22図　SX1264墳墓とSX1265隅丸方形溝状遺構全体図

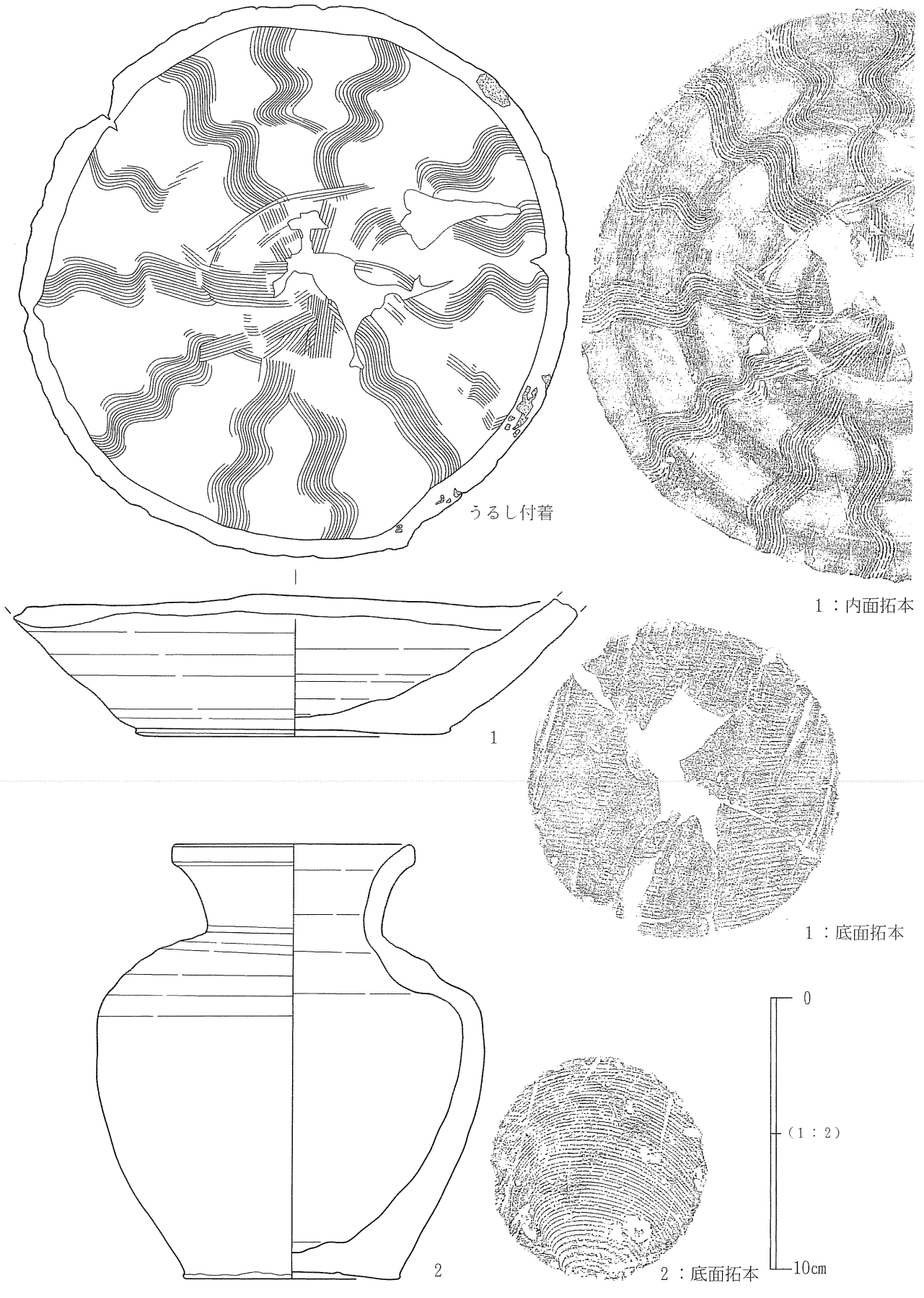


第23図　SX1264墳墓（1）平面図



1．暗褐色シルト質土（10YR3/3）盛土？、植物根多し
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）第Ⅰ層表土層
3．暗褐色シルト質土（7.5YR3/4）第Ⅱ層相当層、同層上面が墳丘（周溝）構築面か
4．暗褐色シルト質土（10YR3/3）第Ⅲ層相当層
5．褐色粘質土（10YR4/4）地山漸移層
6．暗褐色シルト質土（10YR3/4）
7．暗褐色シルト質土（10YR3/3）
8．褐色粘質土（10YR4/4）
9．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
10．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）9層と同質
11．暗褐色シルト質土（10YR3/3）
12．暗褐色シルト質土（10YR3/4）
13．暗褐色シルト質土（10YR3/3）
14．暗褐色シルト質土（7.5YR3/4）
15．暗褐色シルト質土（10YR3/3）
16．暗褐色シルト質土（10YR3/3）15層と同質

第24図　SX1264墳墓（２）土層断面図



第25図　SX1264墳墓出土陶器

え合わせると、自然地形の起伏をうまく利用したものとも推測される。一方、推定盛土範囲を精査したところ、その縁辺には北西側に隣接するＳＸ1265と同様の溝が巡ることが明らかとなり、周溝を伴う墳墓であったと判断された。その規模は、周溝外側で一辺が５ｍ前後の隅丸方形となる。溝の幅は40～50㎝、深さは15～20㎝となる。なお溝はその北東隅から枝分かれするように東に１条延びる（ＳＤ1299)。本墳墓との関係は不明確ではあるが、未調査区に及ぶ新しい墳墓あるいはＳＸ1264の拡張・改修に伴うものの可能性もある。現況での溝の幅は50～80㎝、深さは10～13㎝であり、長さ２ｍ分を精査した。

壺は最大径（14.2㎝）を胴部中～上半におく器高16㎝の小型ロクロ壺である。ロクロ整形痕は最大径より上で比較的顕著にその凹凸が観察されるが、以下ではそれを消すようなナデ（横方向のち一部で縦方向）が加わる。器厚も下位ほど厚味を増し、小さいながらも重量感のある壺である。揚底の底面（底径8.0㎝）には回転糸切り痕が残るが、ロクロの回転が弱いのか静止糸切り状に見える。切り離し面には沈線様の圧痕が認められ、乾燥時には簀子状の台に置かれていたと思われる。器面は典型的な須恵器と同じ暗灰色を呈するが、肩部を中心にごま塩状・黄褐色の灰を被っている。焼成は良好である。

擂鉢はその上半部を意図的に打ち欠き高さ5.2㎝、口径20.5㎝皿状にしており、欠損部の破片は一切出土していない。現況での口縁部を見ると部分的ではあるが、漆と考えられる暗褐色の付着物が認められ、このことから次の点を指摘できる。使用時に何らかの要因でおそらく粘土積み上げ箇所から皿状に欠落した擂鉢を漆継ぎにより補修して使用を続けていた。これを墓に埋納する段階で再び接合部から打ち欠いて皿状に整形し、これを壺の蓋に転用したと言えよう。擂鉢外底面（底径11.4㎝）には静止糸切り痕が残り、壺同様に簀子状の台に置かれていたと考えられる。内面には幅1.2㎝（卸目12本）の櫛目が波状に13単位入れられている。この面全体に摩耗痕があることから、擂鉢として長期あるいは頻度の高い使用が推測される。器面の色調は壺よりやや白っぽく、灰～灰白色を呈し、焼成は良好ではあるが、壺に比較するとややあまく見える。

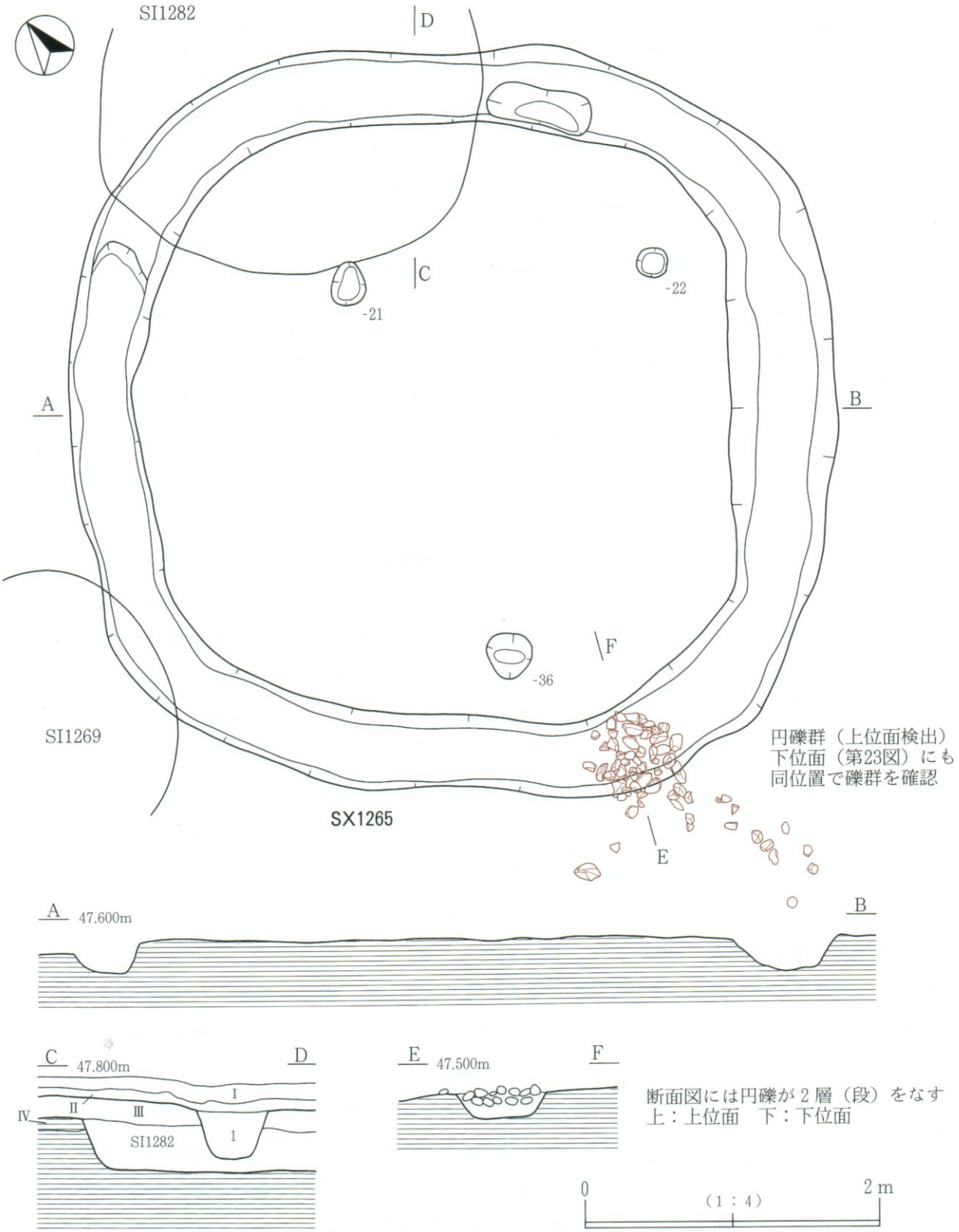
壺の内容物については、次節（１）で分析報告を掲載する。

ＳＸ1265隅丸方形周溝遺構（第22・23・26図、図版５・６）

拡張区中央北側の平坦面、ＪＪ15を中心とする地区で検出した。幅40～80㎝（平均的には50～60㎝）の溝が隅丸方形を呈するように巡るもので、その外径は東西5.2ｍ×南北4.9ｍとなる。溝は途切れることなく全周し、その深さは８～25㎝、底面は凹凸が著しい。

溝の南側の一角には確認面上から拳大の円礫（河原石）が110個まとまりをもって見つかっている。集石の範囲は径60㎝程で高さ20㎝の間に少なくとも２～３段積まれている（第26図断面図参照)。第26図には上位面での、第23図には下位面での礫をそれぞれ図示している。礫は一部、南側の溝内（ＳＸ1264墳墓周溝か）にも見られる。この円礫は払田柵跡基盤層に存在する角礫（硬質泥岩）ではなく、明らかに他所から運び込まれたものである。なお円礫の平均重量は306ｇである。

溝で囲まれた内部には明確な盛土あるいは掘り込み施設は確認できなかった。しかし南東側に隣接するＳＸ1264墳墓の存在を考えれば、構築時には盛土を伴う墳墓であった可能性が高い。



SX1265
1．黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粘土を斑状にやや
　多く、炭化物少量含む

第26図　SX1265隅丸方形溝状遺構

②火葬墓

ＳＸ1283火葬墓（第11図、図版７）

拡張区中央南側、ＪＧ16で検出した。古代の竪穴ＳＩ1281の上位面に位置する。杉木根の直下にあたり、その攪乱を受け不明確な面もあるが、およそ径25㎝の範囲内に骨がまとまる。

ＳＸ1284火葬墓（第11・33図、図版８）

拡張区南東側、ＪＦ15で検出した。古代の竪穴ＳＩ1280北壁を切り込み、その下位面には縄文時代の土坑ＳＫ1293が位置する。ＳＸ1283火葬墓はここから西約４ｍにある。骨は径30㎝程の円形の範囲にまとまって確認されたが、明確な掘り込み等の施設は不明である。

ＳＸ1294火葬墓（第11・33図、図版９）

拡張区南東側、ＪＦ15で検出した。縄文時代の土坑ＳＫ1293の上位面にあたる。北側に位置するＳＸ1284火葬墓とは僅か80㎝の距離にある。骨は径20㎝程の範囲にまとまり、明確な掘り込み等の施設は検出されなかった。以上３基の火葬墓出土の骨については、次節（２）で分析報告を掲載する。

③焼土遺構

ＳＮ1287・1291・1307～1310（第11・14図、図版８）

拡張区中央南側にある焼土遺構群である。およそ北西－南東方向、等高線に添う形でほぼ一列に６基が並ぶ。これらは古代の竪穴ＳＩ1266・1289・1281の上位面に位置し、各竪穴に堆積土が形成された後に構築されたものであることを確認している。規模はＳＮ1287で長さ85㎝×幅65㎝、ＳＮ1291で長さ50㎝×幅42㎝、ＳＮ1307で長さ95㎝×幅50㎝、ＳＮ1308で径30㎝、ＳＮ1309で長さ90㎝×幅45㎝、ＳＮ1310で長さ65㎝×幅55㎝の楕円あるいは略円形を呈する。これら焼土遺構は、その東側に位置する火葬墓と同一面にあたることから両者の関係が想起される。

④土塁・空堀跡

ＳＦ1300・1301土塁跡（付図、第27図、図版９）

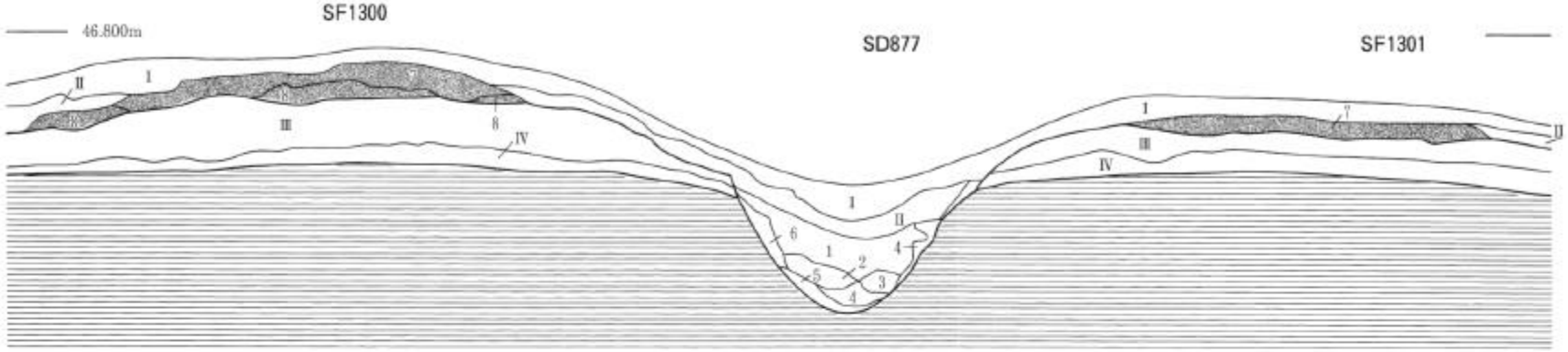
長森丘陵部西端において南北に並ぶ２条の土塁跡である。その間にＳＤ877空堀が位置する。東側土塁をＳＦ1300、西側土塁をＳＦ1301とする。およそ南北に延びるが、確認したその中央部でいくらか東に屈曲し、緩い逆「く」字状を呈する。

ＳＦ1300土塁は、確認した長さは51ｍ、上面幅は1.4～2.7ｍ、基底幅は4.5～5.5ｍとなる。現況での高さは空堀の表土から土塁頂部まで0.8ｍである。Ｃトレンチを設定して断面観察を行ったところ、土塁は第Ⅲ層上面に地山粘土（７・８層）を15～25㎝程度の高さに盛り上げていることが判明した。

ＳＦ1301土塁は、確認した長さは45ｍ、上面幅は1.2～1.8ｍ、基底幅は3.5～5.0ｍとなる。現況での高さは空堀部での表土から土塁頂部まで0.55ｍである。

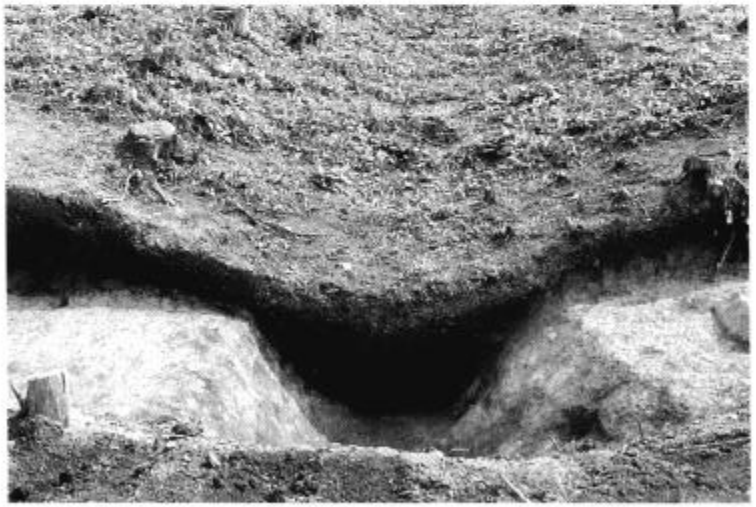
ＳＤ877空堀跡（付図、第３・27～30図、図版９・10）

ＳＦ1300土塁とＳＦ1301土塁に挟まれる位置にあり、長森丘陵西端部を南北に延びる。現況でも窪地の道路状となり現認される。これは平成元年度の第80次調査で長森丘陵西側の微地形測量を行っているが、この測量結果として道路状の遺構が確認され図示されている（第３図参照）。これによると丘陵北西端を始点とすると、ここから土塁の間を南に延び、南端で等高線に添うように東に折れそのまま延びる。丘陵東側に進むと南に開口する沢があり、この手前で北に方向を変える。全体的な軌跡としては北に開く緩い「Ｕ」字形を呈するものである。

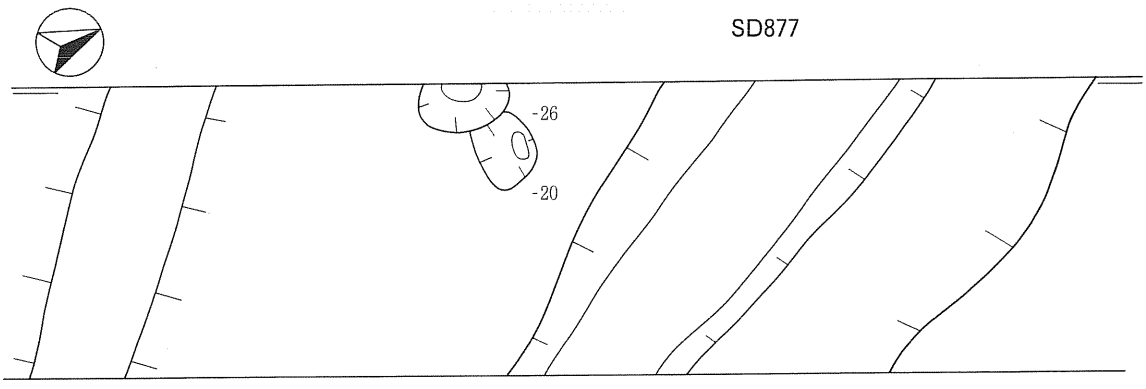


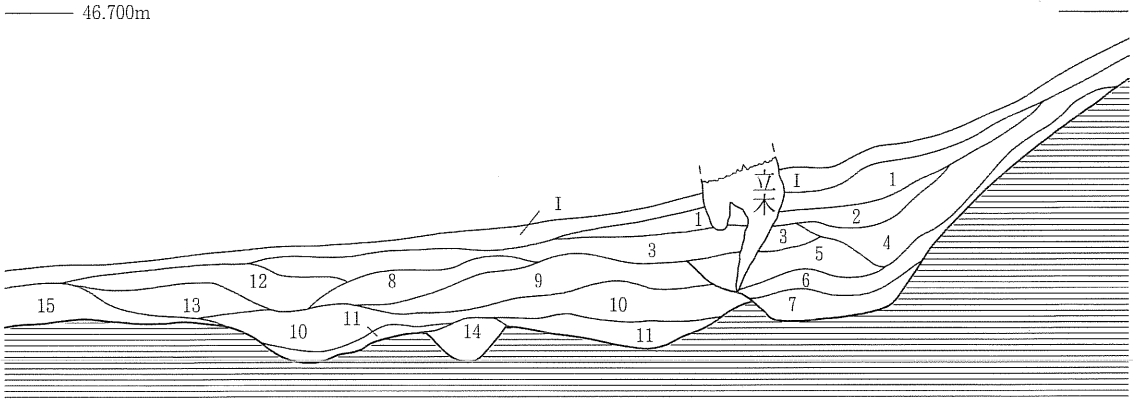
第27図　土塁・空堀跡土層断面図（Cトレンチ南壁）

SF1300土塁（手前）・SD877空堀（中央）・SF1301土塁（奥）
東側から撮影、最手前にSI1274、奥の林が真山



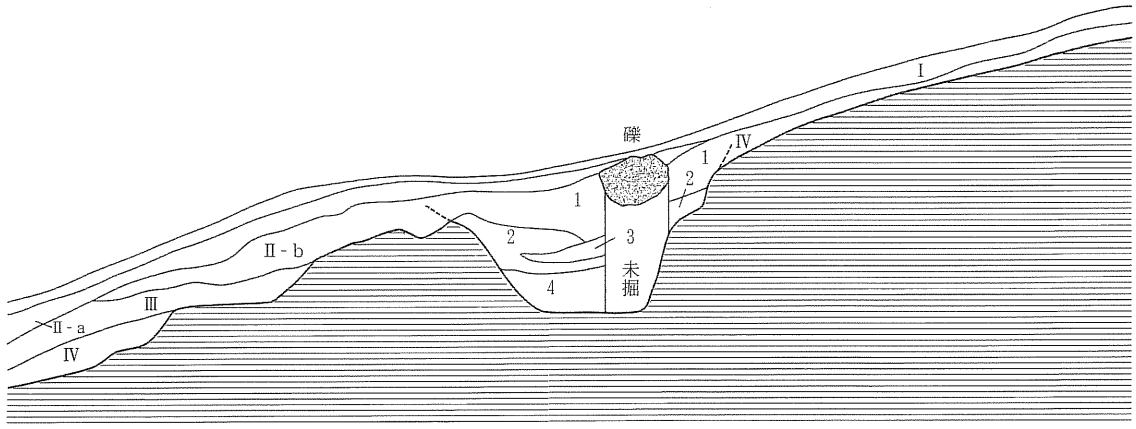
SD877空堀　土層断面（北→）Cトレンチ内





Ｂトレンチ

1．褐色粘質土（10YR4/4）地山土の流入土か
2．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土少量含む
3．にぶい黄褐色粘質シルト土（10YR4/3）地山粘土斑状にやや多く含む
4．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土ごく少量含む
5．明褐色砂質粘土（10YR6/8）砂質の地山（黄橙色砂質粘土10YR7/8）を主とする層
6．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土少量含む
7．褐色粘質シルト土（10YR4/4）地山粘土を多く含む
8．明褐色砂質粘土（10YR6/8）5層と同質、同時期に堆積か
9．暗褐色シルト質土（10YR3/3）6層と同質
10．黒褐色シルト質土（10YR2/3）炭化物やや多く、地山粘土ごく少量含む
11．にぶい黄褐色粘質シルト土（10YR4/3）3層と同質
12．褐色粘質土（10YR4/6）炭化物・地山粘土斑状にやや多く含む
13．にぶい黄褐色粘質シルト土（10YR4/3）地山粘土斑状にやや多く含む
14．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土少量含む
15．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）地山漸移層（第Ⅳ層）

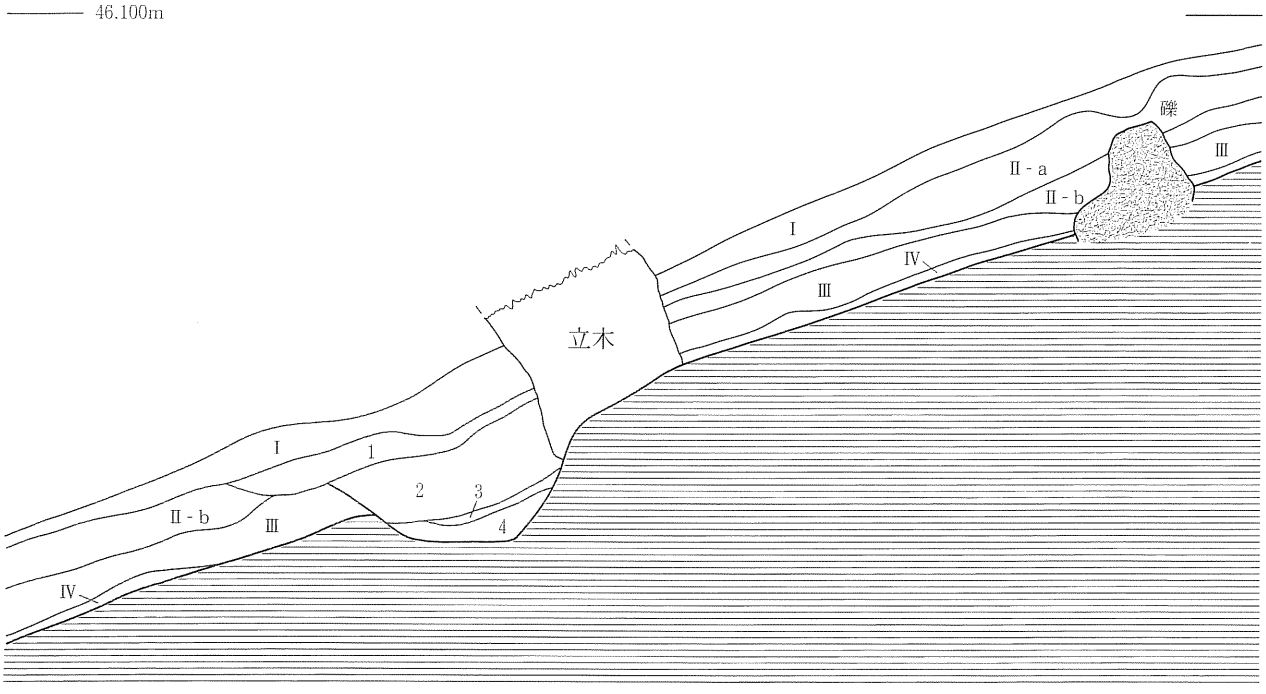


Ｄトレンチ

1．褐色粘質シルト土（10YR4/4～4/6）炭化物少量含む
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土・炭化物少量含む
3．褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土の二次堆積層
4．黄褐色粘質土（10YR5/6）地山粘土斑状に多く含む
※全体に粘質土あるいは粘質の強いシルト土、締まりは下位ほど弱くなる

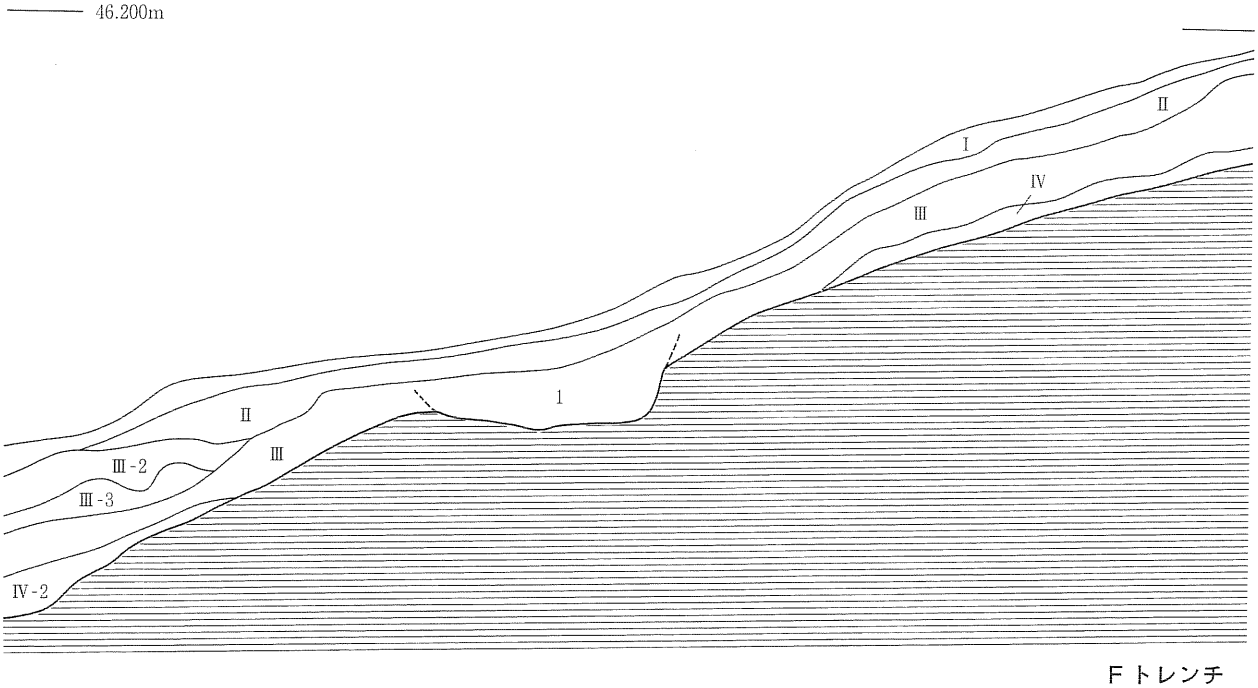
0　（1：40）　2 m

第28図　SD877空堀跡（１）平面・断面図



1．灰黄褐色シルト質粘土（10YR4/2）堅く締まる、地山粘土を斑状に多く含む
2．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土やや多く含む
3．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土やや多く含む
4．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土やや多く含む
※混入する地山粘土の粒径は細かい

Ｅトレンチ

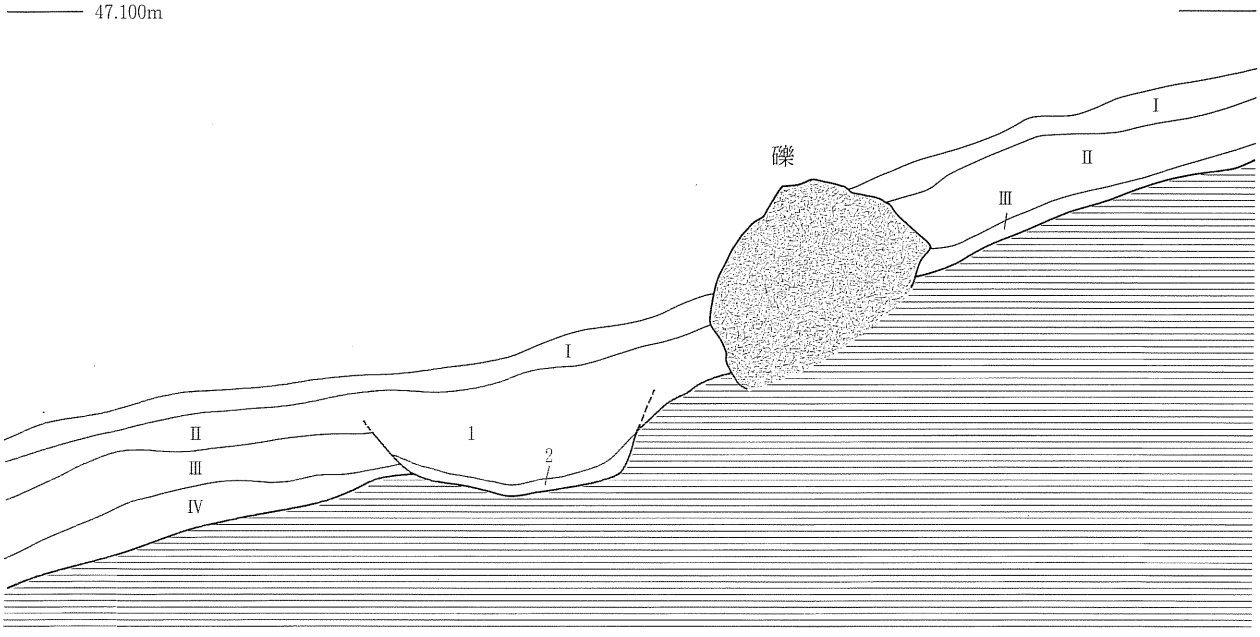


Ｆトレンチ

1．黒褐色シルト質土（10YR2/3）第Ⅲ層に類似。地山粘土斑状に多く、炭化物も少量含む

0　（1：40）　2 m

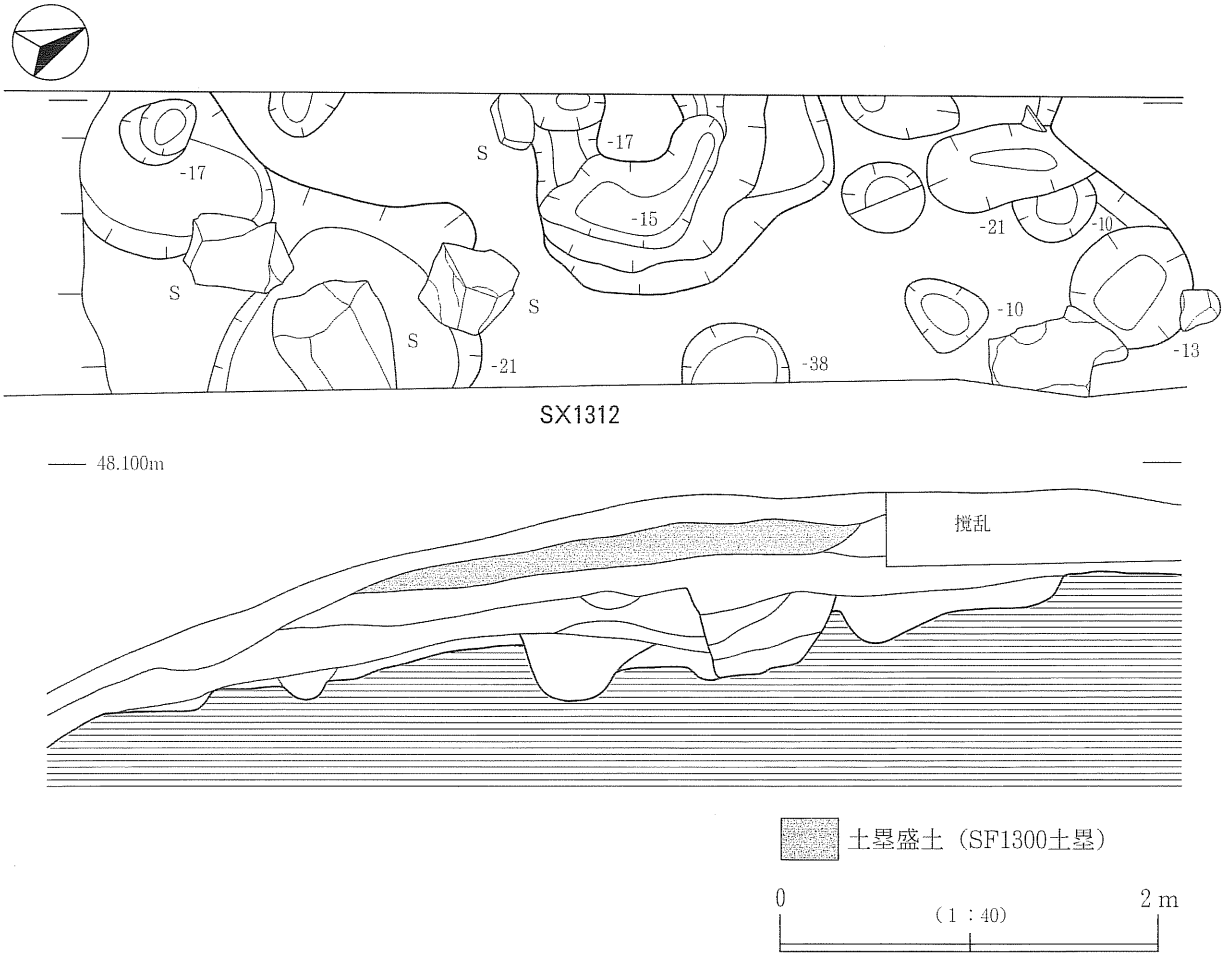
第29図　SD877空堀跡（２）断面図



1．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土やや多く含む。第Ⅲ層に類似
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土やや多く含む

Ｇトレンチ

第30図　SD877空堀跡（３）断面図



第31図　Ｂトレンチ内（中央南側）遺構配置図（SX1312）

道路状遺構は、同年度第81次調査においてその北西端部を精査し、溝跡であることを確認し、ＳＤ877溝跡としている。この時点でのデータは、確認した長さ16m、上面幅1.7～2.0m、深さ0.45～1.0m、底面は平坦で、断面は逆台形を呈するとある。

今次調査ではＢ～Ｇトレンチで同溝跡を検出し、これは現況の道路状微地形下に位置することを確認できた。本遺構は丘陵西端部のみではあるが、土塁に挟まれる位置で確認されたことを受け、溝跡を空堀跡とし、番号は平成元年度のＳＤ877を踏襲することにした。

堀跡の規模は、Ｂトレンチで上面幅1.2m、下面幅0.7m、深さ0.8m、Ｃトレンチで上面幅1.6～2.0m、深さ0.8m、Ｄトレンチで上面幅1.5m、下面幅0.7m、深さ0.7m、Ｅトレンチで上面幅1.4m、下面幅0.8m、深さ0.7m、Ｆトレンチで上面幅1.4m、下面幅0.8m、深さ0.4m、Ｇトレンチで上面幅1.6m、下面幅0.6m、深さ0.45mとなる。断面形状はＣトレンチ部でＵ字形に近い形状を示す（第27図）他は、箱堀状の逆台形を呈している。出土遺物はない。

（３）縄文時代

該期の遺物が出土した遺構は、ＳＩ1282竪穴状遺構１基のみであるが、これに酷似する形態をもつ遺構・重複関係などから類推して次の６遺構（竪穴状遺構４基、土坑２基）を縄文期と判断している。

①竪穴状遺構

ＳＩ1269竪穴状遺構（第32図、図版11）

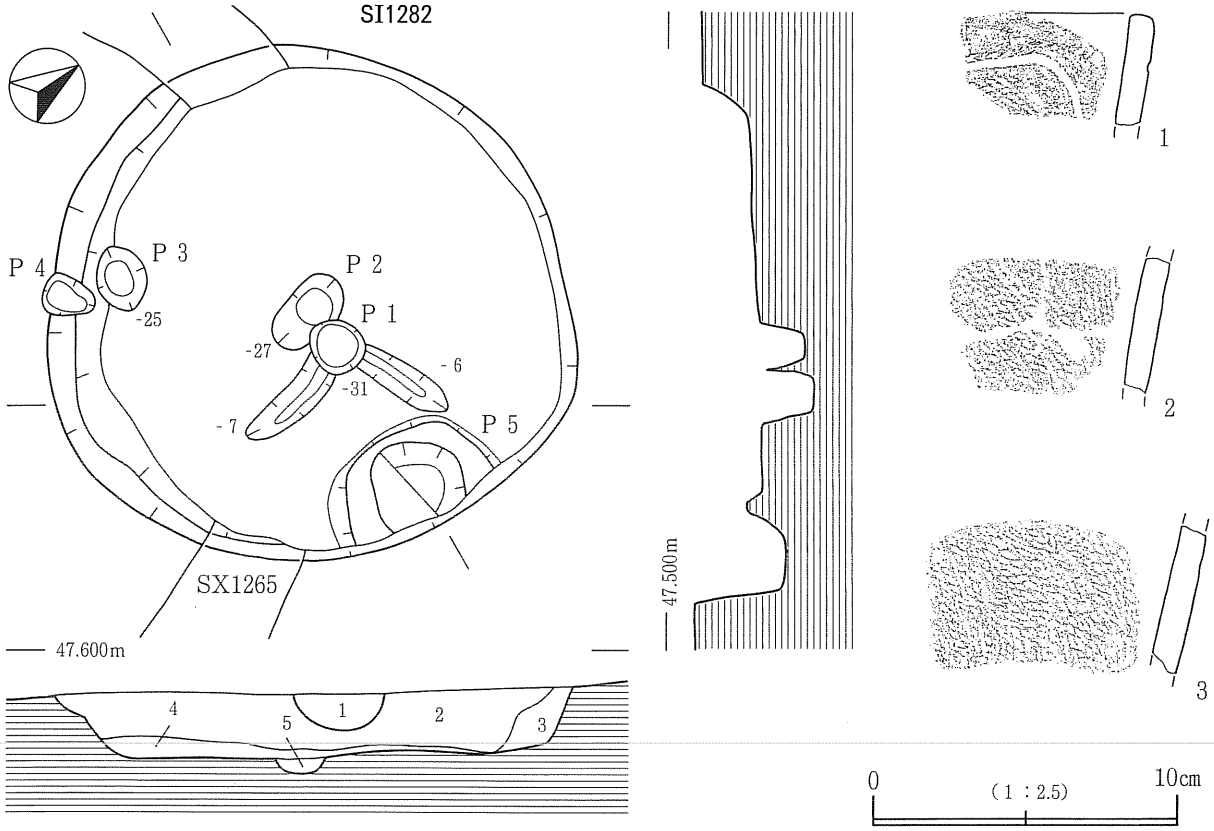
拡張区中央北部、ＪＩ・ＪＪ16で検出した。中世の墳墓（ＳＸ1265）と東端で重複し、これに切られる。規模は径２ｍの整った円形を呈する。確認面から底面までの深さは最深で27cmとなる。底面は平坦であり、堅く締まる。堆積土は褐色系の粘質シルト土単層で人為的に埋め戻されたと判断される。この中には長さが20～30cm位の角礫（硬質泥岩）が５点底面直上で見つかっている。これも意図的に置かれたと考えられる。底面中央に置かれた礫の下から、径18cm、深さ24cmの小柱穴が検出された。これらのことから、竪穴廃棄時に中央の柱を抜き取った後、その穴の上に長森基盤層に存在する角礫を１点置き、その周囲にも４点の礫を等間隔状に置いた後に地山粘土を多く含む褐色土で埋め戻したと跡付けが可能となろう。

ＳＩ1270竪穴状遺構（第33図、図版12）

拡張区南東隅、ＪＦ13・14で検出した。規模は長さ（南北）220cm×幅185cmの略円形を示す。この中に一段下がる形で径160cmの円形を示す壁溝で囲まれた箇所が存在する。溝は幅10～20cm、その深さは５cm前後である。従って底面は２段状となり、確認面からの深さは、溝のない上位面では24cm、溝で囲まれた下位面での最深は45cmとなる。下位面底部は平坦であり、同面中の堆積土には拳大の角礫（硬質泥岩）が10数個含まれる。壁溝をもつ円形プランの中央と北・南端には小柱穴が３本位置する。中央のＰ１は径22cm、深さ19cm、北端のＰ２は径14cm、深さ28cm、南端のＰ３は長径26cm×短径15cm、深さ35cmであり、３本が一直線上に並ぶ。

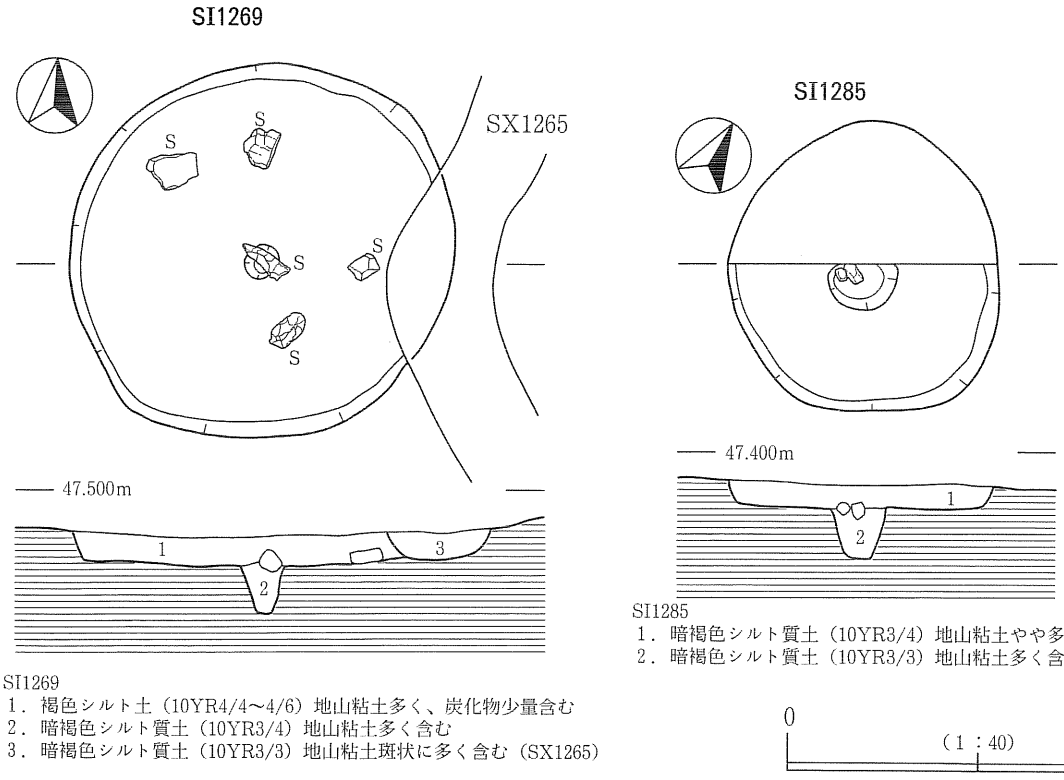
ＳＩ1282竪穴状遺構（第32・34図、図版11）

拡張区中央北端部、ＪＪ15を中心とする地区で検出した。竪穴北半部は昨年度の第116次調査においてそのプランを確認していたものである。また竪穴中央には中世の墳墓ＳＸ1265の溝が東西に横切る。規模は径2.7mの比較的整った円形を呈する。確認面から底面までの深さは最深で38cmとなる。



SI1282
1．黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粘土斑状にやや多く、炭化物少量含む
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土(細粒)斑状にやや多く、炭化物少量含む
3．褐色粘質土（10YR4/4～4/6）地山粘土の二次堆積土、２～４層境不明確
4．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）地山粘土斑状にやや多く、炭化物少量含む
5．暗褐色シルト質土（10YR3/3）

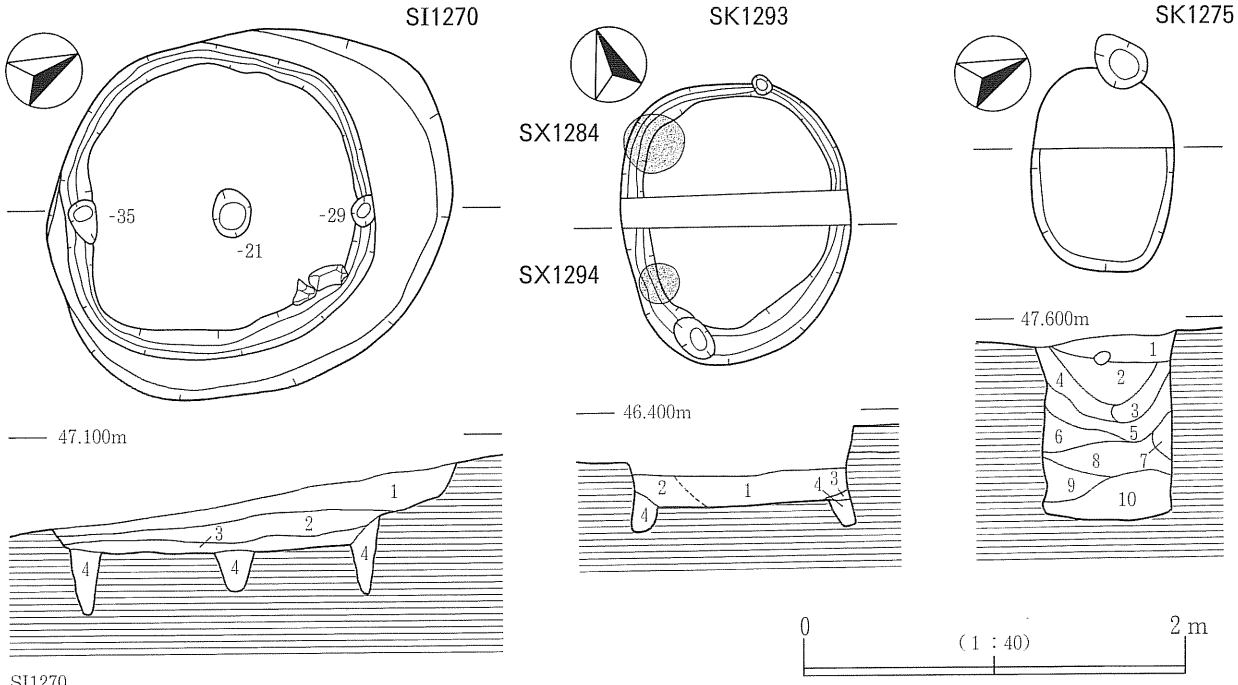
第33図　SI1282竪穴状遺構出土遺物



SI1269
1．褐色シルト土（10YR4/4～4/6）地山粘土多く、炭化物少量含む
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土多く含む
3．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土斑状に多く含む（SX1265）

SI1285
1．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土やや多く、炭化物少量含む
2．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土多く含む

第32図　SI1269・1282・1285竪穴状遺構



SI1270
1．褐色粘質シルト土（10YR4/4）
2．明褐色粘質シルト土（7.5YR5/6）地山粘土多く含む
3．暗褐色シルト質土（10YR3/4）
4．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土多く含む

SK1293
1．褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土が主で炭化物少量含む
2．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土やや多く含む
3．黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粘土やや多く含む
4．黄褐色粘質土（10YR5/6)地山粘土の二次堆積層

SK1275
1．暗褐色シルト質土（10YR3/4）地山粘土殆ど含まず
2．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土斑状にやや多く含む
3．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）地山粘土斑状に多く含む
4．暗褐色シルト質土（10YR3/4）土性は2層と同じ
5．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土少量含む
6．暗褐色粘質シルト土（10YR3/4）地山粘土斑状に多く含む
7．褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土主、周壁崩落土か
8．黒褐色シルト質土（10YR2/3）地山粘土斑状にやや多く含む
9．褐色粘質土（10YR4/6）地山粘土主、堅く締まる
10．暗褐色シルト質土（10YR3/3）地山粘土斑状に多く含む

第34図　SI1270竪穴状遺構、SK1275・1293土坑

底面は平坦で堅く締まる。堆積土は３層に分けられるが、基本的には地山粘土細粒を多く含んだ暗褐色土（２層）で人為的に埋められたと考えられる。

底面には小柱穴４本、溝２条、小土坑１基が掘り込まれる。小柱穴は中央に２本（Ｐ１・２)、南側の壁直下に２本（Ｐ３・４）それぞれ重複・隣接して位置する。中央のＰ１は径26cm、深さ31cm、Ｐ２は長径42cm×短径28cm、深さ28cmであり、Ｐ１がＰ２を切り込んでいる。このことから底面中央並びに南壁際の２本柱からなる竪穴であり、途中で建て替えが行われたと判断される。溝は中央のＰ１から北東方向に約60cm（深さ６cm）と、南東方向に約55cm（深さ７cm）それぞれ延びる。またＰ５とした小土坑は東側壁に取り付くように配置され、その規模は径50cm程の略円形を呈する。本土坑の周りには幅10～15cm、高さ８cm前後の周堤が逆コ字状に認められ、特殊ピットと称される類であろう。周堤は地山の掘り残しにより作られたものである。周堤を含めた土坑の規模は南北が95cm、東西が55cmとなり、その上部から底面までの深さは25cmである。

出土遺物は埋土中（中～下位）より縄文土器が８点得られている。図示したものは３点であり、これらは後期前葉に位置づけられる。しかし他５点は一辺が２cm未満の小片であり図示できなかったが、胎土に繊維を含む個体もあり、前期に属すると思われる。

ＳＩ1285竪穴状遺構（第32図、図版12）

拡張区北東隅、ＪＩ12・13で検出した。規模は長径155cm×短径140cmの略円形を呈する。確認面か

らの深さは17㎝である。底面は平坦で堅く締まる。その中央には径30㎝、深さ27㎝の小柱穴が位置する。堆積土は柱穴内を除くと、地山粘土を多く含む暗褐色土（２層）で充填され、人為的埋土と判断される。柱穴内堆積土（３層）最上位には拳大の角礫（硬質泥岩）が２点見られる。これはＳＩ1269と同様のあり方を示す事例であり、柱を抜いた後に礫を入れたものと考えられる。

②土坑

ＳＫ1275土坑（第33図）

拡張区北西隅、ＪＫ18杭を中心とする地区で検出した。規模は長さ108㎝×幅74㎝の東西に長い隅丸長方形を呈する。土坑はほぼ垂直に掘り込まれ、底面までの深さは最深で102㎝に達する。堆積土は10層に細分されたが、地山土の混入状況から基本的には人為的堆積層と考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ1293土坑（第33図、図版12）

拡張区南東側、ＪＦ15で検出した。ＳＸ1284・1294火葬墓と古代の竪穴ＳＩ1280と重複し、そのいずれにも切られる。規模は長さ150㎝×幅120㎝の南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは北側で51㎝となる。底面は細かい凹凸があるが堅く締まる。またその外周には幅10～15㎝、深さ８～20㎝の溝が全周する。堆積土は４層に分けられるが、基本的には地山粘土を多く含む褐色土（１層）で充填されるもので、人為的埋土と判断され堅く締まっていた。

（４）時期不明

時期の特定されない遺構は、調査区東端部（Ｇトレンチ）で確認した土坑３基である。これは調査前の段階で既に擂鉢状の窪地として認められており、同様の形状を示すものは、昨年度第115次調査におけるＳＫ1217・1218である。

ＳＫ1296・1297・1298土坑（第35図、図版８）

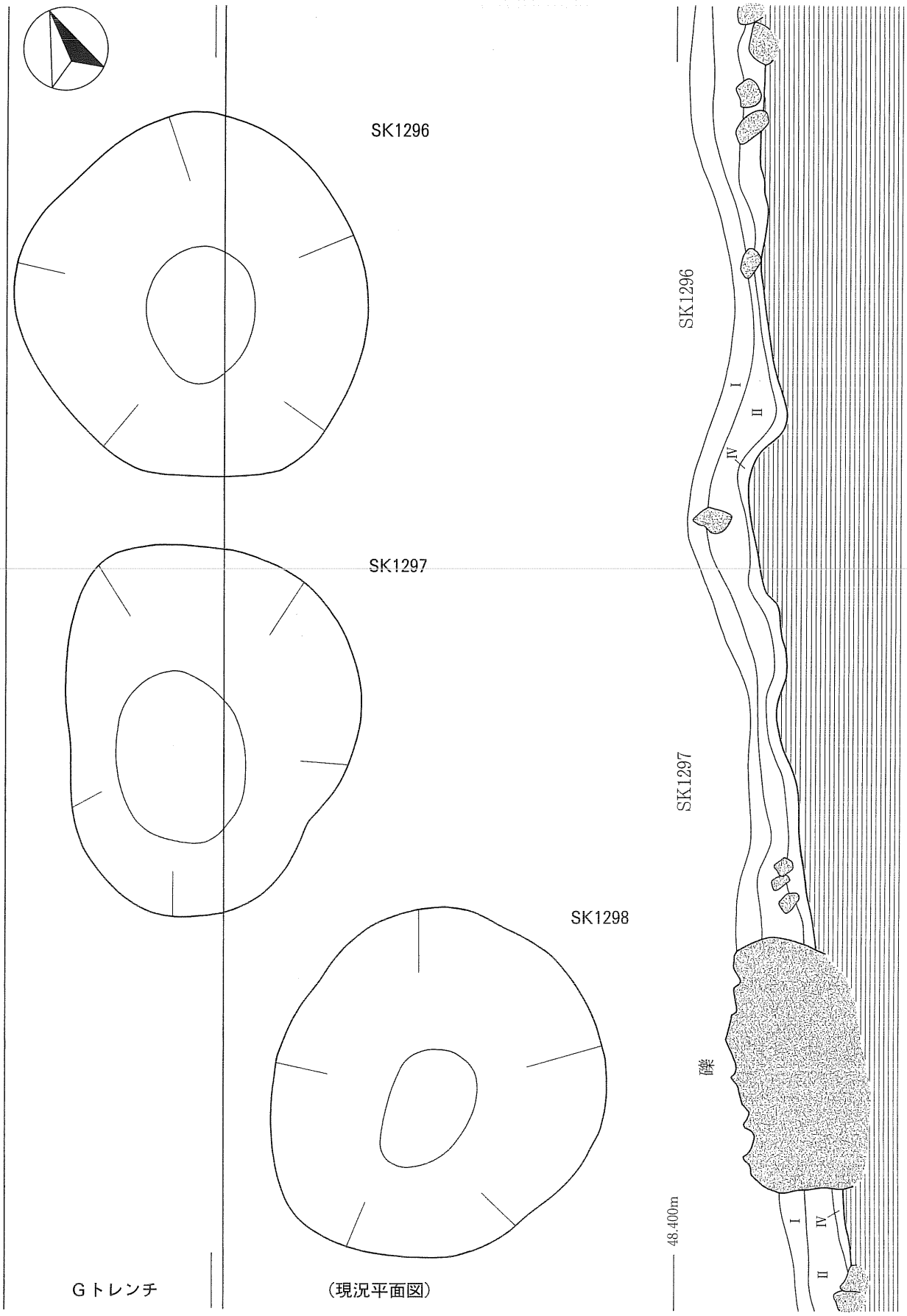
調査区東端部で３基が南北に並ぶ形で検出された。現況での規模は、ＳＫ1296が径2.6ｍの略円形、ＳＫ1297が長径2.65ｍ×短径2.15ｍの不整楕円形、ＳＫ1298が長径2.55ｍ×短径2.3ｍの略円形となる。確認面からの深さは、50㎝前後となる。ＳＫ1296とＳＫ1297の中軸線上を通るように南北方向にＧトレンチを設定し掘り下げたが、土坑下面が地山面にまでは及ぶ掘り込みではないことを確認した。この周辺の堆積中には基盤層の角礫が多数含まれ、おそらく縄文期において剥離されたであろう剥片あるいは石核の出土は見られるものの、本土坑に関わりをもつ遺物は認められなかった。

３　遺構外出土遺物（第36・37図）

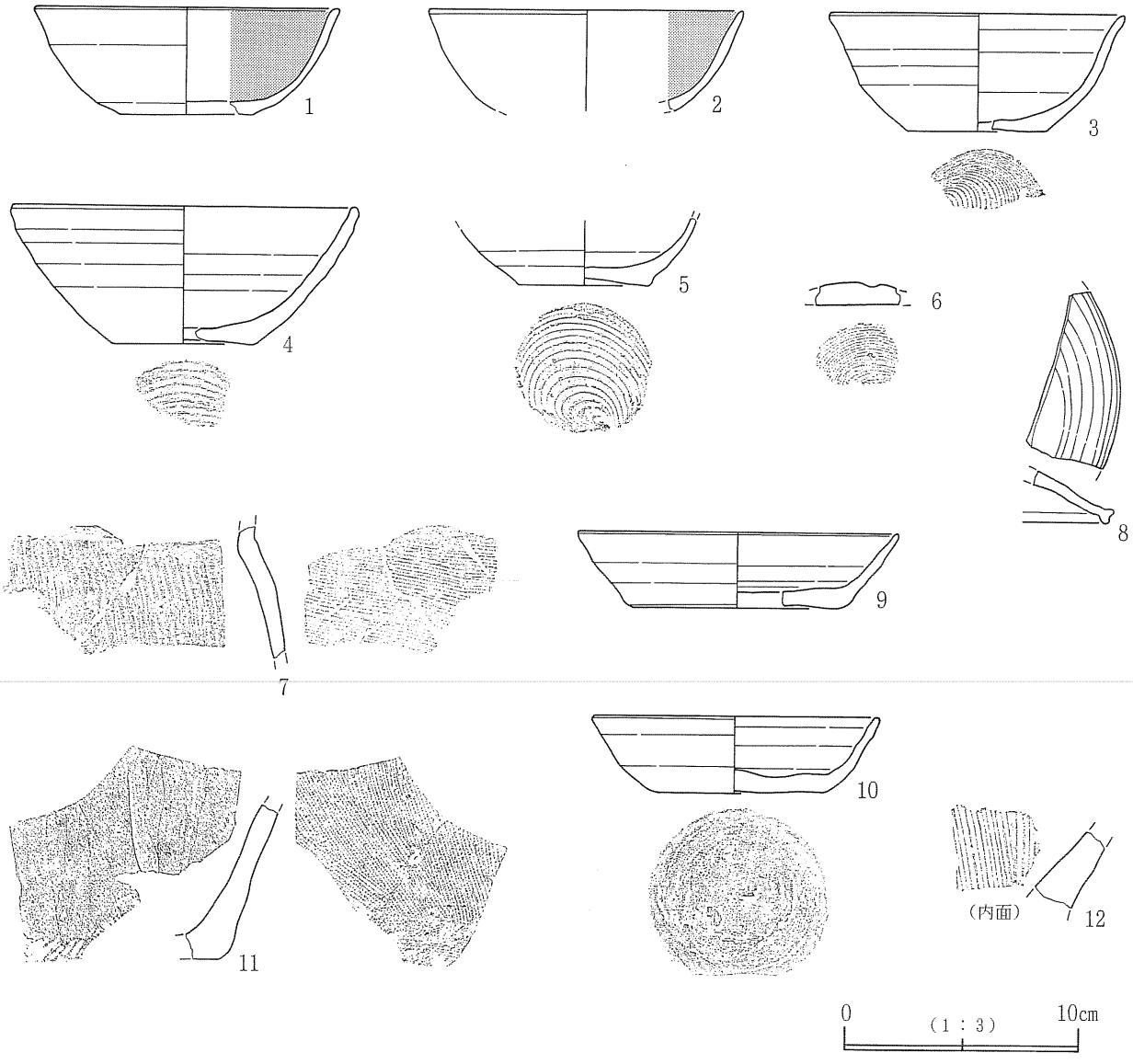
遺構外の出土遺物には古代の土師器・須恵器、中世陶器、縄文土器・石器がある。本項では縄文時代の石器を除く資料について紹介する。

（１）土師器・須恵器（１～11）

１・２は、内面に黒色処理が施される椀形を呈する土師器坏である。２は被熱を受け黒色の一部が消失している。３～６は、非内黒の土師器坏であり、底面に回転糸切り痕を残す。６は円盤状を呈する底部破片である。これは成形時の巻き上げ（渦巻き状）箇所からの欠落あるいは意図的な二次加工のいずれかであろう。７は非ロクロの土師器甕である。外面には縦方向、内面では横方向のハケメが



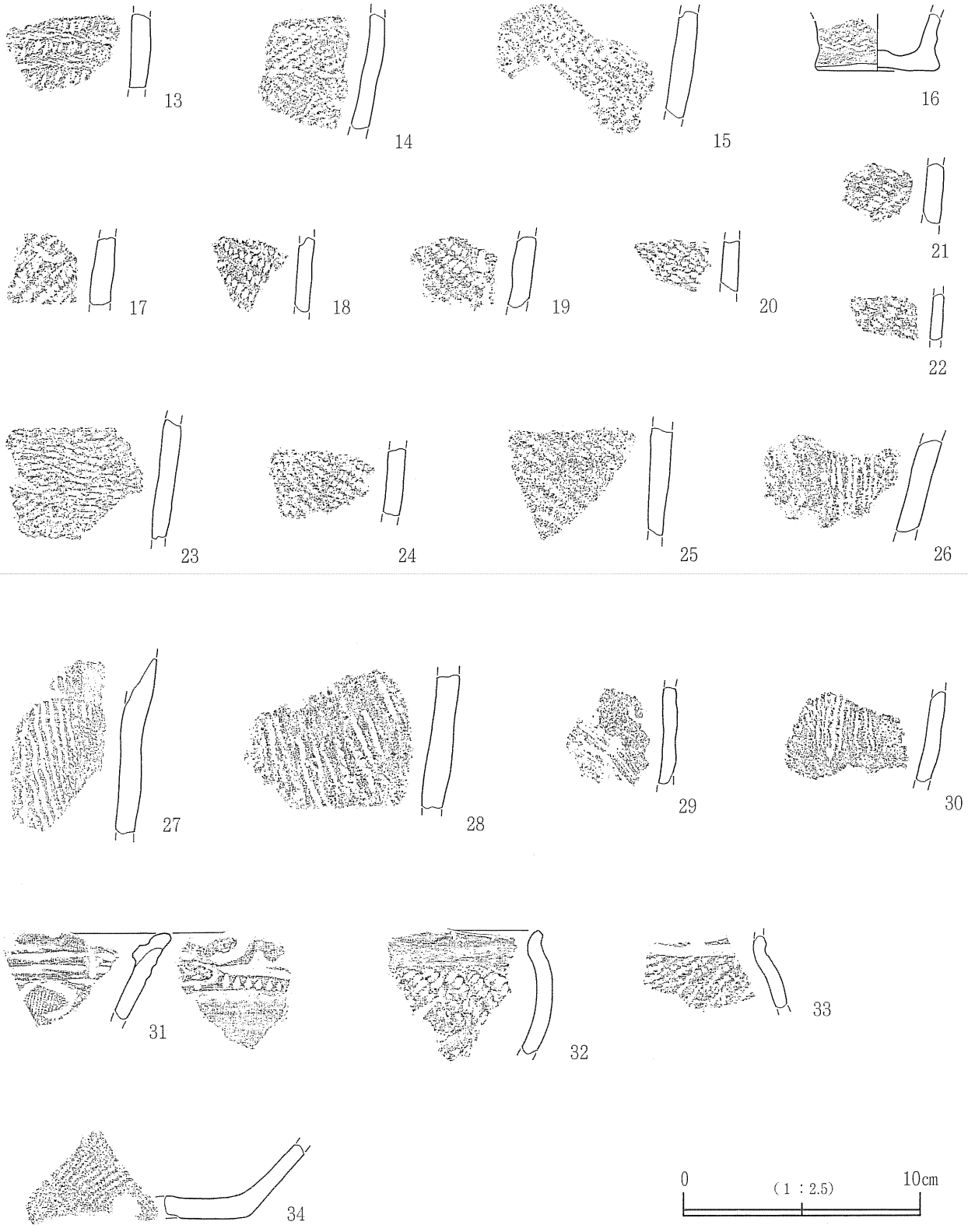
第35図　SK1296～1298土坑



番号	種　別	器　形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	坏	JF16・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、内面黒色処理	13.0	5.8	4.6	0.45	35.4	25
2	土師器	坏	JF16・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、内面黒色処理	13.4		(4.3)			
3	土師器	坏	JF17・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	12.7	6.0	5.1	0.47	40.2	24
4	土師器	坏	Eトレンチ・Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	14.8	6.2	5.9	0.42	39.9	29
5	土師器	坏	JF16・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り		5.6	(2.9)			
6	土師器	坏	JG16	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り						
7	土師器	甕	JF16・Ⅱ層	内外：ハケメ						
8	須恵器	蓋	JF16・Ⅱ層	内外：ロクロ調整						
9	須恵器	坏	Eトレンチ・Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、転用硯	13.7	9.2	3.3	0.67	24.1	32
10	須恵器	坏	Eトレンチ・Ⅲ層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り、転用硯	12.2	7.7	3.3	0.63	27	28
11	須恵器	壺か	Fトレンチ・Ⅲ層	外：体部下半タタキ→ケズリ、内：ハケメ						
12	陶器	擂鉢	表採	外：ロクロ調整、内：卸目						

第36図　遺構外出土遺物（１）土師器・須恵器・中世陶器

それぞれ顕著に認められる。８は須恵器蓋の破片である。９・10は底部に回転ヘラ切り痕を留める須恵器坏である。２点とも内面には磨面と墨痕が観察され転用硯として使用されたことが判る。11は無台の須恵器壺あるいは小型の甕となるものであろう。体部外面には縦方向のケズリが見られるが、底部との境には斜位のタタキが僅かに残る。内面は縦方向のハケメである。



第37図　遺構外出土遺物（2）縄文土器

なお１・２・５・７・８はＪＦ16Ⅱ層出土であり、ＳＩ1280あるいはＳＩ1281に伴う遺物であった可能性がある。

（２）中世陶器（12）

須恵器系中世陶器が１点採集されている。12は擂鉢の底部に近い部位の小破片である。灰色の色調を呈し、内面には卸目が密に入れられる。ＳＸ1264墳墓出土の擂鉢よりは新しい段階の陶器であろうが、小片であり詳細は不明である。

（３）縄文土器（13～34）

遺構外出土の縄文土器は調査区全域から点々と得られており、特定箇所に集中する傾向はない。胎土・文様・地文等から13～25は前期、26～30は後期、31～34は晩期に属すると考える。26～30は撚糸の縦位回転であるが、29のみ条痕となる。32・33は両面に煤状炭化物が付着している。

第３節　自然科学的分析

（１）払田柵跡第117次調査塚出土壺の内容物に関する自然科学調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

史跡払田柵跡は、秋田県仙北郡仙北町に所在する平安時代の城柵跡である。今回、第117次調査区内から中世の塚（ＳＸ1264）が確認され、塚頂部から珠洲系陶器壺が出土した。この壺は、形態や埋設状況から、骨壺あるいは経塚の外容器と考えられたが、壺内は土壌で充填され、肉眼では内容物の確認が困難であった。

そこで、この壺の内容物について情報を得るために、自然科学分析調査を行った。まず、遺体埋納について検討するためには、ヒトを含む動物遺体に多く含有されるリン酸・カルシウム含量および植物の影響を考慮するための有機炭素（腐植）含量の測定するほか、土壌中に残留する脂肪酸組成を調査する（脂肪酸分析）。また、種実などの残留状況を明らかにするために、微細遺物分析を実施する。

１．試料

分析試料は、ＳＸ1264内部より出土した陶器壺内の土壌２点である。

壺の年代は13世紀代であり、擂鉢で蓋がされていた。壺は塚頂部の土坑内に埋設されており、土坑底部には扁平な礫が敷かれていた。

２．分析方法

（１）土壌理化学分析

測定は土壌養分測定法委員会（1981）を参考に、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法でそれぞれ行った。

以下に、各項目の操作工程を示す。

＜試料の調整＞

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させ、風乾細土試料とする。風乾細土試料の水分を、加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。

＜リン酸・カルシウム含量＞

風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約５mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解し、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計でリン酸（Ｐ２Ｏ５）濃度を測定する。

別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計により、カルシウム（CaO）濃度を測定する。

これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（Ｐ２Ｏ５mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

＜腐植含量＞

微粉砕試料0.100～0.500ｇを正確に秤量し、100ml三角フラスコに入れ、0.4Ｎクロム酸・硫酸混液を正確に10ml加え、約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬にして、0.2Ｎ硫酸第１鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて、腐植含量（%）を算出する。

（２）脂肪酸分析

試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール（２：１）を入れ、超音波によるソニケーションを行い、脂質を抽出した。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸－メタノールによりメチル化を行った。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用し、脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離した。

脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム（ULBON, HR－SS－10, 内径0.25ｍｍ, 長さ30m）を装着したガスクロマトグラフィー（ＧＣ－14A, SHIMADZU）を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用した。

ステロールの分析は、キャピラリーカラム（Ｊ＆Ｗ　SCIENFIC, DB－１, 内径0.36ｍｍ,長さ30m）を装着した。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行った。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用した。

（３）微細遺物分析

土壌を秤量した後、水酸化カリウム水溶液に浸して試料を泥化させる。0.5mmの篩を通して水洗し、残渣を集める。集めた残渣を双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴から種類を同定する。

３．結果

（１）土壌理化学分析

結果を表１に示す。

表１　壺内土壌の土壌理化学分析結果

試料名	土性	土色	腐植含量(%)	P_2O_5(mg/g)	CaO(mg/g)
壺内土壌　A	SiCL	10YR3/2　黒褐	5.21	1.35	0.24
壺内土壌　B	SiCL	10YR3/2　黒褐	9.51	1.28	0.36

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による
SiCL：シルト質埴壌土（粘土15～25%、シルト45～85%、砂０～40%）

壺内の土壌試料は、シルト質埴壌土を主体として構成され、粘土分だけでなくシルト分や砂分も多い。土色は黒褐色を呈し、腐植含量は土色を反映して高い。

また、リン酸含量は1.3P２O５mg/g前後、カルシウム含量が0.3CaOmg/g程度である。

（２）脂肪酸分析

結果を図１に示す。

脂肪酸組成は、パルチミン酸（C16）とパルミトレイン酸（C16:1）の割合が高く、ステアリン酸（C18）やオレイン酸（C18:1）などもみられる。

また、ステロール組成はコレステロールとシトステロール、スティグマステロール、エルゴステロールの割合が高いが、この中でも特にコレステロールが多い。

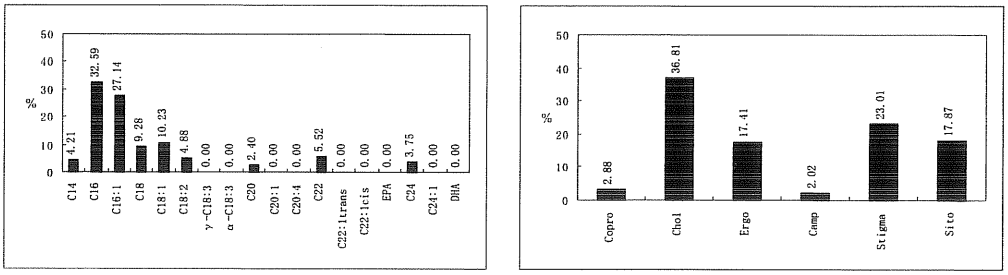


図１　壺内土壌の脂肪酸・ステロール組成

（３）微細遺物分析

壺内土壌２点からは、種実遺体や骨片などの微細遺物は全く認められない。

４．考察

ＳＸ1264頂部より出土した陶器壺内の土壌では、粘土分とともにシルト分や砂分も多かった。土壌中の粘土分は理化学成分を吸着・保持しやすく、逆に砂分は保持しにくい。そのため、壺内に動物遺体が埋納されていた場合でも、遺体成分が保持しにくい状態であったと推定される。また、土色からは植物由来の腐植成分が混在していることが示唆される。

ところで、リン酸の土壌中に含まれる量、いわゆる天然賦存量の上限は約3.0P２O５mg/g程度とされる（Bowen，1983；Bolt・Bruggenwert，1980；川崎ほか，1991；天野ほか，1991）。また、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は、5.5P２O５mg/gとの報告もある（川崎ほか，1991）。さらに、当社での分析例では骨片などの痕跡が認められる土壌で6.0P２O５mg/gを越える場合が多い。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP２O５mg/gで統一した。これらの値を著しく越える土壌では、外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸成分の富化が指摘できる。また、カルシウムの天然賦存量は含量幅がリン酸よりも大きいが、普通1～50CaOmg/g（藤貫，1979）といわれる。

今回の結果と比較すると、壺内のリン酸含量とカルシウム含量はともに天然賦存量よりも低い。また、穀類や可食植物の種実などの微細遺物は検出されなかった。

一方、脂肪酸組成を食品成分表（科学技術庁資源調査会編、2000）など既知の脂肪酸組成と比較してみると、次の点が指摘できる。割合が最も高い脂肪酸は、動物および植物で多量に含まれるパルチミン酸（C16）である。また実験によれば、脂肪酸は熱に弱く、火熱を受けるとオレイン酸やリノール酸といった不飽和脂肪酸が減少し、代わりにパルチミン酸が増加するという報告がある（中野，

1993)。そのため、パルチミン酸の割合が高い要因として火熱を受けた可能性がある。ミスチリン酸（C14）やパルミトレイン酸（C16:1）も動物および植物に含まれる脂肪酸だが、やや肉や魚に多い傾向がある。C18の脂肪酸は動物、植物、菌類ともに多く含まれるが、今回検出が目立つステアリン酸とオレイン酸は動物油脂に多い。特にオレイン酸は、ほ乳類や鳥類に多く含まれる。また、動物の中でも魚介類に特徴的にみられるドコサヘキサエン酸やイコサペンタエン酸は、全く検出されていない。

ステロール組成では、動物由来のコレステロールが最も多く検出される。植物由来のステロールをみると、カンペステロールは少ないが、シトステロールやスチグマステロールはやや多い。また細菌由来のうち、コプロスタノールは少ないが、エルゴステロールはやや多くみられる。分析を行った土壌はやや黒く腐植を含んでいるが、腐植の主な由来は植物であることを考慮すると、植物由来のステロールは土壌に本来含まれていた可能性がある。

これらから、壺中には、ほ乳類や鳥類に由来する成分が残留していると考えられ、出土状況から人骨の可能性がある。またパルチミン酸の産状を考慮すれば火熱による脂肪酸の変質があったと考えられ、火葬骨を埋納した可能性がある。

以上のように、今回の発掘調査で出土した壺の内容物は、おもに脂肪酸分析結果から動物遺体であり、埋葬に関わる遺物であったことが示唆された。しかし、同一試料でリン含量やカルシウム含量は必ずしも高くないなど、課題が残されている。また、このような遺物に対する自然科学調査例は少なく、比較検討材料の蓄積が望まれる。今後とも、類例の分析調査を行い、資料の蓄積につとめたい。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

Bowen,H.J.M.（1983）環境無機化学 －元素の循環と生化学－．浅見輝男・茅野充男訳,297p.，博友社［Bowen, H.J.M.（1979）Environmental Chemistry of Elements］.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976)SOIL CHEMISTRY］,p.235-236.

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p.，養賢堂.

藤貫　正（1979）カルシウム．地質調査所化学分析法，p.57-61，地質調査所.

科学技術庁資源調査委員会編(2000)四訂食品成分表2000．香川芳子監修，576p.,女子栄養大学出版部.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27.

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書 第１巻．411p.，産業図書.

中野益男（1993）脂肪酸分析法.「第四紀試料研究法２　研究対象別分析法」，p.388-403,東京大学出版会.

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」，p.39-40.

坂井良輔・小林正史・藤田邦雄（1995）灯明皿の脂質分析．富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第７集「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）　第二分冊」，p.24-37，財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所.

（２）払田柵跡第117次調査区出土試料（人骨）の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田県仙北町に所在する払田柵跡の第117次調査では、検出された中世墳墓の近傍から、３個体分の動物骨が出土した。これらの骨は遺物や遺構を伴わず、その年代や種類および性格などについて不明点が多々あった。本遺跡におけるこれまでの発掘調査では、動物骨がまとまって出土した例がなく、今回出土した動物骨は、古代から中世の時期における本遺跡周辺の土地利用状況などを考える上で、貴重な資料として注目されている。

今回の分析調査では、これら出土試料の年代や種類を明らかにすることを目的として、放射性炭素年代測定と骨の同定を行うことにした。

１．試料

試料は、第117次調査区の、中世墳墓付近のＳＸ1283・ＳＸ1284・ＳＸ1294の３箇所の遺構から出土した動物の骨格である。これらのうち、ＳＸ1283・ＳＸ1284の２遺構の試料では、比較的大きめの破片をそれぞれ数個選択し、箇所ごとにまとめて１点の試料とし（計２点）、放射性炭素年代測定用試料とした。一方、骨同定は、上記３遺構から出土した動物骨片全てを対象試料ととした。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は、（株）地球科学研究所を通じてアメリカ合衆国ベータ社（BETA ANALYTIC INC.）が行った。

（２）骨同定

試料は、水洗・乾燥させた後接合し、肉眼による同定をおこなった。なお、同定は慈恵会医科大学の竹内修二先生の御協力を賜った。

３．結果および考察

（１）放射性炭素年代測定

いずれの試料からも、測定に必要なコラーゲンを抽出することができなかった。したがって、今回の２試料については、放射性炭素年代測定が行えず、年代値を得ることができなかった。

（２）骨同定

同定結果を表１に、人骨各部位の名称を図１に示す。ＳＸ1283とＳＸ1284から検出された骨格は、ヒト（Homo sapiens）である。同定できた部位を、図２に示す。

また、ＳＸ1294から検出された骨片は、細片のため、種や部位の同定ができない。

各試料は全て白色を呈す焼骨であり、顕著な変形やひび割れが観察されることから、900℃以上の温度で焼かれたと考えられる。また、湾曲した横方向のひび割れを伴う長骨の反り・ねじれが顕著であることから、死亡後まもなく、あるいは肉と骨を切り離さない状態で火葬された可能性が高い（アンドリュー・チェンバレン，1997）。以下に、各試料の同定結果を述べる。

＜ＳＸ1283＞

１個体分の人骨が検出された。骨の成長状態から、成人であると判断されるが、性別はわからない。

表１　出土人骨同定結果

出土遺構		ＳＸ1283		ＳＸ1284		ＳＸ1294
個体数		1個体		1個体		不明
性別		不明		不明		
推定年齢		成人（詳細不明）		成人（詳細不明）		
頭蓋骨	（脳頭蓋）	破片21.8g	破片6.8g		破片9.9g	
	（顔面部）	右頬骨～前頭骨頬骨突起，左前頭骨頬骨突起				
	（頭蓋底部）	左側頭骨下顎窩，左鼓室部		破片1		
	下顎骨		破片7.2g	破片2		
歯	歯根			8		
椎骨	頚椎	椎体1	破片2.2g		破片12.5g	
	胸椎	椎弓2				
	腰椎					
	仙骨					
肋骨	左				破片30.0g	
	右					
肩甲骨	左	肩甲棘の基部1				
	右					
上腕骨	左			遠位端上の外側縁～鈎突窩1，上腕骨小頭1	骨体破片2，遠位端付近破片2	
	右					
橈骨	左	骨体破片1		中央骨体1，遠位端付近骨体1		
	右			近位端付近骨体1，遠位端付近骨体1，遠位端1		
尺骨	左	骨体2		近位端1，中央～遠位端付近骨体1		
	右					
手根骨				右舟状骨1，右月状骨1		
寛骨	腸骨	破片1				
	坐骨					
	恥骨					
大腿骨	左	骨体破片1		骨体1，膝蓋面下方の破片1	破片19.0g	
	右			骨体1		
脛骨	左			骨体1		
	右			骨体1		
腓骨	左			骨体1		
	右			骨体1		
膝蓋骨	左			膝蓋骨底破片1		
	右					
足根骨	踵骨			後距骨関節面破片左右各1		
	距骨			後踵骨関節面破片		
中手骨／中足骨		3		3	破片12.4g	
指骨	基節骨			2		
	中節骨			5		
	末節骨					
破片		四肢骨破片117.4g，部位不明破片65.3g		手根骨／足根骨1.8g，四肢骨破片103.7g，部位不明破片209.6g		部位不明破片5.3g
備考		各骨は細く短い（全体に小さい）		上肢の骨格が小さい		細片のためヒトかどうか不

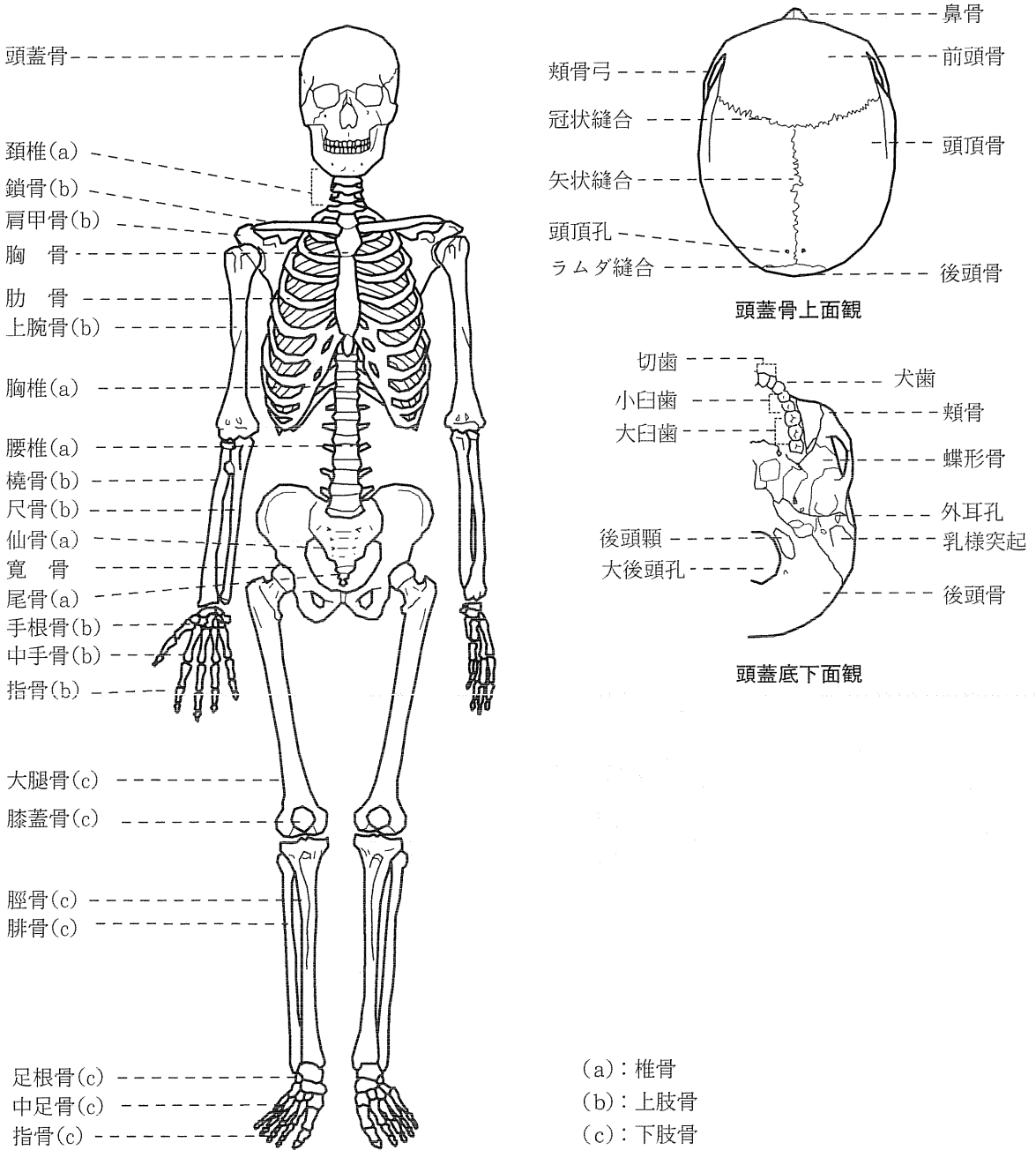


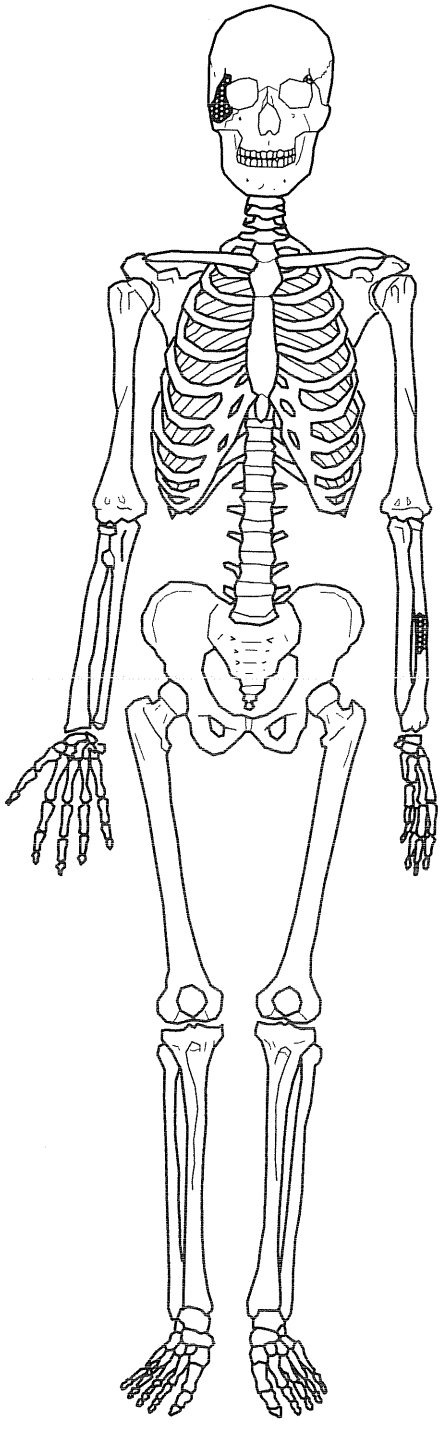
図１　人骨各部の名称

部位が同定できた試料は少ないが、頭蓋骨、椎骨、上肢骨、下肢骨があり、全身の骨格が揃っていたと思われる。

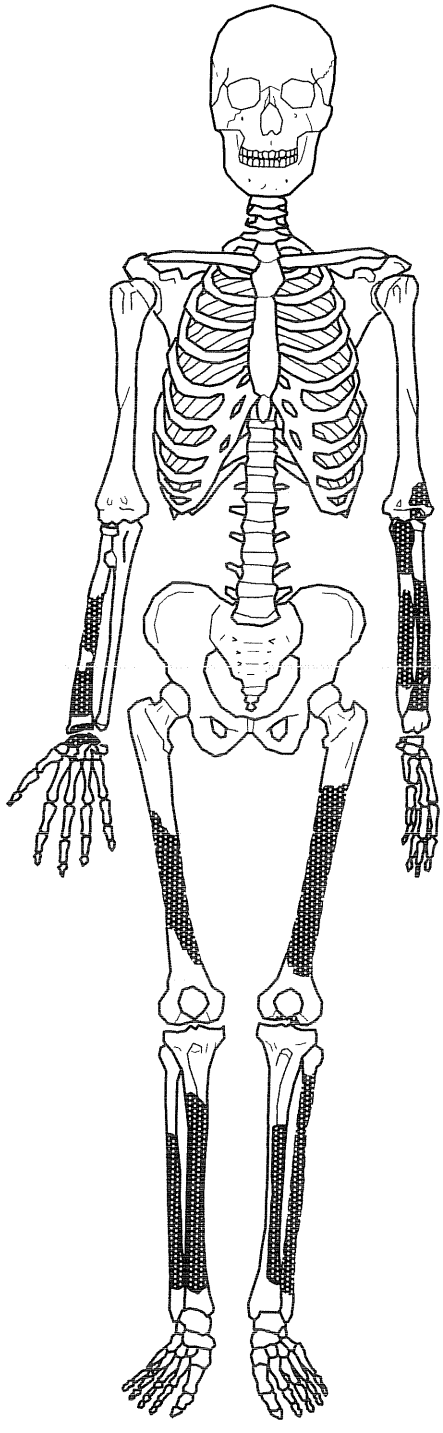
四肢骨は細く短く、椎骨も小さい。火葬されたことにより収縮していることを考慮しても、比較的小柄な個体であったと考えられる。

＜ＳＸ1284＞

１個体分の人骨が検出された。骨の成長状態から、成人であると判断されるが、性別はわからない。頭蓋骨、椎骨、肋骨、上肢骨、下肢骨があり、全身の骨格が揃っていたと思われる。頭蓋骨・椎骨・肋骨は保存状態が悪く、破片である。四肢の長骨は比較的保存状態が良好であり、右尺骨を除く前腕の骨格と自由下肢は、骨体の大部分が形状を保つ。



SX1283出土人骨



SX1284出土人骨

図2　検出された部位（網掛け部分が特定できた部分）

下肢骨は通常の大きさであるが、上肢骨は比較的小さい。

＜ＳＸ1294＞

合計5.3gの焼骨片が検出された。形状から、ヒトを含めた哺乳類であることは明らかであるが、細片のため、種と部位の同定はできない。前二者が人骨であり、他の動物が検出されていないので、当試料も火葬人骨の一部である可能性がある。

４．まとめ

ＳＸ1283・ＳＸ1284から検出された骨格は、火葬人骨であった。ＳＸ1294から検出された骨片も焼けており、火葬人骨の可能性がある。今回の分析調査では正確な年代値を得ることはできなかったが、人骨であることが確認されたことにより、この遺跡の古代から中世の土地利用状況を考える上で貴重な出土例になったといえる。

今後、これらの火葬人骨の性格を考えるためには、検出時の分布状況や、墳墓をはじめとする周囲の遺構との関係を含めて検討したい。

引用文献

アンドリュー・チェンバレン（1997）「大英博物館双書　古代を解き明かす①　ヒトの考古学」，堀江保範訳，學藝書林.

第４節　小結

第117次調査において得た情報は次のようにまとめられる。

１　古代

該期の確認遺構は、竪穴住居跡・竪穴状遺構・土坑・溝跡等であり、長森丘陵西部においては、昨年度の第116次調査と合わせても明確な掘立柱建物跡の検出はない。一方、竪穴状遺構は拡張区南側すなわち丘陵地南側緩斜面に群をなすように集中し、カマドをもつＳＩ1274竪穴住居跡は、平坦面から北側にやや下る緩斜面上にそれぞれ立地している。古代における各種施設は、現段階までのところ中世墳墓の占地する馬背状の狭い平坦面には立地せず、南北の緩斜面に位置することになる。古代においては平坦面上が無遺構域であり、この東西方向の空間が政庁と外郭西門を繋ぐ道路施設であった可能性が高まったと言えるであろう。

次いで個々の遺構、ＳＩ1266竪穴状遺構とＳＩ1274竪穴住居跡について若干ふれておく。前者は拡張区南側に位置する竪穴状遺構である。カマドはなく、床面中央に地床炉を持つ。炉周辺では数は少ないものの、鉄滓と鍛造剥片が得られており、鍛冶工房跡あるいは鍛冶に関連する何らかの工房跡と判断されよう。出土遺物には土師器坏、須恵器甕等があるが、完形の坏を床面上に置いたり、壁際に立て掛けるような状況にあることから、竪穴廃棄時において祭祀儀礼が執り行われたと考えられる。またＳＩ1266周辺に立地する複数の竪穴状遺構は、その軸線方向・配置・重複から、時期差はあるものの、鍛冶に関係した工房跡であったと推測されよう。このことは地点は異なるものの、昨年度第115

次調査区におけるＳＩ1229・1236にも当てはまる。以上の遺構は、出土した土師器坏等から９世紀後半・末～10世紀前半代に構築・廃棄されたと考えられる。また後者は、ＳＦ1300土塁盛土下に位置する竪穴住居跡である。周壁・壁溝・カマドの一部を確認しているが、トレンチ調査であり詳細は不明である。ただ床面直上出土の須恵器坏を見れば前者より旧い段階、９世紀中頃の廃棄時期を導き出すことができそうである。

2　中世

該期の資料は、丘陵地平坦面で検出した墳墓２基と同時（時期・時代）存在の問題点を残すものの、南側緩斜面部での火葬墓３基・火葬関連施設とも考えられる焼土遺構６基、さらにはこれら施設を大きく囲むように存在する土塁・空堀が挙げられよう。払田柵跡において明確な中世の遺構が検出されたのは初めてである。

（１）墳墓と関連遺構

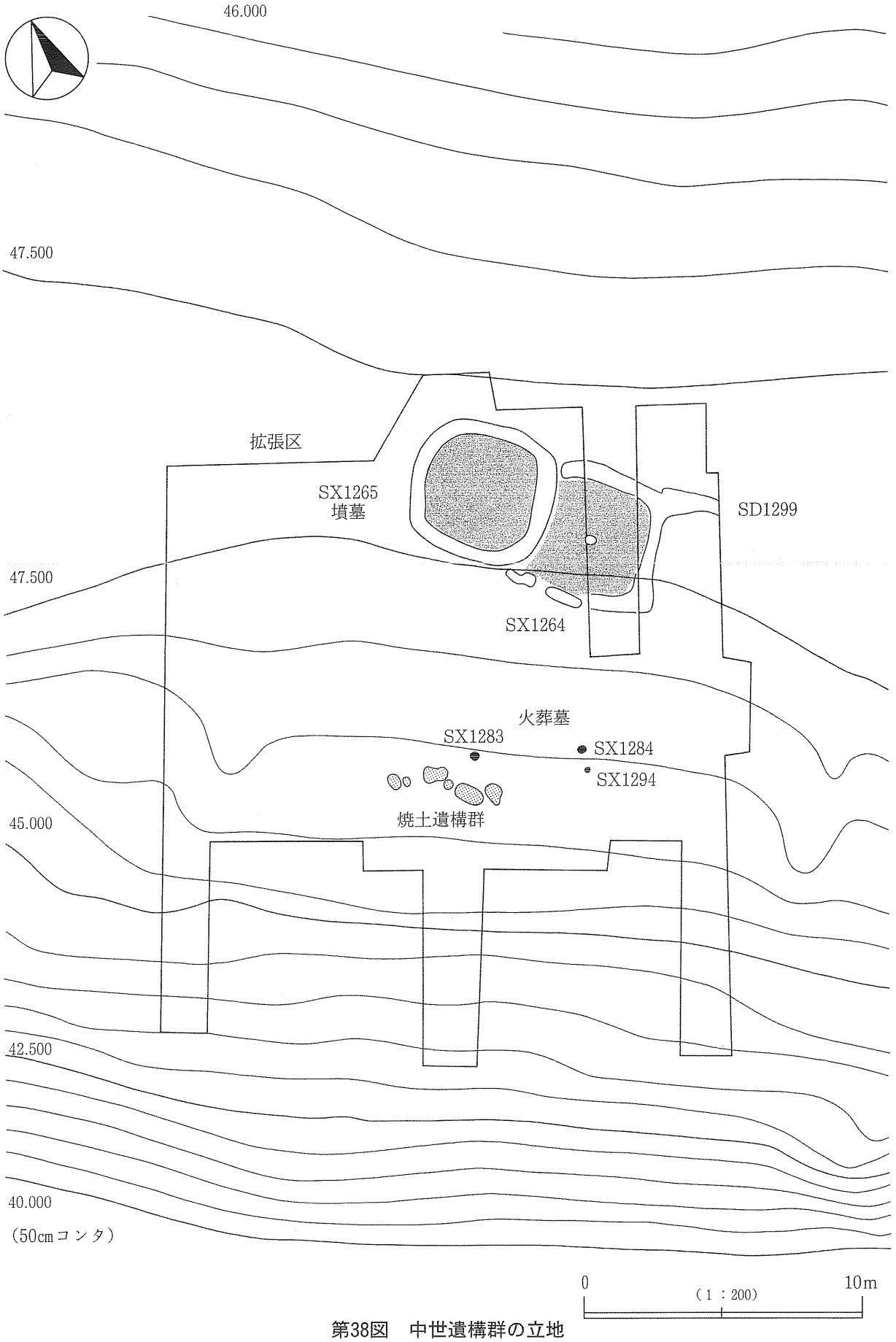
ＳＸ1264は、須恵器系中世陶器（壺と擂鉢）の出土とその出土状況並びに壺内容物の分析（前節参照）から中世墳墓と判断されたものである。これを受け、隅丸方形溝状遺構であるＳＸ1265についても検出位置・形態からＳＸ1264同様の墳墓であった可能性を指摘した。時期的には、擂鉢内面の卸目及び底部の切り離しから、珠洲Ⅱ期相当と考えられ、13世紀前半代かそれ以降となる。

ＳＸ1264とＳＸ1265は、その確認状況・配置・周溝内の円礫群のあり方等から見て同時に存在していた可能性があり、２つの墳丘が並ぶ形での景観が想定される。なおＳＸ1264周溝から枝分かれするように東側に１条の溝（ＳＤ1299）が延びる。東側に第３の墳墓が存在していたのか、あるいはＳＸ1264の拡張・改修かもしれない。

秋田県内における中世墳墓は、知見において明確な検出例はない。経塚は40遺跡以上周知されており経筒あるいは経石等が出土・発見されている。また中世の土坑墓（土葬・火葬とも）は鹿角市妻の神Ⅲ遺跡、秋田市後城遺跡Ａ区、秋田市秋田城跡第10次・26次・35次・42次（鵜ノ木地区）、秋田市待入Ⅲ遺跡、協和町寄騎館遺跡で調査例があり、これらは全て銭貨を副葬する墓である。[1] その他、時期を特定する明確な副葬品がない（少ない）ものの中世の土坑墓とされるのは、大館市山王岱遺跡、[2] 鷹巣町からむし岱遺跡、[3] 琴丘町盤若台遺跡、[4] 井川町洲崎遺跡、[5] 雄勝町館堀城跡[6]などにもある。

一方、墳丘を伴う墓は存在するものの、明確に中世とは判断できないものに次の３例を紹介する。

本荘市上谷地遺跡（第４次調査）では、台地先端部に埋葬施設（土坑）を伴う墳墓が平成９年に調査されている。報告書では検出遺構として土坑墓（ＳＫ51）の記載[7]がなされているが、同書の文章・土層断面図等を見る限りにおいては、自然地形を削り出すことによって高さ70㎝、一辺あるいは径が８ｍ程の塚を構築し、この中央に土坑を穿っている。土坑は長軸1.41ｍ×短軸1.34ｍの略円形を呈し、深さは約80㎝とある。坑底面付近で人骨片10数点と副葬品が出土し、墓と判断された。墓は土葬で、人骨の部位・位置から「北に背を向け膝を抱えたような姿勢で葬られたと推定」している。副葬品は漆器４個体、火打金１点、水晶粒11点、硫黄粒等があり、時期を特定できる焼物類はない。ただ漆器（椀蓋か）は、内面朱漆で外面にも朱漆による施文（春蘭・銀杏葉か）がなされるものであり、この種の技法を有する漆器の出現時期は、北陸では14世紀初頭とされる。[8] 従って本墳墓の構築時期の上限は該期となるが、下限時期は不明である。人骨の分析・検査をされた秋田大学医学部の吉岡尚文氏に



第38図　中世遺構群の立地

よると、死後経過時間を人骨に紫外線を照射することにより得られる蛍光の色・程度から推定すると「500～1,000年程度の経過」と記述されている。以上のことから報告書では「中世の遺構と判断される」としている。なお本墳墓は周辺に同様の遺構はなく、単独墓であったようである。

協和町岸館遺跡は、昭和26年に調査が実施され、上谷地同様に土坑を伴う墳墓が発見されている。(9) 墳墓は一辺が7m、現地表面からの高さが1.1mの方形を呈し、中央には深さ95cmの土坑（平面形状不明）が見つかった。坑内には頭蓋骨・大腿骨など一体分の人骨があり、「木棺の中に北向きに座わらせて埋葬した」とある。副葬品は鉄釘、5cm程の金属に動物の骨を結びつけたもの10数個と漆塗りの皮2枚の記述があるが、鉄釘には木質が付着しており「棺にうたれた釘」と推定している。本例も時期を推測する遺物はないようであるが、報告では「鎌倉期以後室町期頃までの土着の豪族の埋葬された古墳墓」としている。なお本墳墓の周辺には複数の塚が点在するようである。

横手市小吉山火葬墓は、昭和3年に発見され、「高さ四尺・幅南北三間東西二間の積石式のもので、中に石製骨蔵器が東西に二つならべて納められていたとしている。立ち入り調査の時点で骨蔵器は割れ骨片が散乱していた」とある。現在横手市教育委員会には、東側の石製骨蔵器のみが所蔵されている。秋田県内の古代・中世火葬墓をまとめられた庄内昭男氏によると本例は、「館跡に所在することと山形県の石製骨蔵器出土例から中世に入るものと推定」している。(10)

その他、墳丘は確認されなかったものの、環状に溝が巡る遺構に須恵器系中世陶器が出土した事例では、南外村小出Ⅰ遺跡ＳＤ14が挙げられる。(11) ＳＤ14は幅40～80cm、深さ10～20cmの溝が径5.2mの環状に巡るもので、その規模は払田柵跡の2例に近似する。ここでは陶器の胎土分析の結果、同町大畑窯産の陶器甕が溝内に入れられていたことが判明した。大畑窯は珠洲Ⅱ期相当時の操業であり、払田例と同じ13世紀代となる。

河辺町上祭沢遺跡でも3基の中世塚が発見され、うち1基（ＳＸ03）から須恵器系の中世陶器片が得られている。(12) しかしこれらが墳墓あるいは経塚となるのかについては、不明である。前出の琴丘町盤若台遺跡でも5基の方形溝状遺構が検出され、1基では土層観察により溝で囲まれた内部に盛土があったことが報告されている。同遺跡では方形溝状遺構の周囲に土坑墓・火葬墓やこれらを区画すると思われる溝跡、時期は不明確ながら建物跡・井戸跡なども検出され、ここ一帯が墓域あるいは寺域としての位置づけができるのかもしれない。

（2）火葬墓・焼土遺構

3基の火葬墓は精査の結果、土坑等の明確な掘り込みを伴うものではないことを確認している。遺存状態の良いＳＸ1284は火葬骨が径30cmの円内にきれいに収まる。このことから径30cmの曲物を容器（骨蔵器）とし、この中に火葬骨を集め旧表土（第Ⅱ～Ⅲ層か）内に埋納したものと考えられる。他2例も同様で、ＳＸ1283も径25～30cm程の曲物を容器としていたようである。火葬骨は分析の結果、人骨であることが判明しているが、残念ながら性別・年齢等の情報は得られなかった。詳細は前節を参照されたい。

焼土遺構は拡張区南側、古代の竪穴堆積土最上位で検出された遺構ではあるが、遺物を伴うものではなく、時期も中世以降とすべきなのかもしれない。ただ墳墓と火葬墓の検出を受け、その配置・検出面から火葬に関係する施設の可能性を提示しておきたい。

（3）土塁・空堀

土塁・空堀は長森丘陵西端部において現況観察できる施設である。払田柵跡西側の丘陵である真山は中世「堀田城跡」としても周知されている遺跡であり、以前から両者間においては相関が想定されていた。堀田城跡は未調査の遺跡であり詳細は不明であるが、『秋田県の中世城館』によると[13]、時期は不明確ながら戦国期と考えられていたようである。一方、今まで払田柵跡において散在的に出土する須恵器系中世陶器は珠洲Ⅳ期相当かそれ以降であるから、14世紀代かそれ以後となる。

今次調査で土塁・空堀の一部を裁ち割り調査を行った結果では、主に土塁においては古代遺構との重複、堆積・盛土層の層序等の観察から中世に帰属させることに大きな矛盾はないと考える。更に墳墓・火葬墓等の立地・配置を総合すると、断定はできないものの墓地の周囲に土塁・空堀を巡らせた中世墓域と見ることができよう。土塁・空堀は本文でもふれたように、北側が開口（土塁・空堀未確認）する不整Ｕ字状に配される。これらにより囲まれる大きさは、計測位置で変動があるが、東西方向は約90ｍ、南北は西側で70～80ｍ、東側（未調査区）でも40～50ｍに達するようである。この区画施設を中心に墳墓の位置を見れば、中央からやや西寄りの丘陵平坦面上にあたることになる。

以上のことから、土塁・空堀の構築時期は墳墓の時期である13世紀代となる可能性が生じたことになる。既知・上記の情報との齟齬は、堀田城跡並びに千畑町に所在する本堂城跡・元本堂城跡等における城館遺跡の精査を突破口に解消できないものであろうか。

３　縄文時代

該期の資料は、竪穴状遺構４基、土坑２基である。竪穴状遺構は、その規模が２ｍ台（ＳＩ1285のみ径1.55ｍ）の小型・円形を呈し、中央に柱穴をもつ共通点がある。ＳＩ1269・1285は１本柱、ＳＩ1282は壁際の１本を加えた２本柱、ＳＩ1270は長軸線上壁際の２本を加えた３本柱で構成される。ＳＩ1282では壁寄りに地山掘り残しによる「特殊ピット」が付される。遺物はＳＩ1282で前期と後期前葉の土器片が出土しているが、後述の事項を検討すると竪穴は前期に構築された可能性が高いと考える。なお遺構外出土遺物には、前期を中心とし晩期の土器片も含まれる。

県内ではこの種の形態・規模をもつ遺構に対し、大型の土坑として把える場合と小型の竪穴住居跡として見る場合がある。前者は形態及び台地・段丘の斜面に立地することから貯蔵穴としての機能を推定するものであり、後者は遺構配置並びに立地状況（平坦地である場合が多い）から小型住居とするが、炉（地床炉）は必ずしも明確ではない例が多い。

前者の事例として阿仁町上岱Ｉ遺跡を引用する[14]。同遺跡は前期と中期の集落であり、前期では段丘縁辺部に立地する「長径が２ｍをこえる大型の」土坑が構築され、中期では径４ｍ台～７ｍ程の円形竪穴住居跡と長軸が10ｍを超す長円形の大型住居跡が混在する。前期の土坑としたもののうち、１本柱はＳＫ36に、２本柱はＳＫ38・39・45となる。

後者では小坂町はりま館遺跡を紹介する[15]。１本柱はＳＩ168・175Ｂ・228に、２本柱はＳＩ170・218にある。その他、１本柱の竪穴は森吉町桂の沢遺跡ＳＩ159[16]や大館市池内遺跡ＳＩ970[17]に、２本柱は能代市杉沢台遺跡ＳＩ36[18]に、３本柱は大館市上ノ山Ｉ遺跡ＳＩ03[19]等にも類例がある。これらの遺跡は全て前期に構築された竪穴住居である。

一方、２基ある土坑のうちＳＫ1293は、長さ1.5ｍ×幅1.2ｍの楕円形を呈し、底面外周に溝が巡り、壁面は垂直に立ち上がる特徴をもつ。同形態・規模の土坑は前出の上岱Ｉ遺跡ＳＫ44や、杉沢台遺跡

ＳＫＦ09・84等に類例がある。土坑の立地・形態から貯蔵穴としての機能を想定している。また３本柱の竪穴であるＳＩ1270は、杉沢台遺跡ＳＫＦ69に形態が類似する。これも貯蔵穴と見ているようである。

ここで今一度払田柵跡の縄文期遺構を見てみる。立地から遺構を分類すれば、丘陵平坦面上に構築されるＳＩ1269・1282・1285竪穴とＳＫ1275土坑、南側緩斜面上に位置するＳＩ1270竪穴とＳＫ1293土坑に２分される。上記を踏まえると、前者の竪穴３軒は炉が未確認ではあるものの住居跡に、後者は共に周溝が巡るものであり、貯蔵穴あるいは墓（ＳＫ1293は地山土による人為堆積）の可能性を指摘できる。

なお特殊ピットは、主に米代川流域の前期～中期の竪穴住居の中に認められる施設である。前期では杉沢台遺跡・はりま館遺跡等、中期の上岱Ｉ遺跡・二ッ井町烏野遺跡などにあり、原則として炉軸線延長上の壁際に設置される。烏野遺跡では中期後葉の大木９式段階まで特殊ピットは認められるものの、末葉の大木10式段階では消失する。[20] 一方、雄物川中流域では、西仙北町上野台遺跡Ａ区に１例（ＳＩ13、大木８ｂ式段階）あるのみのようである。[21] 払田柵跡の事例は地域・時期そして竪穴の形態に至るまで相違点が多い。[22] この資料が今後、横手盆地における後期前葉の集落・竪穴住居のあり方等を推論する材料になることを期待したい。

1　高橋　学「秋田県の中世期出土貨幣」『東北地方の中世出土貨幣』東北中世考古学会第５回研究集会資料集　1999（平成11年）

2　秋田県教育委員会「山王岱遺跡」『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｖ』1992（平成４年）

3　鷹巣町からむし岱遺跡は平成12年度に秋田県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施している。

4　秋田県教育委員会『盤若台遺跡』2001（平成13年）

5　秋田県教育委員会『洲崎遺跡』2000（平成12年）

6　秋田県教育委員会『館堀城跡』2001（平成13年）

7　本荘市教育委員会『上谷地遺跡詳細分布調査報告書－第４次調査－』1998（平成10年）

8　田村浩司「漆器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会　1999（平成11年）

9　長山幹丸「岸館の古墳墓」『協和町郷土誌』協和町郷土誌編纂委員会　1968（昭和43年）

10　庄内昭男「秋田県における古代・中世の火葬墓」『秋田県立博物館研究報告』第９号　1984（昭和59年）

11　秋田県教育委員会「小出Ｉ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』1991（平成３年）

12　秋田県教育委員会「上祭沢遺跡」『高速交通関連道路整備事業（和田御所野）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1990（平成２年）

13　秋田県教育委員会「堀田城」「本堂城」「元本堂城」『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）

14　秋田県教育委員会『上岱Ｉ遺跡発掘調査報告書』1989（平成元年）

15　秋田県教育委員会『はりま館遺跡発掘調査報告書』1990（平成２年）

16　秋田県教育委員会『桂の沢遺跡発掘調査報告書』1994（平成６年）

17　秋田県教育委員会『池内遺跡　遺構篇』1997（平成９年）

18　秋田県教育委員会『杉沢台遺跡』1981（昭和56年）

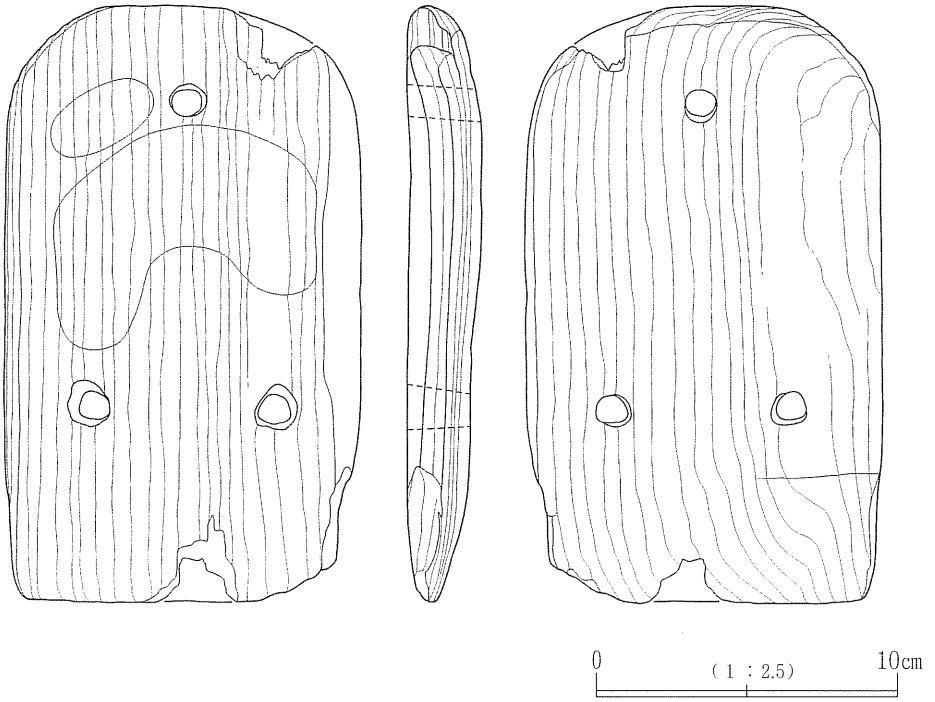
19　秋田県教育委員会「上ノ山Ⅰ遺跡」『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1988（昭和63年）

20　二ツ井町教育委員会『烏野遺跡第６次発掘調査概報』1995（平成７年）

21　秋田県教育委員会「上野台遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』1989（平成元年）

22　払田柵跡で検出したような円形基調で炉を持たない竪穴に特殊ピットをもつ例は、青森県上北郡六ヶ所村表館（１）遺跡の第112号住居跡にある。同住居には炉・柱穴はなく、東側の周壁に接するように低い周堤（払田例と同じコ字状）を伴う特殊ピットが設置されている。住居の年代は掘り込み面と出土遺物から早期末（早稲田５類期）と記されている。

青森県教育委員会『表館（１）遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1989（平成元年）



第39図　外郭西門西方水田出土の下駄

第39図は本次調査区出土ではないが、外郭西門西方（長森・真山の間）の水田面から出土した下駄である。1989年、水田暗渠工事の際に得られたものであり、今回の中世期出土遺物の関連性から図示・掲載することにしたものである。

本下駄は一木（杉材）で作られた連歯下駄であるが、歯部が完全に摩耗し、台部一枚板の様相を呈する。長さ20cm、最大幅11.8cm、現存する厚さ（台部厚）は2.5cmである。前鼻緒孔が中央に位置することから中世あるいはそれ以降に作られたと考えられる。

図版1　第117次

長森丘陵全景

第117次調査前　西側上空より（平成12年5月10日撮影）

拡張区調査後全景（東→）

写真奥には整備された外郭西門（門柱と板塀）が見える

拡張区南側緩斜面の竪穴状遺構群（南西→）

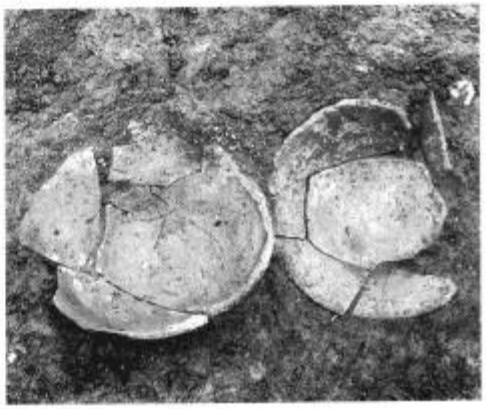
段状をなすところが、竪穴北側の壁面　中央がSI1266、手前はSI1289

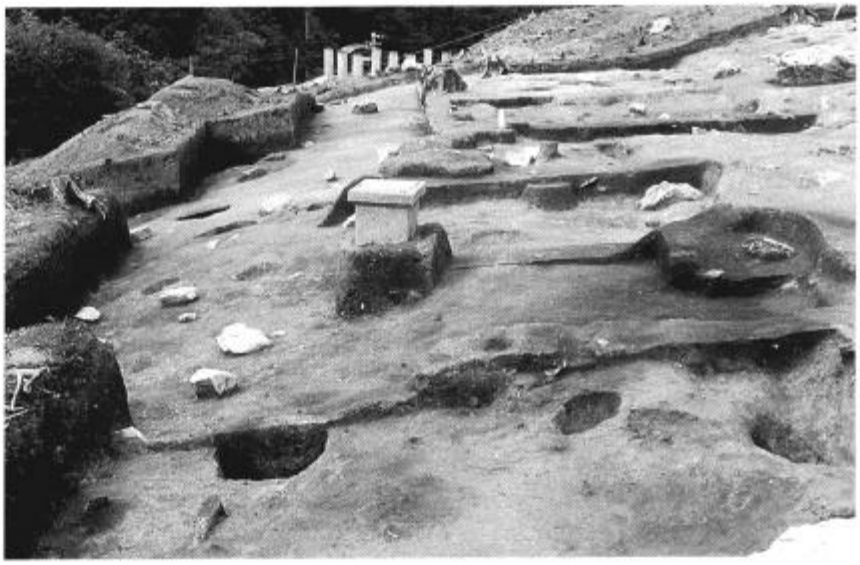
図版 3　第117次

SI1274竪穴住居跡
（南→）
埋土上位に土塁盛土
が厚く積まれる

SI1266竪穴状遺構
（南→）
中央に地床炉
手前はSI1289

下はSI1266土師器坏
出土状況
左：③　中：④⑤
右：①②
（数字は挿図に対応）





拡張区の竪穴状遺構群
（東→）
SI1280・1281

SI1295竪穴状遺構
（北→）
Bトレンチ北端部

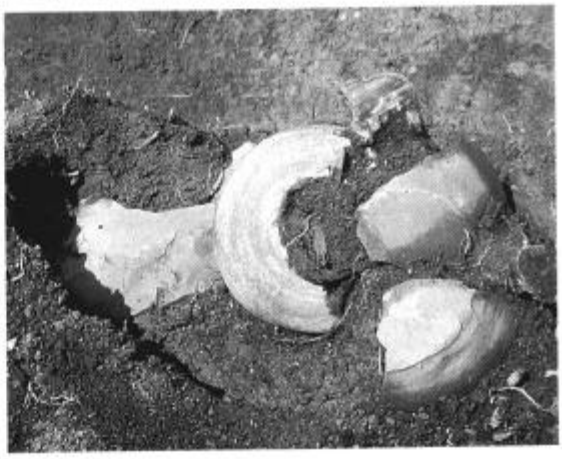
SK1273・1302土坑
（西→）
手前の礫露出個所が
SK1302、半截してい
るのがSK1273

図版5　第117次

SD1268・1277溝跡
（南東→）

SX1264墳墓
SX1265隅丸方形
溝状遺構　（北→）
矢印の個所から陶器
（壺＋擂鉢）出土

SX1264出土陶器出土
状況
左：西から
右：真上から
陶器の下・脇に礫が見
える



SX1265隅丸方形
溝状遺構全景（北→）
写真中央奥に円礫群
左奥はSX1264墳墓
陶器出土個所

溝内で検出の円礫群下
位面、東→
上位面でも同位置で礫
が出土していた

SX1264出土陶器
左：壺
右：擂鉢（内面）

図版7　第117次

SX1283火葬墓
（北→）
奥に写っているのは木根、攪乱を受けている

SX1284火葬墓
（北→）
径30cmの円内にまとまる

同上　部分　（南→）

SX1294火葬墓
（西→）
骨片が僅かに点在するのみ

中世の焼土遺構群
（南→）
左からSN1307・SN1287
古代の竪穴埋土最上位に構築

Gトレンチ北側全景
（北→）
トレンチ内で表土が窪んで見えるのは、
SK1296（手前）
SK1297（奥）
地山基盤層の礫が多く露出している

図版9　第117次

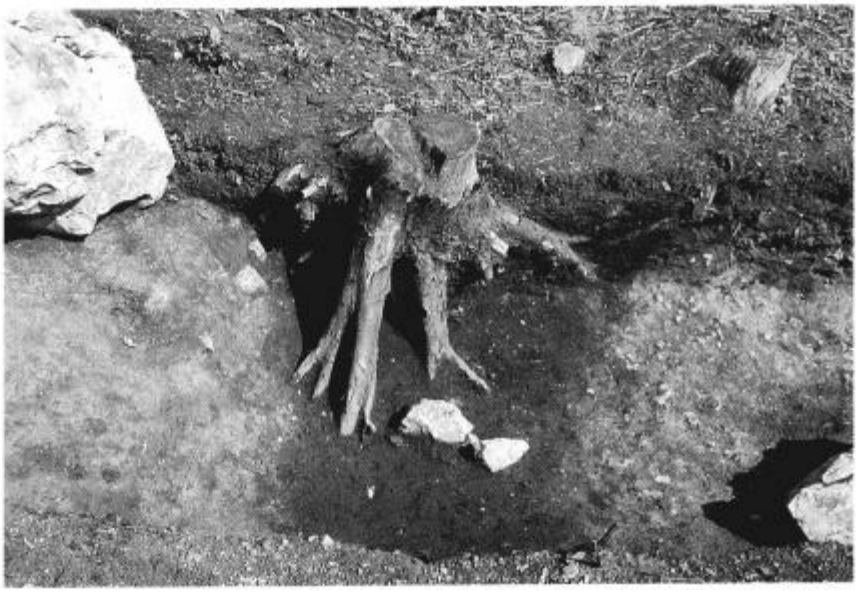
土塁・空堀現況
（南→）
右側の高まりが
SF1300土塁
左側がSF1301土塁
中央の窪みが
SD877空堀

SF1300・1301土塁
SD877空堀
土層断面　（東→）
Cトレンチ内
手前にSI1274

SD877空堀
土層断面　（東→）
Bトレンチ内
奥に外郭西門

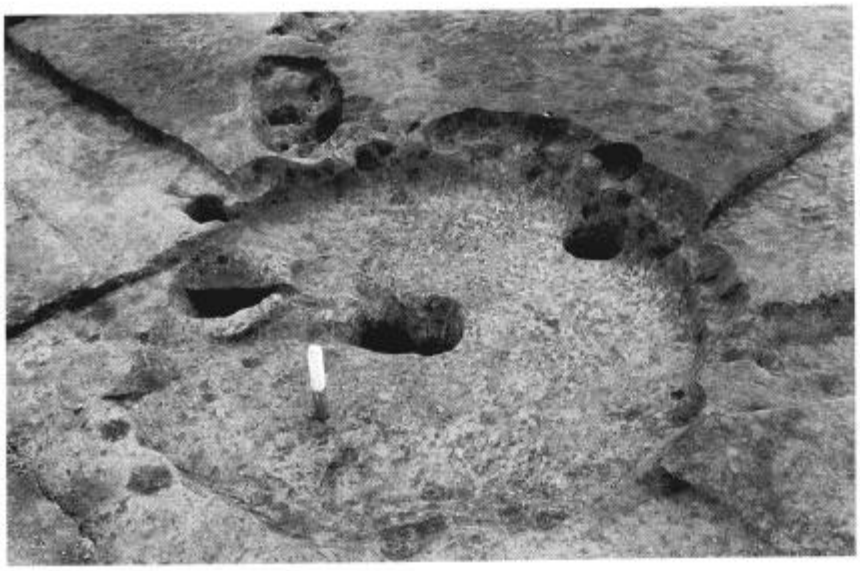
SD877空堀
Dトレンチ内
遺構確認状況
（南東→）

同上　完堀
（南東→）
人頭大の礫が堀内に落ち込んでいる



SD877空堀
Gトレンチ
遺構確認状況
（西→）

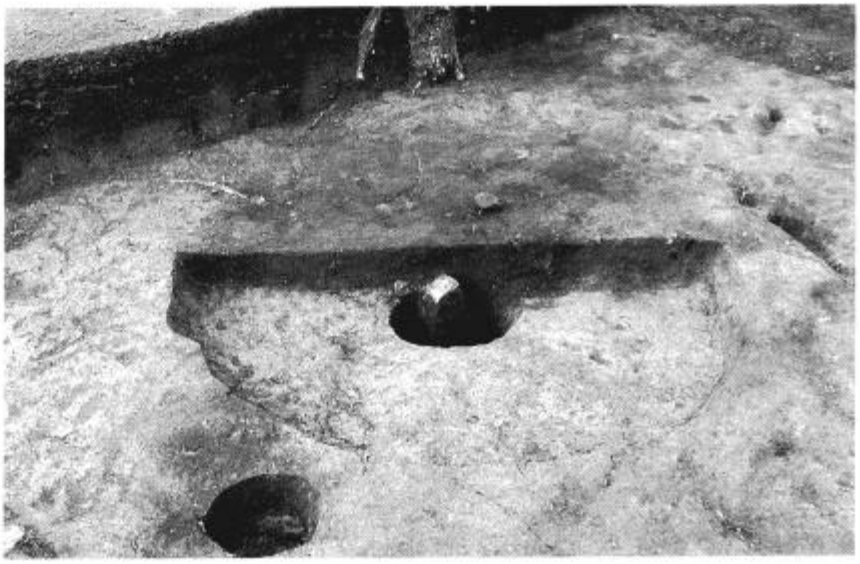
図版11　第117次



SI1282竪穴状遺構
（北→）

同上　特殊ピット検出状況　（北西→）
地山の掘り残しで周堤を構築している

SI1269竪穴状遺構
（西→）
床面直上に人頭大位の礫5個置く
中央の礫の下に柱穴が位置、写真撮影時は未確認



SI1285竪穴状遺構
（南東→）
中央の柱穴内に礫を入れている

SI1270竪穴状遺構
（南→）
中央の小礫の下に柱穴が位置、この段階では未掘
SI1285同様柱穴内に小礫を入れていたと思われる

SK1293土坑（南→）
周溝をもち、壁は垂直に掘り込まれる

第４章　第118次調査の概要

第１節　調査経過

第118次調査は、先行する第117次調査と並行する形で進めており、５月29日から11月22日までを調査期間としている。以下では調査日誌よりその経過を抜粋する。

５月29日、昨年度第115次調査区の北側を対象に粗堀を開始する。調査区の北東部から掘り始める。６月１日、遺物は縄文時代の半円状扁平打製石器数点、石斧１点などが出土する。今年も土師器・須恵器よりも縄文が多いのだろうか。２日、115次調査区南側で確認していた硬質泥岩分布域の礫を再び掘り出す。これは来跡見学者に見ていただくことと、秋に予定している現地説明会に対応するためでもある。７月17日、粗掘り再開。19日、予定箇所の粗掘りを終了し、ジョレンによる第Ⅱ層以下での遺構・遺物確認調査に入る。北側では第Ⅱ層が比較的厚く堆積している。

９月25日、第Ⅱ層以下の掘り下げ再開。調査区の西部で建物の掘形らしきプランが見えてきた。昨年度一部確認していたＳＢ1222の北側部分か。周辺での遺物は土師器・須恵器も出土しているが、縄文土器・石器も多い。26日、やはり掘形プランはＳＢ1222のものと確認される。また東西方向の溝（板塀跡か）も検出する。

10月11日、遺構精査に入る。16日、ＳＢ1222は２×３間の規模であり、掘形は２時期あることが確認される。17日、ＳＢ1222の全体写真撮影を行う。撮影後、直ちに平面図作成に入る。25日、本日の顧問会議現地見学に合わせ、調査区全体の清掃を行う。東西方向の板塀跡は、溝底面に板状の柱を立てていることを再確認する。28日の現地説明会に備え、建物に白い紐を張り、その位置と規模を目視できるようにし、板塀跡の柱痕（掘形）には長さ１ｍのピンポールを立てた。30日、仙北町主催の払田柵跡保存管理計画策定指導委員会の一行が現地を見学する。31日、平面図はほぼ終了し、レベル計測を始める。

11月に入り、土坑の断面図、平面図の補足・レベル計測を断続的に行い、13日からは埋め戻しを実施する。機材の撤収等を経て22日現地での野外調査を終了した。

第２節　検出遺構と遺物

１　調査区の立地と基本層序

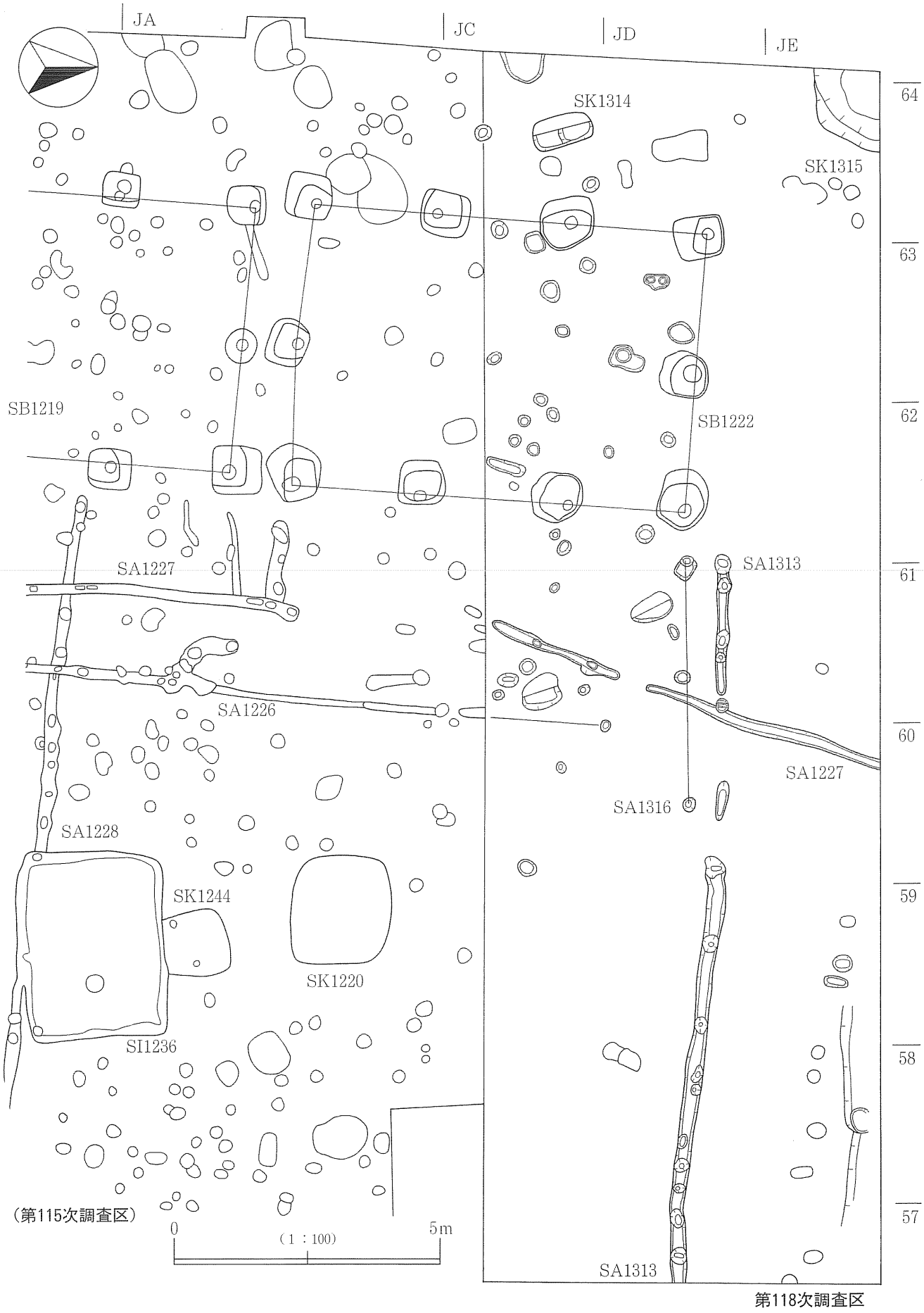
第118次調査区は政庁の西約150ｍに位置し、長森丘陵地西部では最も高位となる平坦地から北側にやや下降する位置にあたる。昨年度調査した第115次調査区の北側に隣接し、標高は50ｍである。現況は杉林・雑木林である。

調査区の基本層序は、調査区北西隅、ＳＫ1315の南側で観察した。土層は第42図参照。

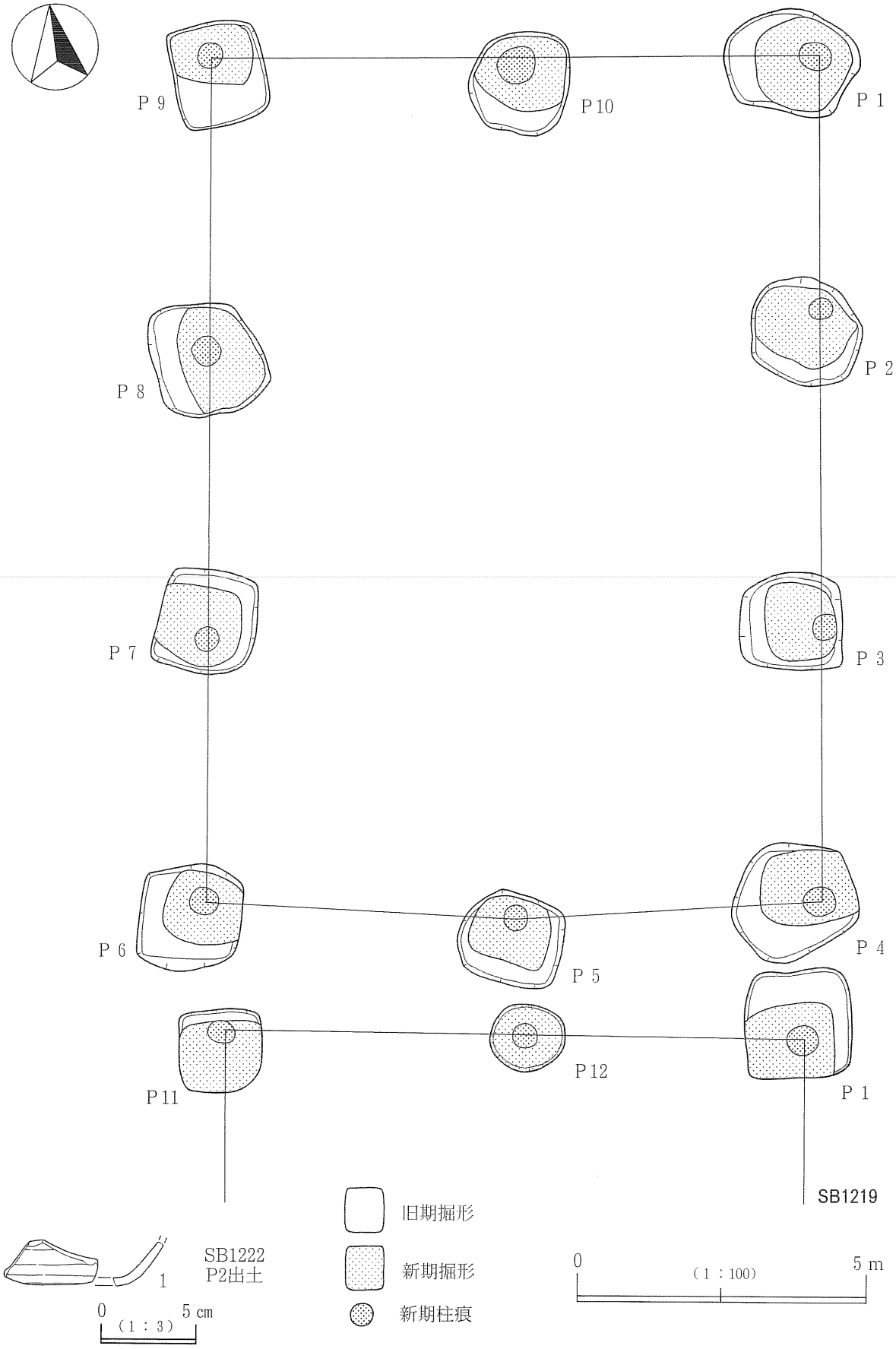
第Ⅰ層　：暗褐色土（7.5YR3/4）表土、層厚10㎝前後。

第Ⅱａ層：暗褐色土（7.5YR3/4）層厚20㎝前後、ａ～ｃ層とも層境不明瞭。

第Ⅱｂ層：暗褐色土（7.5YR3/3）層厚15㎝前後。



第40図　第118次調査区遺構配置図



第41図　第SB1222掘立柱建物跡

第Ⅱｃ層：褐色土（7.5YR4/3）層厚10㎝前後

第Ⅲａ層：黒褐色土（10YR2/3）第Ⅲｂ層中にﾌﾞﾛｯｸ状に入る。

第Ⅲｂ層：暗褐色土（10YR3/3）層厚20～25㎝、調査区南側では同層未確認、Ⅱ層の下がⅣ層。

第Ⅳ層　：暗褐色土（10YR3/4）地山漸移層、層厚10㎝前後。

第Ⅴ層　：褐色土（10YR4/4～4/6）地山、第115次調査区南側のような基盤礫層の露出はない。

2　検出遺構と遺物

本次調査で検出・精査した遺構は、掘立柱建物跡１棟、板塀跡２列・柱列１列、土坑２基などである。その他竪穴状の遺構（調査区北東側）や柱穴を確認しているが未精査であり、本項ではふれない。

これら遺構の構築時期は、その確認面・出土遺物の検討から土坑１基（ＳＫ1315）が縄文時代であり、他は古代と判断される。遺構外出土の遺物も、古代及び縄文時代に分けられ、第117次で確認したような中世の遺物はない。以下では、検出遺構とその出土遺物の概要を報告する。なお今次調査で新規に付した遺構番号は、1313～1316までであり、1222・1227は第115次で登録していた番号である。

（１）古代

①ＳＢ1222掘立柱建物跡（第41図、図版13・14）

調査区西部で検出した桁行３間×梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。昨年度第115次調査において、建物の南側を確認しており、本次調査においてその全容が明らかとなった。

柱掘形は平面観察により新旧２時期の重複が明瞭に認められた。旧期では一辺が90～110㎝の比較的整った隅丸（長）方形を示す。その埋土は地山粘土を主とし、黒褐色シルト質土を混入させる。新期は旧期掘形内の東あるいは北側にややずれるが、旧期を拡張して構築するものはなく、一辺の長さが65～80㎝に縮小し、その形状も方形を基調とはするものの不整形に近くなる。その埋土は暗褐色シルト質土が主となり、地山粘土小ブロックや炭化物（細片）が混じる。

新期柱掘形には径20～25㎝柱痕跡が認められる。これによると新期の柱間総長は、桁行で7.4ｍ、梁行で5.3ｍとなる。東側桁行柱間は、北から2.2ｍ＋2.8ｍ＋2.4ｍ、西側は、北から2.6ｍ＋2.5ｍ＋2.3ｍである。梁行は、南北とも東から2.6ｍ＋2.7ｍの数値を示す。

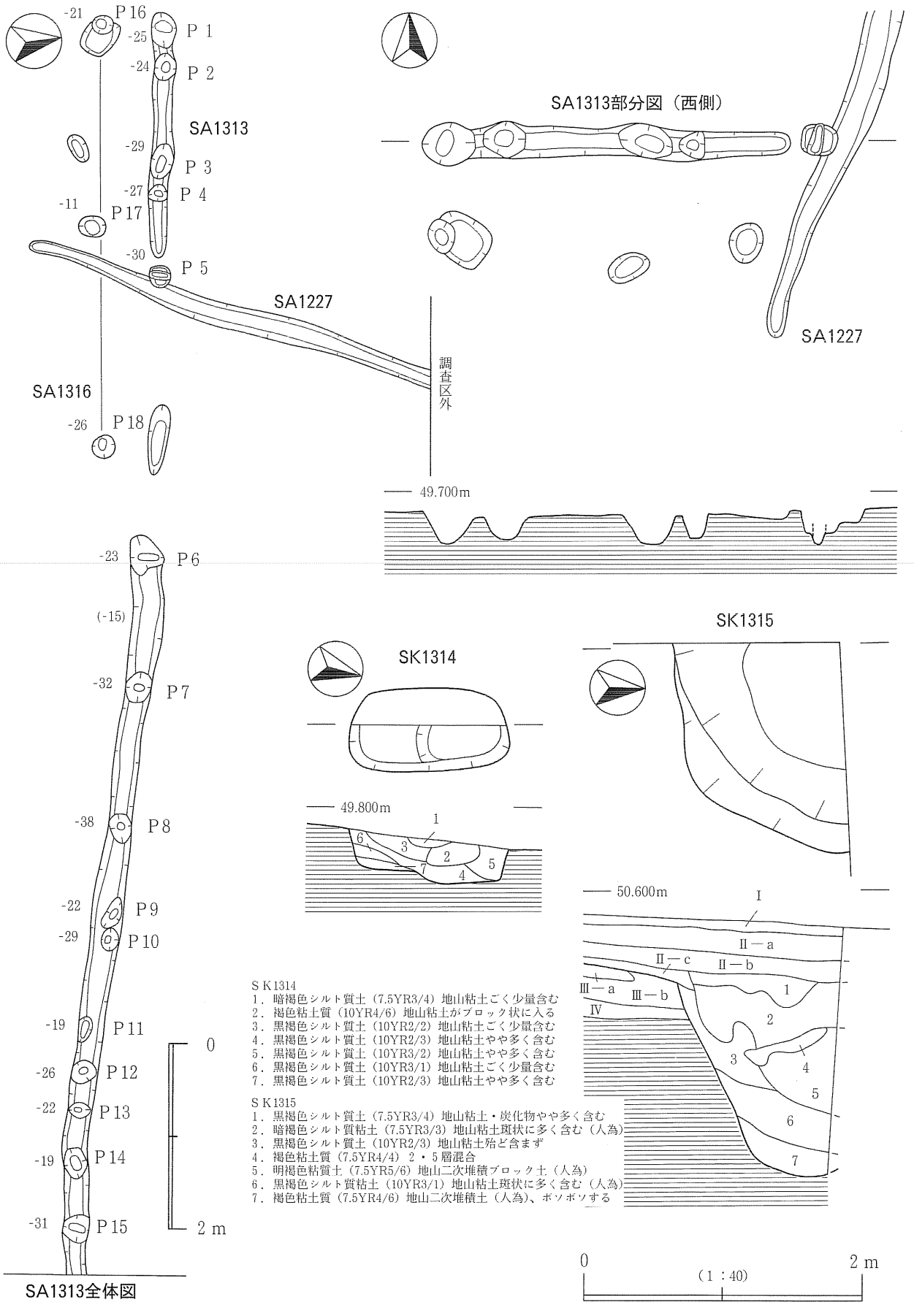
遺物はＰ２掘形確認面より須恵器坏（第41図左下）と土師器坏の破片が各１点出土している。

②板塀跡・柱列

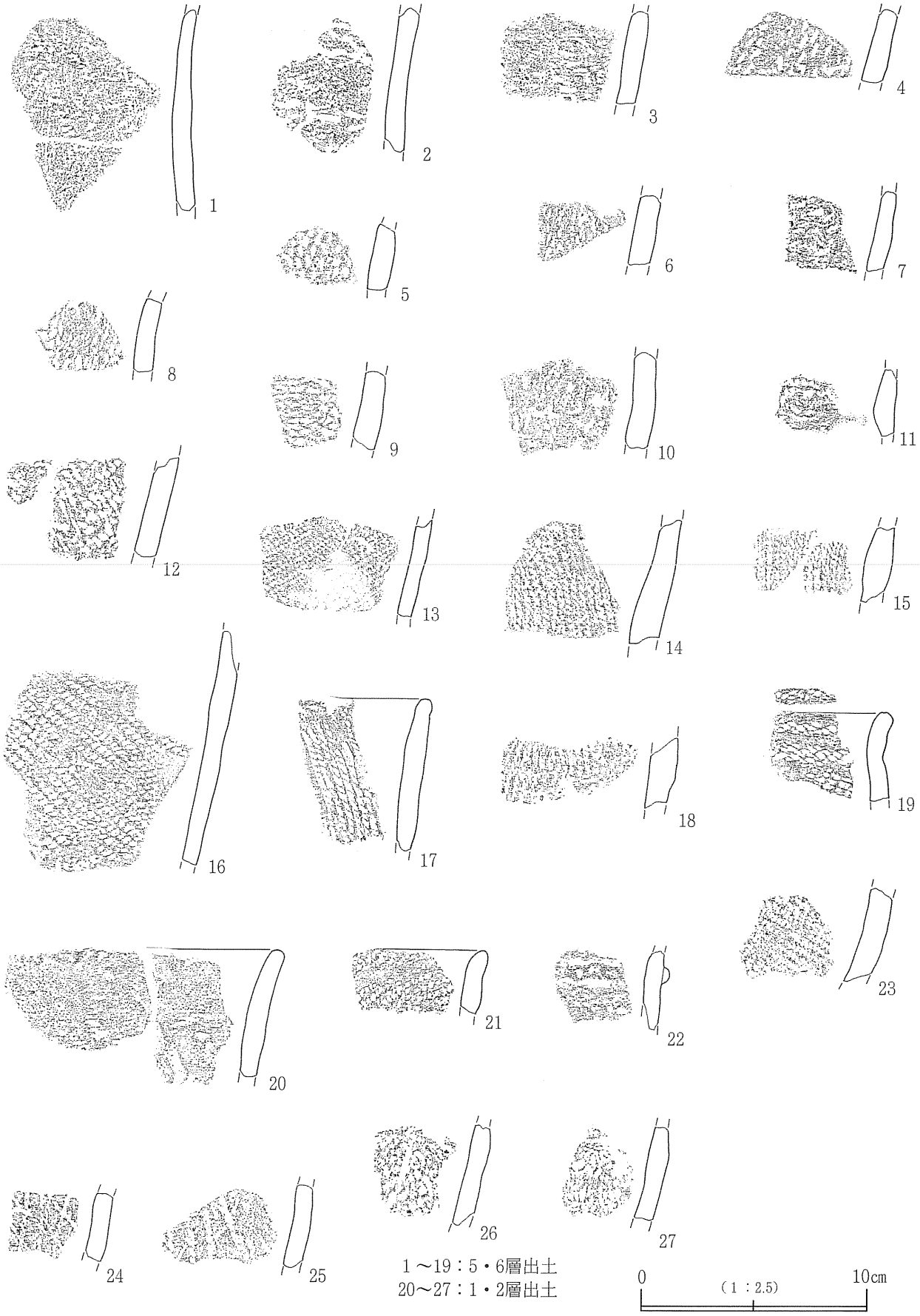
検出した板塀跡は２列であるが、１列は昨年度に確認しているＳＡ1227の北側延長部と見ることができる。これらは溝状の遺構として確認しているが、溝底面に円形・長方形状（板状）の掘り込みが不規則ながら認められることから板塀跡と判断したものである。各遺構とも遺物の出土はない。

ＳＡ1227板塀跡（第42図、図版13）

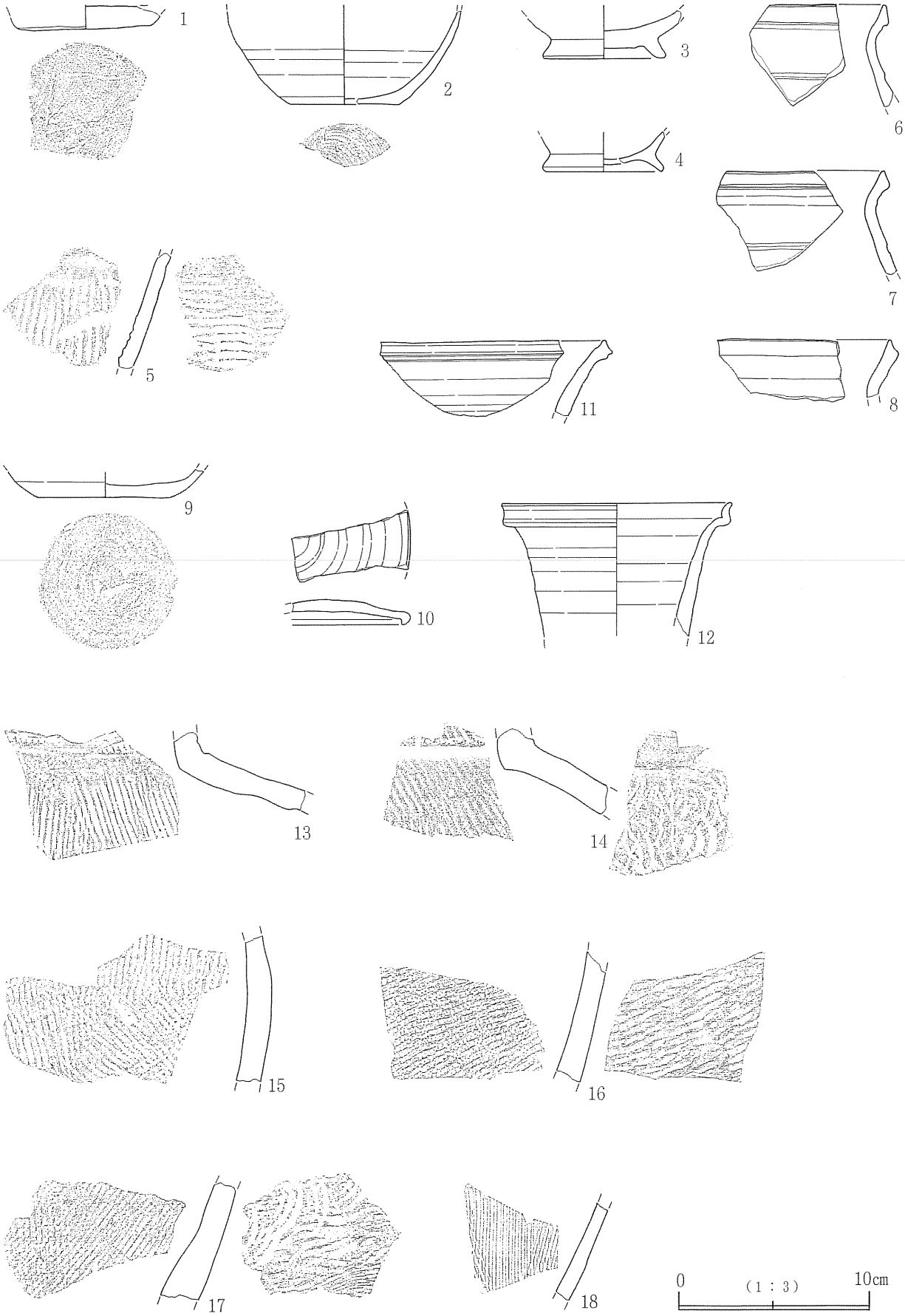
調査区中央を南北方向に延びる板塀跡である。遺構の北端は調査区外に及ぶ。ＳＢ1219（昨年度調査の南北棟建物）・ＳＢ1222掘立柱建物の東側桁から東に2.5ｍ前後の距離を保って南北に延びる。ただ本年度調査した箇所では北東側にその向きを変える。確認した長さは昨年度分を含めると36ｍ程となるが、第115次調査区北端部の３ｍ間が途切れることになる。溝の幅は概ね20㎝前後、深さは10～25㎝である。本次調査で検出した長さ4.6ｍ分については、溝底面に明確な柱穴等の掘り込みは見られない。次の述べるＳＡ1313と交差重複するが、その新旧は不明である。



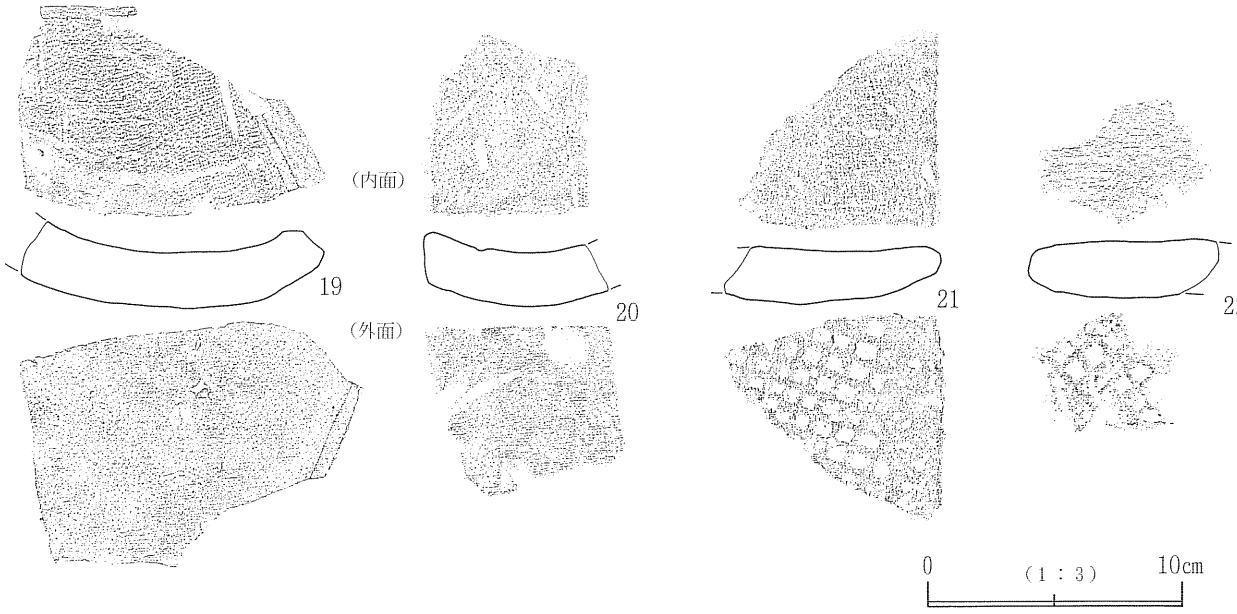
第42図　第118次調査区検出遺構



第43図　SK1315土坑出土遺物



第44図　遺構外出土遺物（1）土師器・須恵器



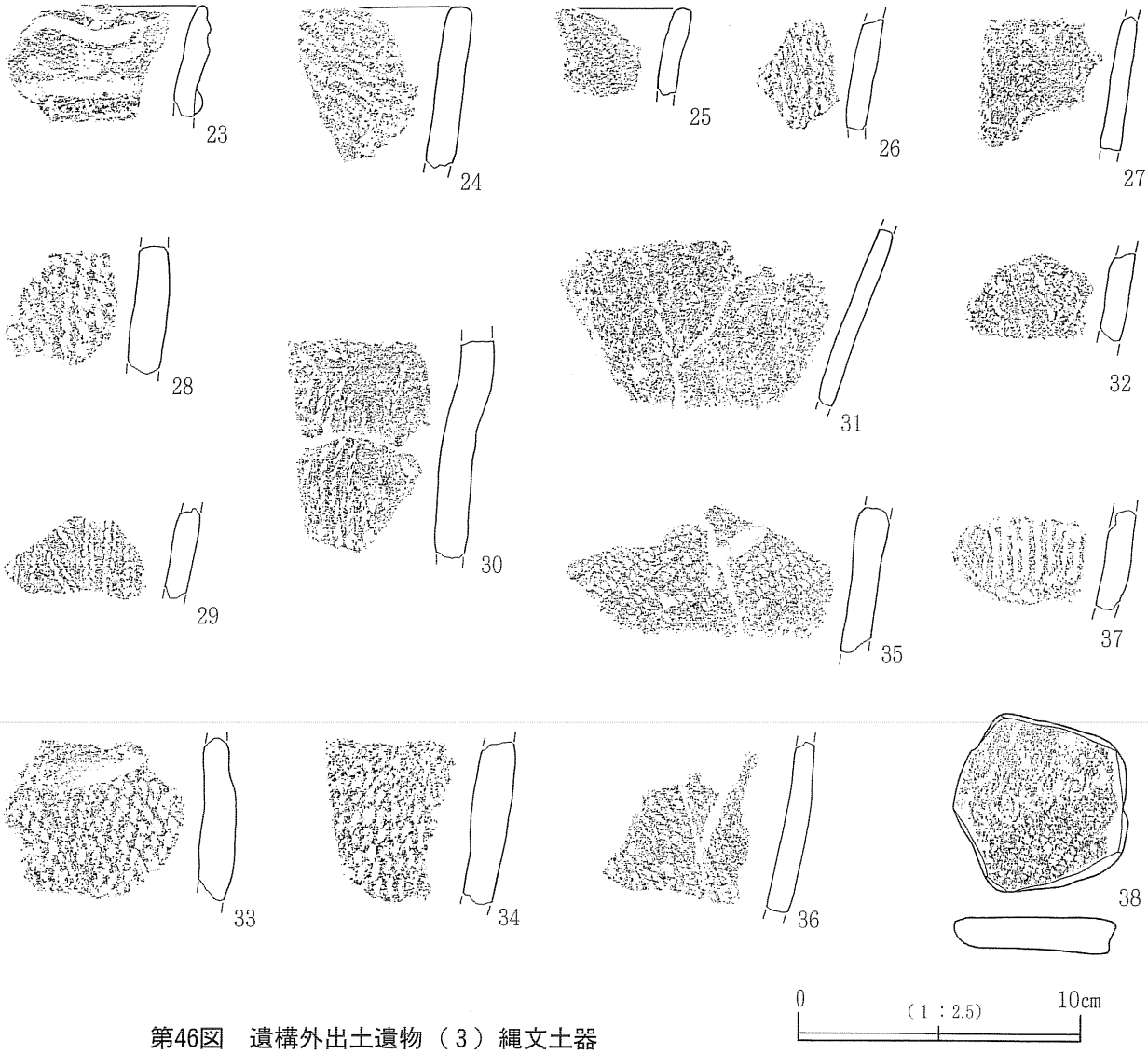
番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	底径指数	高径指数	外傾度
1	土師器	坏	表採	非ロクロ？、内面黒色処理、底面ナデ		7.2	(1.3)			
2	土師器	坏か甕	JE63・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り		5.8	(5.0)			
3	土師器	台付坏	JE57～59・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り		6.5	(2.5)			
4	土師器	台付坏	表採	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り		6.2	(2.1)			
5	土師器	甕	表採	外：平行タタキ、内：平行当て具						
6	土師器	甕	表採	内外：ロクロ調整						
7	土師器	甕	JE63・Ⅱ層	内外：ロクロ調整						
8	土師器	甕	表採	内外：ロクロ調整						
9	須恵器	坏	JE63・Ⅱ層	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り		7.3	(1.4)			
10	須恵器	蓋	表採	内外：ロクロ調整						
11	須恵器	広口壺	表採	内外：ロクロ調整						
12	須恵器	長頸壺	表採	内外：ロクロ調整	12.2		(7.2)			
13	須恵器	甕	JE57・Ⅰ層	外：平行タタキ、内：ナデ						
14	須恵器	甕	JE57・Ⅰ層	外：平行タタキ、内：青海波当て具						
15	須恵器	甕	JE57～59・Ⅱ層	外：平行タタキ、内：ナデ						
16	須恵器	甕	表採	外：平行タタキ、内：平行当て具						
17	須恵器	甕	JE57～59・Ⅱ層	外：平行タタキ、内：青海波当て具						
18	陶器	播鉢	JE57～59・Ⅱ層	ロクロ調整、内面卸目						
19	瓦	平瓦	JE57・Ⅰ層	凸面：ナデ、凹面：布目						
20	瓦	平瓦	表採	凸面：ナデ、凹面：布目						
21	瓦	平瓦	JE63・Ⅰ層	凸面：格子叩き、凹面：布目						
22	瓦	平瓦	JE63・Ⅱ層	凸面：格子叩き、凹面：布目						

第45図　遺構外出土遺物（２）平瓦

ＳＡ1313板塀跡（第42図、図版13）

調査区中央から東側にかけて東西方向に延びる板塀跡である。遺構の東端は調査区外に及ぶ。西端はＳＢ1222北東隅柱掘形の北東１ｍにあり、これより西には延びない。確認した長さは13.7ｍであり、溝の幅は20～30㎝、深さは８～15㎝となる。溝底面から柱穴が15本（Ｐ１～15）掘り込まれ、その深さは19～38㎝としっかりしたものである。柱穴のうちＰ５・６は、長さ22㎝×幅６～８㎝の長方形状の掘り込みである。これは板状に加工した材を柱として埋設していた痕跡と考えられる。板材長軸は、溝軸線（東－西）に対し直交する。このＰ５・６間（３ｍ）は溝が途切れる箇所でもあり、出入口等の施設が伴っていた可能性もある。

本板塀跡は確認位置・方向性から、ＳＢ1222掘立柱建物跡との関連が想起される。



第46図　遺構外出土遺物（3）縄文土器

ＳＡ1316柱列（第42図）

ＳＡ1313板塀跡の南約70cmには、これと同一軸線をもつ柱列（柱穴３本、Ｐ16～18）を確認した。西端Ｐ16は、ＳＡ1313の西端Ｐ１と南北に並ぶ位置となる。各柱穴は、径25～30cmの円形で、深さはＰ16で21cm、Ｐ17で11cm、Ｐ18で26cmとなる。柱間距離はＰ16－17間2.2m、Ｐ17－18間2.35mである。本柱列は北側のＳＡ1313板塀跡あるいは西側のＳＢ1222掘立柱建物跡との相関が考えられる。

③土坑

ＳＫ1314土坑（第42図）

調査区北西部、ＪＣ63の第Ⅲｂ層下面で検出した。ＳＢ1222Ｐ８の西約１mに位置する。規模は長さ115cm×幅60cmであり、南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは北側で30cm、南側で24cmである。堆積土は７層に分けられるが、２層は地山粘土を人為的に入れたもののようである。他３～７層は南側（緩斜面上位側）からの自然流入土と観察された。出土遺物はない。

（２）縄文時代

ＳＫ1315土坑（第42・43図、図版14）

調査区北西隅で検出した。大型の土坑と考えられるが、その一部のみの精査であり、規模・形状は

不明である。現況での長軸は1.5mである。深さは断面観察により第Ⅱｃ層上面から掘り込まれていることを確認し、最深で1.45mとなる。堆積土は７層に分けられるが、下位３層（５～７層）は地山粘土を人為的に埋め戻している。

遺物は１～６層にややまとまって出土している。堆積土最上位には須恵器坏・蓋破片が２点混在するが、その他は縄文土器片・石器類である。１～19が下位５・６層、20～27が上位１・２層出土である。縄文原体・胎土（一部に繊維を含む個体あり）などから多くは前期に属すると考えられる。

３　遺構外出土遺物（第44～46図）

遺構外の出土遺物は、古代の土師器・須恵器・瓦、縄文時代の土器・石器類、近世の陶器（擂鉢、18）がある。調査区は北側に向かってやや傾斜する位置にあり、遺物も北側により多く出土する傾向にある。これらは第Ⅱ～Ⅲ層から散在的に出土している。

（１）古代（１～17、19～22）

出土した器種は、土師器坏・台付坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・長頸壺がある。１～４は土師器坏で、１は非ロクロ成形と思われる内面黒色処理された坏である。底面には擦痕状のナデが見られる。２は小型の甕の可能性もある。５～８は土師器甕である。６・７は同一個体と考えられる。９は須恵器坏であり、底面に回転ヘラ切り痕を残す。10は須恵器蓋であり、内面に摩耗痕跡が見られることから転用硯として使用されていた可能性がある。11は須恵器広口壺、12は長頸壺となる個体であろう。13～17は須恵器大甕破片である。19～22は平瓦である。凹面は基本的に布目が認められるが、20は糸切り痕が残る。凸面は19・20がナデ、21・22が格子叩きである。

（２）縄文時代（23～38）

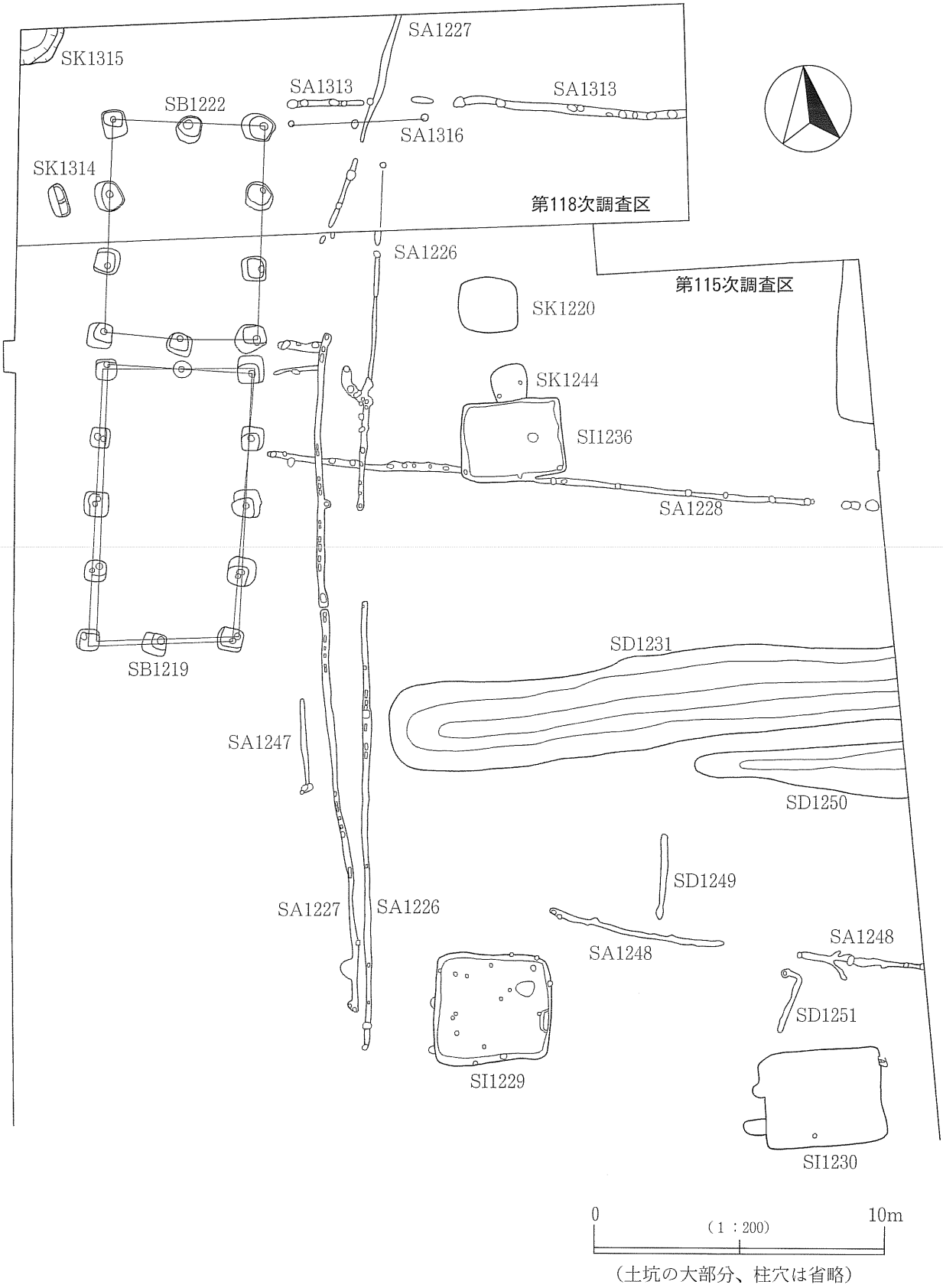
遺構外の縄文土器は、前述のＳＫ1315出土土器と近似した様相を示すことから、前期に帰属するものと考えられる。28・30の胎土には明瞭に繊維が混入している。23と29は胎土・色調等から同一個体の可能性がある。38は土器片を五角形状に整形させた円盤状土製品である。

第３節　小結

本次調査は、政庁西方における推定官衙域の探査を目的に実施したものである。当該地区に着手したのは、昨年度の第115次調査が最初であり、今年度が２年目となる。ここでは２ヶ年の概要を政庁東方域遺構群との比較を加えまとめてみる。

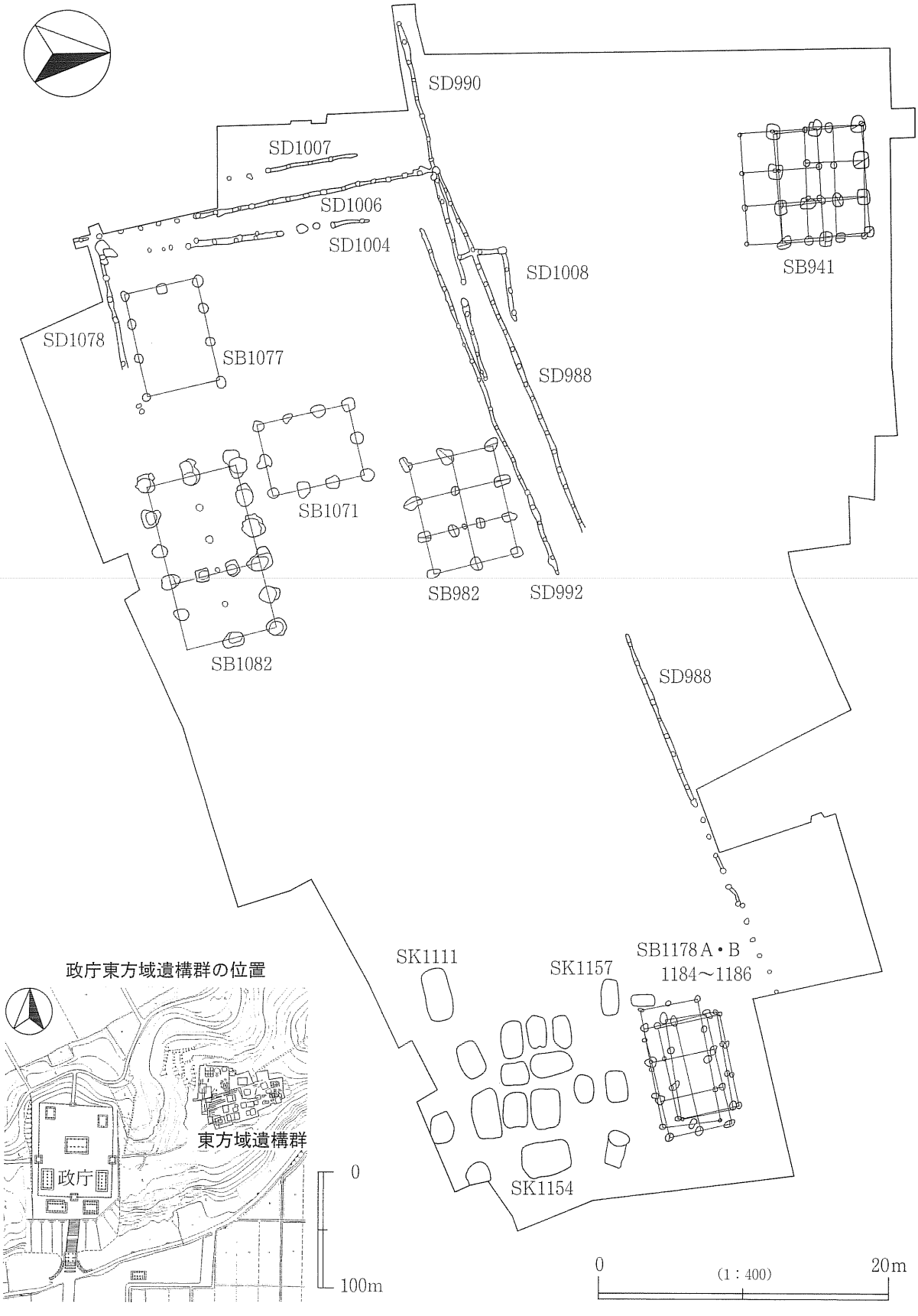
まず特筆すべき点は、政庁西方の平坦域にも古代の遺構群が面的な広がりをもって確認されたことである。検出遺構は、掘立柱建物跡２棟（各２時期）とこれに並行あるいは直交する複数の板塀・柱列跡、鍛冶関係とも目される工房跡（竪穴状遺構）、幅広で浅い溝跡、大小の土坑等が比較的整然と配される。これらの時期は出土遺物・火山灰（十和田ａ）の介在状況等から９世紀後葉・末～10世紀前葉となる。しかし現在までのところ９世紀後葉以前の資料は未確認である。

遺構の配置は、南北棟のＳＢ1219・1222建物の東側にＳＡ1226・1227板塀が南北方向に延び、両者の相関が推測される。２条の板塀は共に長さ３ｍにわたり途切れる箇所が存在し、ここに出入口（門）状の施設が想起できる。その位置はＳＡ1226ではＳＢ1219東面に、ＳＡ1227はＳＢ1222東面にあたり、



(土坑の大部分、柱穴は省略)

第47図　第115・118次調査区における建物と板塀の配置



第48図　政庁東方域Ｅ期の遺構配置略図

それぞれの関係と時期差も生じることになる。また本次調査で新規に検出された東西方向のＳＡ1313板塀があり、これもＳＢ1222建物との係りを指摘した。このように、当該地区では建物と南北・東西の板塀が西暦900年を前後する時期において、建て替えを伴いながら存続したと言えよう。

一方、政庁を挟んで東方に位置する平坦域は、平成３年度から７年度にかけて４度（第90・95・100・105次調査区）にわたる調査が行われており、その総面積は3,300㎡である。当該地区においても西方域同様の掘立柱建物跡・板塀跡・柱列・竪穴住居跡・土坑等の遺構が検出されている。ところが、両者における決定的な差は、遺構構築・廃棄時期においてである。東方域における上限は、創建にあたっての盛土整地地業や建物の造営工事に携わったであろう工人等の竪穴住居跡が構築される８世紀最終末～９世紀初頭（Ａ期直前）から、下限は政庁Ｖ期・外郭線Ｄ期相当の掘立柱建物と板塀が作られる10世紀中葉～後葉（Ｆ期）までの７時期区分がなされている。まさに払田柵の創建から終末期までの遺構が重複を繰り返しながら東方域平坦地には形成されていたのである。

西方域の遺構群を東方域の時期区分の中に位置づけると、Ｄ期・Ｅ期にあたる。Ｄ期は９世紀後葉であり、主に竪穴住居で構成される。「小勝」の墨書土器が出土したのも本期竪穴内である。竪穴はカマドをもたず地床炉・焼土をもつものや漆紙文書の出土などから「漆塗作業や何らかの工房的な使い方」を推測している。Ｅ期は10世紀前葉～中葉であり、南北・東西に延びる板塀と、これに画された内部に整然と建物が並ぶ。このように見ると、西方域の遺構群は東方域Ｅ期の遺構配置のあり方に近似する。建物配置・規模・検出数等に差異はあるものの、Ｅ期にのみ、類似する施設を西方域平坦面にも構築していたことは間違いないようである。

註　秋田県教育委員会「第105次調査」『払田柵跡－第103～106次調査概要－』1996（平成８年）

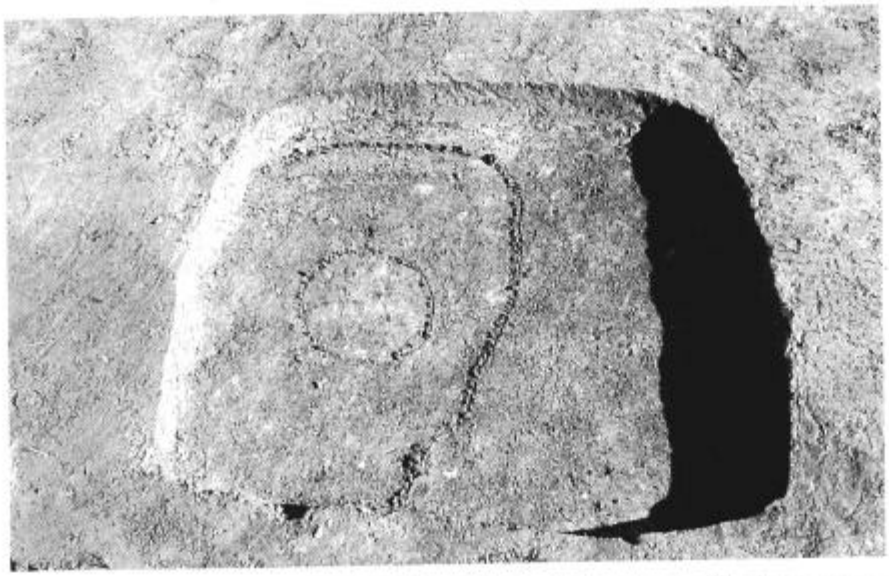
第118次調査区全景（西→）

手前はSB1222掘立柱建物跡

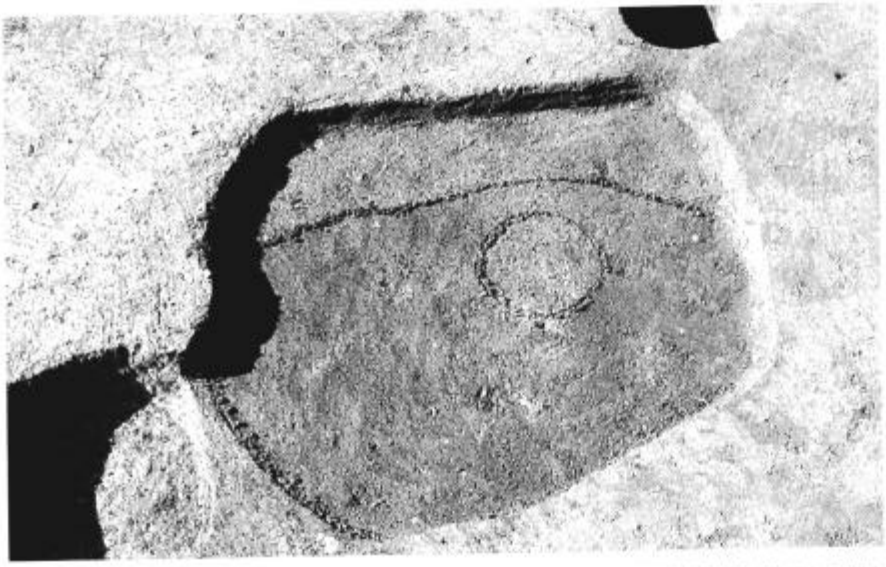
調査区東側と板塀跡（北西→）

北側（写真左手前）に向かっていくらか傾斜する、林の奥が政庁域

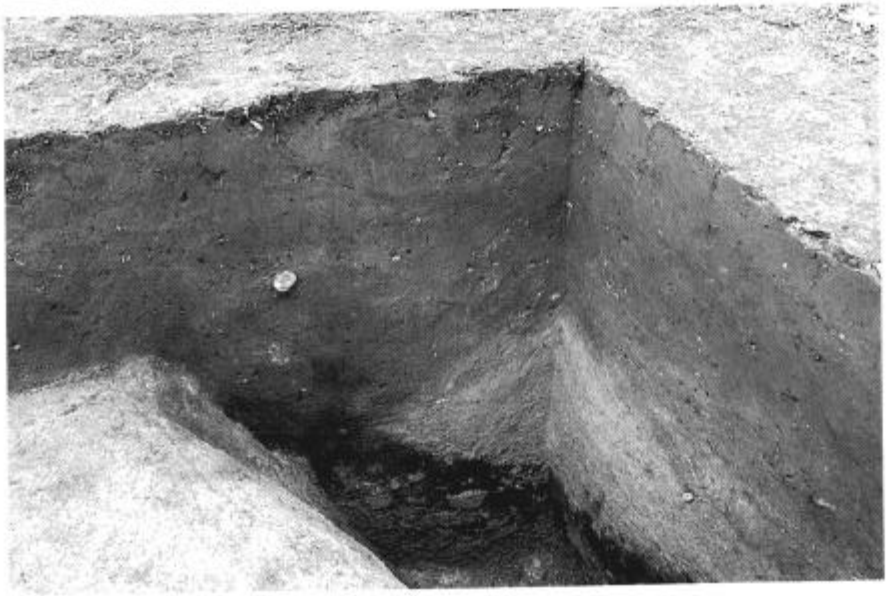
図版14　第118次



SB1222
掘立柱建物跡
Ｐ９掘形（西→）



同上
Ｐ８掘形（東→）



SK1315土坑
（東→）

第５章　調査成果の普及と関連活動

１　現地説明会の開催

『払田柵跡（第117・118次調査）現地説明会』

平成12年10月28日（土）13:30～15:00　　好天に恵まれ、117名の参加を得た。

２　諸団体主催行事への協力活動

発掘調査の現場や、政庁跡、外柵南門・大路周辺地域などにおいて、下記諸団体などの遺跡視察・研修・見学会に対し、払田柵跡の説明を行った。

仙北町史跡の里交流プラザ「柵の湯」従業員（４月13日）、平鹿町教育委員会（５月11日）、横手市教育委員会社会教育課（５月24日）、秋田大学教育文化学部教官・学生（６月１日）、福島県大玉村教育委員会（６月２日）、秋田聖霊短期大学研究生一行（６月８日）、岩手県水沢市胆沢城跡保存会（６月29日）、仙北南小学校（７月４日）、大曲市短歌サークル（７月11日）、宮城県利府町教育委員会（７月11日）、大曲市文化財保護協会（７月14日）、県生涯学習課文化財保護室（７月14日）、六郷高校１年生（７月19日）、仙南村金沢小学校（７月21日）、岩手県北上市教育委員会（７月27日）、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団（８月２日）、横手市金沢中学校（８月７日）、社会貢献活動研修（教職員10年経過研修、８月８・９日）、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター整理作業員一行（９月26日）、男鹿市民憲章推進協議会（９月28日）、秋田大学教育文化学部日本史研究室（10月２日）、仙北町立北小学校５・６年生（10月18日）、仙北町立南小学校６年生（10月18日）払田柵跡保存管理計画策定指導委員会一行（10月30日）、井川町公民館（10月31日）

なお10月18日には、「まちづくりグループ蝦夷ほたる」が主催する『よみがえる平安の柵－払田の外柵が現代に出現します－』において、外柵に沿って200本の旗を立てるイベントに協力し、仙北町立北小学校・南小学校児童等に払田柵跡の概要を説明した。

３　顧問会議の開催

第51回　平成12年10月25日（水）

第52回　平成13年２月８日（木）

４　史跡払田柵跡保存管理計画策定指導委員会（仙北町主催）への出席

第１回　平成12年10月30日（於：仙北町役場大会議室）

保存管理計画策定趣旨説明・現状報告・現地状況視察

第２回　平成12年12月11日（於：仙北町役場大会議室）

保存管理計画の概要検討　①歴史・考古　②環境整備

第３回　平成13年３月15日（於：仙北町役場大会議室）

保存管理計画の概要検討　①農業環境　②土木環境　③遺跡の活用

5　払田柵跡環境整備審議会（仙北町主催）への出席

平成13年２月23日（於：仙北町役場）

6　第29回大規模遺跡調査連絡協議会への出席

平成12年９月13日～14日（於：島根県大田市町並み交流センター）

7　報告・講演

高橋　学『払田柵跡および近郊の史跡について』六郷高等学校ふれあい体験学習

平成12年７月１日　場所：県立六郷高等学校

高橋　学『菅江真澄と発掘調査』菅江真澄研究会総会

平成12年７月23日　場所：秋田市古四王神社社務所

高橋　学「払田柵跡－平成12年度調査の概要－」『第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

平成13年２月24・25日　場所：東北歴史博物館（資料報告）

高橋　学「払田柵跡（第117・118次調査）」『平成12年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

平成13年３月３・４日　場所：鷹巣町たかのす風土館

8　資料の貸し出し

秋田県立博物館　考古部門展『00’秋田発掘調査速報展』　平成12年３月８日～４月19日

貸し出し資料：平成11年度出土資料（土師器・須恵器・縄文土器など）

秋田県立博物館　考古部門展『木の道具と器』　平成12年４月25日～平成13年３月４日

貸し出し資料：曲物、漆器椀、平成11年度出土資料（木製品など）

岩手県立博物館　開館20周年記念特別企画展『北の馬文化』　平成12年10月５日～11月26日

貸し出し資料：絵馬（第112次調査出土）

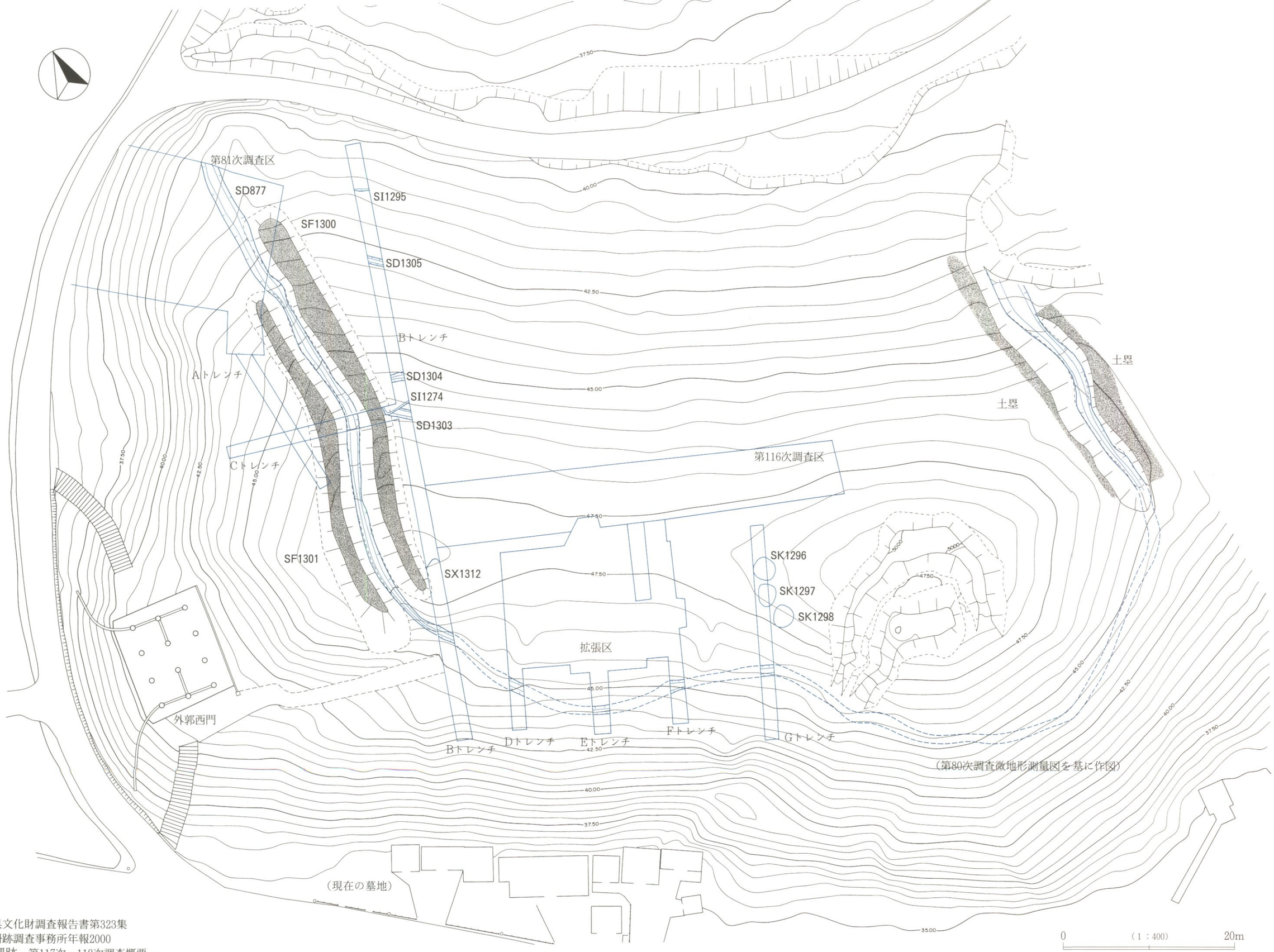
現地説明会での一コマ
（第117次調査区にて）

報告書抄録

ふりがな	ほったのさくあと　だい　　じちょうさがいよう
書名	払田柵跡　第117・118次調査概要
副書名	払田柵跡調査事務所年報2000
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第323集
編著者名	高橋　学
編集機関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所在地	〒014－0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
発行年月日	2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほったのさくあと 払田柵跡	あきたけんせんぼくぐん 秋田県仙北郡 せんぼくまちほった 仙北町払田 せんはたまちほんどうしろまわり 千畑町本堂城回 調査地点は 仙北町払田字 長森	53429 53432		39度 27分 57秒	140度 33分 11秒	第117次 20000419 ～ 20001110 第118次 20000529 ～ 20001122	560 180	学術調査 学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
払田柵跡 第117次	城柵	平安時代	竪穴住居跡、竪穴状遺構（鍛冶工房か）、土坑、溝跡	須恵器、土師器 瓦	
	墓域	中世（鎌倉時代）	墳墓（隅丸方形周溝） 火葬墓・焼土遺構 土塁・空堀	須恵器系陶器壺・擂鉢	中世の遺構が検出されたのは初見
	集落跡	縄文時代	竪穴状遺構、土坑	縄文土器・石器	
払田柵跡 第118次	城柵	平安時代	掘立柱建物跡、柱列 板塀跡・土坑	須恵器、土師器	
		縄文時代	土坑	縄文土器・石器	



付図　長森丘陵西部の地形と第117次調査区配置

秋田県文化財調査報告書第323集
払田柵跡調査事務所年報2000
払田柵跡―第117次・118次調査概要―
2001年３月
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所